
Fade-Out

瀬河尚

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a d e - O u t

【Nコード】

N 3 8 5 3 F

【作者名】

瀬河尚

【あらすじ】

ネット社会で生きる若者が何を考え、そしてその先にあるものは？そんな事を書き綴ります。

プロローグ

……解放感という自由に満ち溢れ、数々の達成感と仲間達との同じ時間を過ごせた喜び壮大なほど澄んだ心地よさ、そして充実した日々。

天から落下する一本の槍が、大きく開いた口から垂直に体を貫き大地に突き刺さる。乾いた地平線に建てられた人柱のごとく絶望。更に虚空で打ちひしがれ悶え苦しむほどの心痛……

そんな人乱れた映像をたった1秒にも満たない圧縮されたデータとして脳裏にインストールされている。

見覚えのない部屋。

時々ちらつく蛍光灯。

そして……

それを見つめる虚ろな瞳。

全ては、劣等あるいは普通と評価され続けて15回目の誕生日が過ぎ、高校に入学したときから始まる。

それまでは、小中学と義務教育のレールに乗ってただ惰性に授業を受け、周りのクラスメートや先生に自分の存在価値を伝えることを特にしなかった。

校則で強制的にクラブ活動をしていたおかげで、先輩後輩という上下関係がなんたるかを少し学んだ程度。

興味があつた事といえば、毎週アップロードされる漫画の続きが待ち遠しかったのと新作のゲーム……それと隣のクラスの女の子の名。

告白こそしなかったものの、自分のことを僕から俺と言うようになったのはその頃だった。

今になって考えてみれば、社会人になって自慢できそうな絶好の青春ネタが、空白のパズルピースにしてしまったと後悔している。

もし存在するなら、インターネットのサイトからダウンロードして
上書きしたいぐらいだ。

中学3年生で、進路という言葉が常時念頭に存在するようになって、いくら愚人な俺でも目標について考えることが多くなった。ただその事について深く悩んだ経験もなければ知識もない。そもそもそれが自分にとって如何に重要なのかすら判っていなかった。

尻を叩くように、

「自分の人生の中でいくつかある一つの分岐点だから」

などと妙に少年の心理を貫くような事を言ってくる担任。そんなことを言われればどんな生徒だって嫌でも焦るし悩む。

とはいえ、選択肢の中にエリートと言われる道が含まれているはずもなく、そんなことは他の誰でもない俺の成績表が教えてくれた。つまり就職か進学。

進路相談のため短縮授業で昼までの日、3者面談で自分の順番は16時からだった。この日の為に休暇を取った父と二人で、約束された時間に教室の扉をノックした。

「はい、どうぞ」

普段教室に並べられた机と椅子を後ろの方へ集め、がらんとした部屋の中央には三人分だけ用意されていた。室内は秋の夕焼け色で染まっただけで、人生の岐路がこんなところで決まるのかと思うと少し寂しかった。

「では、こちらへお掛けください」

言われるまま椅子に腰掛ける。

「えっと、今泉 輝君は……」

先生は名簿ファイルから一枚のプリント用紙を取り出し、間違いないか確認してから俺と父の目を交互に見て、

「今どき、中卒で就職する子はほとんどいないから進学でいいですね」

と、その紙を差し出した。

「このプリントに書いてある3校の中から選んで後日、私に提出してください。では、今日はこれで以上です」

父は一瞬身を前に乗り出そうとするが、肩を落とすようにゆっくりと体を元に戻した。

先生は父を見ながら軽く会釈する。

「お父様ご足労ありがとうございました」

「いえ」

父も合わせて会釈する。

あれこれと成績のことで言われると予想してたので、さすがに落胆してしまった。

担任からそれを受け取り一礼して教室から出る。

面談、3分。なんとなく父の顔を見れず、無言のまま下向き加減で下駄箱まで歩く。

今日の為にわざわざ休暇を取って、こんな結果に終わった事に父が不服そうな顔をしているのは見なくても分かる。得体の知れない重圧を背負い、父の背中から数歩距離をとって歩く。

帰路の途中、すれ違った高校生らしき生徒が自転車で下校してるのを目で追いながら父が一言、

「選べるだけ……ましか」

その父の言葉に救われた気持ちがあったのを今でも覚えてる。

後日、志望校のところへ丸を書いて提出した。

プロローグ（後書き）

文章修正 12/09

第一章 春、香る <1>;

春……誰もがその空気に初々しさを感じ新たな門出を思わせる季節。どうにか高校に進学することができていた。

一宮市立青香高等学校。

ここの制服は紺色のブレザーで左胸に校章の刺繍が施されている。下はグレーのズボンに黒の革靴。エンブレムの模様の出来の良さもあってどんな学生でも賢く見えそうな格好だ。

上着に腕を通すとき、やさしく触れる裏地のひんやりした感触が、気持ちを引き締めてくれる。

晴々とした入学式日和。

家から40分ほど歩き、校門の手前で立ち止まって辺りを眺めてみると、校舎の周りに満開の桜が咲き誇っている。その花びらは春のそよ風に乘せひらひらと舞っている。まるで歓迎してくれているように。新入生達はまだ着慣れぬその制服に、早く馴染もうと学校の雰囲気吸収しているかのようだった。

とりあえず中3のとき担任だった青木先生には感謝している。

受験当日、面接の質問の一つに、

「この学校を志望した理由を教えてください」というのがあった。

普段口にしない言葉を色々使って答えただけど、青木先生に要望していたのは男女共学、それと実家から通える範囲であることの2点のみ。

選考した3校の中で、それに該当したのはここしかなかった。

あの進路相談の時、適当にあしらわれたと不満を抱いていた記憶は、今はもう薄れていた。あれこれ時間を掛け選考した結果なのか、それとも仕事の片手間の3校なのかは分からないが、今はいろいろ考えてくれた3校なんだと思えるようになっていた。

とにかく人それぞれここに入学することになった過程はどうであ

れ、これからの3年間を楽しいものにしたいと、そう決意できたことに喜びを感じている。

校門をくぐった脇に大きな掲示板がある。そこには新入生の案内用紙が貼り付けてあった。

どうやら 1 - B 出席番号 5番と決まっているようだ。

冴えないどこにでもいるその5番男子生徒。

ただ、そんな男でも今までに6人の女生徒からアプローチされたことがある。

自分で思っているより異性からの評価はそれほど悪くはないみたいだ。

過去のことをあれこれ思い出すのはあまり好きじゃないけど、大まかにこんな感じだった。

まず事例その1、学校で突然告白しておきながら、数日で返事を聞くまでもなく気が変わったように、友達でいましょう。

事例その2、手を変え品を変えコンタクトしてくるものの、その気がないのを察知したのか特になにもなく自然消滅。

事例その3、友人に相談を持ちかけ間接的に接触を試みるが、友達の友達はやっぱり友達止まり。

まあ、こんなところ。

それにしてもこういうのは、告白した相手も自分と同じ気持ちならすんなり意気投合するのだろうけど、そうでなければ強引に告白してきた相手の存在を意識させることになる。する側は一世一代の大舞台を演じ、された側はその舞台を見て感動するか、それとも落胆するか。

感想はいつでもいいと言われ、数日その主役の事を意識してちらちらと目で追うようにする。そしてどうすれば良いのか考えてみるが、なかなか答えが出ない。自分だけではどうしても判断できないときは、それとなく友達に相談したこともある。しかし……

興味ないなら断れば？

好きか嫌いかのどれかじゃん
お前次第だろ

ほとんどこんな回答。

例外として、

「うらやましい、俺にその子紹介しろ」

こんな輩もいた。

確かに、当事者ではないから深く突っ込んだ助言が言えないのは理解できる。けどあまり判断材料にならない。

「とりあえず、付き合ってみたら？」

とも言われたことがあったけど、どうも安易な気持ちでくっ付いたり離れたりすることが苦手だ。こんな性格だから街角でナンパなんてことはしたこと無いし、逆にされたらその場で間違ひなく断っているだろう。別に硬派を悟るつもりはないが、告白することがいかに大変で体力を消耗する行為であるか知ってる。要するにその事に適当な対応ができないだけ。それはたぶん人生永遠のテーマと言っても過言ではないだろう。

ただ、いつまでも悩んでいるわけにもいかず、相手にも失礼だから日本語の長所であり短所でもある曖昧なこの言葉を使うことになる。

「友達から……」

便利な言葉だけどこれが妥当なところ。

今はまだ自分の気持ちに答えが出せないからもっと時間をかけてゆっくりと考えさせてと言っているようなもの。

するとその日からいっしょに下校したり、休みの日はデートなんてこともしながら、互いが互いを探り合うような状況を続けることになる。

告白した側は気に入られようと必死に努力しようとする。こっち

はすでに気に入られてるわけだから多少優位に行動できる。でもこれは対等じゃないいつも思う。そもそも対等な恋愛なんてものは存在しないのかもしれない。それがとてつもなく嫌だ。だから相手のそんな必死な姿を見ていることが辛くなって距離を置いてしまう。すると相手も察するのか徐々に会話も弾まなくなり、会う回数も少なくなる。

早い話、自然消滅してしまう。

もったいない。

格好つけすぎ。

最低。

まったく傍観者は勝手な事を言ってくれる。

人として成長するにはもつとこういう経験値が必要なのだというのも事実。だが、いくら経験したところでまったく同じ境遇などありえないし、経験が生かせる保証もない。ただこれだけは誰にどう言われようと忘れてはいけないと俺が信じて譲れない事がある。

それは相手の純粋な好意に対してそれを侮辱し汚すような行為だけはしてはならないという事。

分かっちゃいるんだけどな。

思い起こせばそれに抵触するようなことが、少なからずあったような気がする。まだ数少ない経験ではあるけど、自分のそんな所にほとほと嫌気を感じてしまう。ひよっとしたらこれから先、いくつになってもレベルアップのファンファーレを聞くことができないかもしれないという不安に、時々苛まれる。

こんな具合にネガティブな精神状態になる。だから過去を振り返ることに消極的になってしまう。

とにかく運命なのか自業自得なのか、新しい出発はシングルで始まった。

クラスも決まり、これから一年間お世話になる教室を教壇の位置から全体を眺め、自分の出席番号の席に座る。

そして気になるクラスメートや担任の先生が来るのを待つ。

みんなも次々と席に着いて、自分の周りの生徒がどんな人物なのか確認しているようだ。徐々に雰囲気慣れて、みんな前後左右の人と雑談を始めてざわめきが大きくなっていく。

チャイムが鳴ると、それに合わせて先生が教室に入ってきた。

そして恒例の自己紹介の時間が始まる。

まず、先生の名前は塚原 真奈美。このクラスの担任で担当は、英語だそうだ。年齢までは言わなかったが、30手前で左手の薬指には指輪はしていない。外したにしてもそれらしい痕跡が見当たらない。そもそも外す必要がない。だからたぶん独身。

職業柄忙しいからか？

性格なのか？

色白で髪は後ろで一つ束ねてあるが、アップしてるわけでもないからたぶんセミロングぐらい。入学式だからだろうが服装が少し派手。身長は150cmぐらい。あとたぶん……普通サイズ。

新年度はいつも名前のおかげで校庭が見える窓際。

嫌いではないけど天気の良い日は、春の心地よさと勉学への興味の低さで眠気に負けることが多々。これは損得で言ったら損かもしれない。だけど、これはこれで気に入っている。

出席番号4番の自己紹介が終わり順番が回ってきた。

こういうとき、自分の番になるまで何を話そうか考えていて、前の人は何を言ったかなんてほとんど覚えていない。

「次、5番」

「はい、一宮中出身の今泉 輝 です。特に趣味でやってる事はないけど、好きなのは、読書とゲームです。あ、読書と言っても基本漫画のことなのでよろしく」

話題にもならない自己紹介をした後、先生がディスプレイを見る。
「じゃあ、次」

自分の番が終わると気持ちに余裕ができてよく聞こえる。

「えっと 梅田 克己 です。最近興味があつてやってるのは、ネットゲームです。これからよろしく願います」

ネットゲームか。

意外だった、一風スポーツマンタイプで顔なんか日焼けしていてクラブ活動を一生懸命やってそうに見える。ゲームのゲの字も想像できなかった。

「うーん、今泉君と梅田君はゲーム好きなのね……あんまり熱中し過ぎないように。やるなとは言わないけど、あなた達は勉強が本分なんだから」

俺と梅田の顔を見てそう言った。

クラスみんなの視線が俺たち二人に集まっているのがなんとなく分かる。

これは早々に目をつけられてしまったのかも。

クラス中にくすくすと笑う声もちらほらと聞こえてくる。

横の女子に目をやると、そいつも笑っていた。

ちっ……

いつもの癖で額の眉間を人指し指で搔く。

たぶん梅田も同じ心境じゃないだろうか。でも、共通点のあるクラスメイトがいて安心していた。

放課のときに、ゲームの話題でも振ってみるとするか。

いろんなネットゲームをやったことはあるが、どれも長くは続かなかった。初めのうちはジャンルを問わずどんなものかと熱心にプレイするけど、飽きやすい性格なのか途中で冷めてしまつてやり込むことなくやめてしまう。浮き沈みの激しい性格ではないと思つていたけど、ゲームに関してはそうではないようだ。とにかく会話の切っ掛けができた。

しばらくして先ほど、笑っていた女子の順番が回ってきた。

「石本 亜美 です」

女性への評価基準が甘いか辛いかはともかく第一印象はまあまあ。
「普段は小説とか雑誌を読んでいることが多いです。中学のとき図書室にはよく行ってました」

小説か。

「はい、では次」

仕切る担任。

「はい、大和中から来ました、石本 綾 です。前に座っている亜美とは双子の姉妹で、私のほうが姉です」

生まれて初めて双子を見たがほんとによく似ている。双子だということを知ると余計に見入ってしまうのだろう、皆の注目を浴びて二人とも少し恥ずかしくて困っている様子だ。姉妹そろって薄っすらと頬を赤く染めて妹のほうは、手をモジモジとさせてうつむき気味。姉は表情には出さないようにしてただ硬い感じがした。
ただそんな姿を見せられるとちよっぴり評価を甘くさせる。

二人とも髪は短めで、あとでどっちがどっちだと聞かれると正直見分けがつかなくて困るかもしれない。

ただ気がついたことがある。姉のほうが少々目じりが厳しくしっかり者のような面持ちで妹と比べると少し我が強い。妹はどこか穏やかでやさしい感じ。本が好きだと言っていたのもなんとなく頷ける。見るからに文芸部向き。姉は体育会系。双子で背格好顔はほとんど同じでも性格は別物のようだ。

これは覚えておいて損はないかもしれない。

自己紹介が無事終わり、学級委員を決めたいと塚原先生が言い出す。

途端に教室の雰囲気が一変する。

みんな、先生の視線攻撃から避けようと目線をあっちこっちと合わせないようにして、ヒソヒソとしていた無駄口もやめてしまった。

確かにやりたくない。

それにしても判り易い反応だ。そりゃ、飴と鞭の鞭しかなくては誰もがやりたがらない。3年なら内申書のこともあるから我慢して手を挙げてもいい。だけど1年生ではあまりメリットがない。先生に対する評価上げ……いや、たぶんやつてもやらなくても効果は同じのはずだ。もしかすると下げる危険性もある。

考えに考えた結果、スルー決定。

廊下側の生徒が手を上げる。

意気揚々と立ち上がり、

「先生、僕がやりましょう」

勇者様が登場。皆がその勇者に注目する。先生は他に挙手する生徒がいなか確認する。

「他に誰もいないようなので、お願いしちゃおうかしら」

自信ある声で応える。

「はい」

「新見君、悪いけど後で職員室に来てちょうだい」

「わかりました」

勇者の名は 新見 要。

見るからにこういった役柄に特化してそうで、同じクラスの新入生でよいのだろうかと思ってしまうほど優等生タイプに見える。

みんなスタートラインはいつしよだという言葉は嘘だと思う。俺のように偶然合格できた生徒と、恐らく余裕で合格したであろう彼とでは100歩以上すでに差はあるはず。だから、あんな慰め言葉は信じない。ただし、これは俺の第一印象で、初見の評価に過ぎないから断定はできない。

それにしても、どうしてこういう仕事を背負う生徒は、メガネが似合うのだろうか不思議だ。

そんな事よりもだ。如何にも異性にモテそうな顔立ちに、こっ胸の奥底から湧き上がるライバル心が沸々と……

第一章 春、香る <1 t ; 1 > ; (後書き)

文章修正 1 2 / 0 9

第一章 春、香る <2>

校長の有難く長いお話と備品の配布、そしてその説明及び確認のみだから午前中で終わる。

備品とはノート型パソコンのことで、各生徒の設定状況をチェックすること。つまりこれから授業や伝達に必要なことは全てこのPCで行うことになる。これはこの学校だけが取り入れている事ではない。どこの学校でも行っている極々普通の一般常識のようなもの。

儀式のような行事も終わり、校内を見学することにした。段々と他の生徒は下校して、先程までの賑わいが静かになっていく。

どこの学校も同じような造りで、広い敷地の南側に運動場で校舎はそれを囲むように建てられている。校舎の離れに体育館。その脇にクラブハウスや倉庫が並んでいる。

屋上からの眺めを一望してみようと階段を登る。

施錠のしていない重い扉。ゆっくり開けると待っていたように風が雪崩れ込んでくる。まるで窒息気味の校舎が一気に深呼吸したようだ。

屋上は全面淡い緑色のフェンスで覆われ、野球ボール程度の大きさなら外へ飛び出せないようになっている。足元は人工芝、隅には木製のベンチがいくつか設置してある。

フェンスに近寄り、5階屋上からの景色を眺める。

家は……あっちか。

西へ3Kmほどの距離。途中、小規模のショッピング街がある。大概の買物ならそこで済ませることができるし、稀少品ならネット通販で事足りる。他にバレーボール場やボーリング場、映画館もある。

学生が遊びに行ける場所としては不自由しない。

幼い頃から慣れた土地だから特に不安はないけどちょっと新鮮味に欠ける。それとかなり縮小の一途を辿っているが、所々に田んぼや畑があつてのんびりとしている。でも、それがこの町で過し易い理由。あまり都会すぎてもゴチャゴチャと落ち着かないからだ。たまに出掛けるけど、帰宅するころにはぐったりと疲れてしまっている。だから個人的に十分この町で満足している。

町並みから視点を校庭に向けると、運動場でクラブ部活が始まっていた。

サッカー部や野球部、校外の舗装された狭い道にも陸上部だろうか、ランニングしてる生徒がいる。

「どうするかなあ」

クラブ活動は中学のころと違って強制ではない。入部してもしなくてもどちらでもいい。3年間なものでもないよりは、見聞を広める意味でどこかに入部して活動したほうがいい。けど、なんだかそんな気持ちになれなかった。

空へ視点を变えて一度深呼吸。

雲ひとつない澄み切った天気だ。

屋上という解放感と春色の仄かな桜の香りが、前髪を通り過ぎていく感触がとても気持ちいい。

「なにか良いことあればいいなあ」

この学校で新年度を向えて、無意識にそう呟きながら背伸びをするとあくびまで誘発させた。

近くのベンチに腰を下ろすと、張っていた緊張が解けると同時に眠気で瞼が重くなっていく。

木製のベンチがこのぼかぼか日和で心地良い程度に暖められ、それが制服から肌に伝わる感触が更に眠気を誘う。そして徐々に意識が遠のいてゆつくりと崩れるように横になっていった。

ねえ……

ねえってば……

どれぐらい眠っていたのだろう、誰かが体を揺らして起こそうとしている。

瞼をゆっくり開くと傾いた太陽の日差しが容赦なく射し込んできた。渋面でぼんやりとした映像の中、体を揺らす人を探した。

「ねえ、悪いけど起きてくれない？」

寝ているそばで、髪の毛の長いメガネを掛けた女生徒がしゃがみ込んだ体勢で声を掛けていた。

さっぱり状況が飲み込めず右手で目を擦りながら、

「なに？」

彼女は困った面持ちでベンチを指差す。

「えつと、ここあたしの指定席なの。だから……」

「だか……ら？」

まだ朦朧とした頭で言われてることが理解できず復唱した。

「だから、そこどいて」

「はい？」

なに言ってるんだこいつは。

ゆっくりと体を起こし辺りを見回してみると、他のベンチは全て空いている。静まった屋上にいるのは二人だけ。そもそも見ず知らずの人を叩き起してまでこのベンチに座りたがる理由はなんだ？

寝起きでたらだらとしていると、彼女はイライラした表情で、

「早くどいて」

なんであれ、もうここに居る理由はない。それに、これ以上あれこれと言われるのも気分悪い。吐息に揺らぐロウソクの炎のようにゆらゆらと立ち上がり席を譲る。すると彼女は笑顔を取り戻して、にっこり微笑む。

「ありがと」

と、このベンチに座る。

彼女は持っていた学生カバンを左脇に置き、中からハードカバーの小説を取り出し、栞が差し込んであるページを開いて読み始めた。まったく何がなんだか。

漸くはつきりとしてきた目で見てみると、なぜか綺麗という言葉が頭に浮かんだ。

「あ、あの……」

ここに拘る理由を聞こうとしたが、想像力を膨らませて熱心に読んでいる姿が、今の私を邪魔しないと言っていているように見えた。

人の姿でこんな印象を抱いたことは今まで一度もなかった。けど、たぶんそうだと直感した。

まあ、いいや。

どんな理由があるにしろ、俺にはどうでもいい事だ。彼女に背を向け階段の方へ歩きながらズボンから携帯電話を取り出す。

15時ちよい前。

溜息を一つ吐き捨てポケットに戻す。

もう一度彼女の方へ目をやるが、他に気を囚われることなく本に集中している。

少しは気にしろつての。

下駄箱へ向いながら、メガネ女のことを思い出す。

変な女。あのベンチに何があるっていうんだ？まったく見当もつかない。

5番と書かれた箱から革靴を取り出し履き替えようとした。はたと手を止め明日また40分も歩いて通学することを考えると、今から貸し出し許可を貰ったほうがいい事に気付いた。

この学校には生徒の為にレンタル自転車という制度が有る。利用したい生徒は事前に担任の許可をもらっていれば、いつでも借りられるシステムだ。

取り出した革靴を戻し、職員室へ向う。

今日配布されたパソコンで先生宛メールで連絡してもいいのだけ

ど、たぶん直接行ったほうが早い。

校舎の一階中央にその部屋はある。

それにしても、職員室というところは小中の頃からいつも緊張する。用事がなければあまり近づきたくないエリアだ。

スライド式の扉の前でタッチパネルを操作する。

つかはら…… あった。生徒手帳をセンサーにかざし通信するという文字を押す。小さなモニターに塚原先生の顔が映る。

「あら、どうしたの？」

「すみません、自転車の許可を貰いに来ました」

「あ、はい、どうぞ」

扉が開く。

一般の作法だが、恐らくこの作法からしてこのエリアから敬遠させる要因なんだ。

中に入って席をぐるりと見廻す。

広いスペースに壁と言う壁には書類整理のロッカーやキャビネット、そしてフロアケースなどがいっぱいという想像をしていたけど、中学の職員室とはまったく違っていた。各先生の机がずらりと並んでいるだけで他には所々に花や造花が飾られている簡素なフロア。そんな空間に何十人も居る中から塚原先生を探す。雑談している先生もいれば、黙々と机上のパソコンで何かをしている先生もいる。入り口で立ち往生してるのが目に付いたのか、近くにいた先生に声を掛けられた。

「どうした？」

「あ、あの塚原先生に用事があるのですが、どちらでしょうか？」

「塚原先生なら…… あそこの奥の窓際にみえますよ」

そう言うのと左手で方向を指差した。

「はい、ありがとうございます」

教えてくれた先生に一礼して向う。

さっさと終わらせて帰りたい。

塚原先生は、明日の授業内容の整理をしているようだ。

「すみません、塚原先生」

呼ばれたことに気が付くと笑顔で振り向く。

「君まだいたのね」

多忙でも笑顔を忘れない人なんだと、少し心を許してもいい感じがした。

「ええ、帰る前にちよつと校舎をうるちよろしました」

そう言いながら指が無意識に眉間へ向う。

「そつ、えつと……今泉君」

まだうる覚えだったのだろう、顔はこっちを向いていても視線はPC画面を見ていた。

「5番、今泉です」

先生は心を読まれたことが恥ずかしかったのか苦笑いする。

「えつと、自転車よね、ちよつと待って」

「隣の空いてる机、お借りしていいですか？」

「どうぞー」

先生は申請用ファイルがあるアイコンを探しそれをメールで俺へ送信した。

「はい、いいわよ」

メールが届くのを待つ。

早くこの場所から逃げ出したい気分は、いつの間にか人間味ある仕草のおかげで抵抗感が薄れていた。

しばらくしてメールが届き、その添付ファイルに必要事項を入力して返送。

先生は確認すると、貸し出し番号を入力して許可証を発行してくれた。

「体育館横に自転車置き場があるの知ってる？そこで管理人をしてる伊藤さんに、この番号言えば貸し出してくれるわ」

「はい、ありがとうございます」

「気を付けて帰りなさいね」

軽く会釈をして、職員室をあとする。

ずらりと並んだ自転車は、宛ら駅の自転車置き場のようだ。片屋根の下で整理され、ここの管理人らしき男性が綺麗に並べていた。「すみません、この番号の自転車お願いします」

「ちよつと待って、確認するから」

年は60過ぎだろうか、額から天辺にかけて少し髪の毛が薄く白髪交じり。顔には年輪のようにシワがいくつもあった。不思議とやさしそうな面持ちで俺の知らない事をなんでも教えてくれそうな、そんな雰囲気でした。緑色上下の作業着で、手には何度も洗って使っているような軍手をしていた。

おじさんはパソコンでその番号の許可内容を確認すると案内してくれた。

「これ使ってちょ」

「はい」

早速サドルに座って、足が地面に着く感じを確かめた。

自転車の種類は俗に言うママさん自転車で、ハンドルの前に荷物カゴ、後ろは二人乗りできないように腰が置けるような台のようなものはなく、タイヤハウスがそのままむき出しになっていた。

調整の必要がないことを目視すると、おじさんは軽く手を振った。

「気をつけて帰りなさい」

「ではお借りします」

片側のペダルに足を乗せ、ゆっくり蹴って漕ぎ始めた。

辺りは夕焼け色で染まり、上着を着ていなかったら少し寒いくらいだ。

寄り道をせず、真っ直ぐ家路に向う。

行きとは違って15分ほどで到着。

我が家は2階建てで大きくもなく小さくもなく、区画整理された住宅地の並びに建てられている。注文住宅でオール電化、各所にオート機能や通信機能を施してあるのが父の拘ったところらしい。

ガレージの前に立つと自動でアコーディオン式のフェンスが開閉。
レンタル自転車をガレージ脇に置き玄関に向うと、そこでもシステ
ムが反応してスライド式の扉が開く。

「ただいま」

「おかえりなさい」

キッチンから母の声。

パタパタとスリッパの音をさせながら玄関にやって来る。

「どうだった？」

長く編んだ髪を肩から垂らし、指でいじりながらにこにこしてい
る。息子が入学式の報告するのを楽しみにしていたようだ。

「なにが？」

「なにがって、学校のことよ」

「ああ、普通の学校だよ」

母は落胆した面持ちで、

「なによそれ、素っ気ない子」

「いろいろあつて疲れたんだよ」

そう言つて靴を脱ぎ、2階にある自分の部屋へ向う。

「ほんとに、お父さんといいあなたといいよく似てるわ」

と、小言をトッピング。

「もうちょつとしたらご飯だからすぐに降りてらっしゃいよ」

またパタパタとキッチンに戻っていく。

世間一般から見ると俺の母さんは若い。

いっしょに買い物へ出掛けると、売り場の店員にお姉さん扱いさ
れるのがすごく嬉しいらしい。子供の立場としては、いい迷惑以外
なにものでもない。

以前一度だけ、父さんが母さんとの昔話を話してくれたことがあ
った。

父さんより3つ年下で、母さんが高校生の頃から付き合っていた。
出会った頃はショートカットのよく似合う生徒で、横を通り過ぎ

る男子生徒が振り返ってしまうような女の子だったらいい。そんな母さんとたまたま町で出会って付き合うに至るまで結構苦労したようだ。でも、恥ずかしいのかその過程を語ってはくれなかった。恋愛期間は長くもなく短くもなく母さんが大学を卒業と同時に結婚。そしてその数年後、俺が産まれた。

後にも先にも父さんが話してくれたのはこれっきり。

なんであれ、今の母さんへの感想はうるさい叔母さんでしかない。階段を上がり自室の扉を開ける。入るなりカバンを机に置き、制服のままベッドに身を投げた。

「ふう」

味も素っ気もない部屋。勉強机の上にPC、あとは映画などのDVDしか並んでない棚だけ。無用な物は捨てるなり処分して貯めないようにしている。ただ壁紙が柄のないグレー1色なのが少しだけシックな雰囲気にくれている。

「朝8時起きでも間に合うな」

目覚まし時計を手に取りタイマーをセットする。

早起きは苦手ではないけど、朝はゆっくりするより多少急いでるぐらいが丁度いい。だからいつも少しギリギリめに目覚ましが鳴るようにしてる。

ベッドから起きて椅子に座り、PCを起動させる。

しばらくメールなどをチェックしていると扉が開く音がした。

「お兄ちゃん、ご飯だよ」

「お前なあ、部屋に入る時はノックしろといつも言ってるだろ」

「だって、めんどい」

何か閃いたのか、妹の顔が段々とにやけていく。

「あ、わかった！エッチなの見てたんでしょ？」

そう言つと小悪魔が嬉しそうに部屋から出ていく。

「お母さん、お兄ちゃんがねえパソコンで変なの見てたよおー」

「おい！なに言ってるんだ！」

「ちよつと輝！」

「違つて！」

妹の 遥 は2つ違いの二人兄妹。

背丈は俺の肩より少し下で、髪は短かく色素が薄いせいから少し茶系。陸上部に所属していて顔とか腕、足が年中日焼けしている。毎日早朝トレーニングへ元氣よく出掛けるそんな中学2年生だ。兄貴として評価しがたいがいろいろ噂とか聞くと、どうやら異性に人気があるらしい。

あいつの生活態度からは、とてもそうは思えないのだが。
だけど誰かと付き合つたという話は一度も聞いたことがない。

それと妹の後にもう1人いたことを最近知つた。

流産だつたらしいが、両親はそれ以上語ろうとしなかった。それを告げたときのあの寂しそうな顔を思い出すと、深く聞くのは子供ながら禁句なのだとそう思えた。しかし遥はたぶんそのことを知らない。

それを聞いたとき、その場に両親と俺以外誰もいなかったからだ。恐らくまだ早いと判断したのだろう。

まあつまり、あいつはまだ子供つてことだな。

メールチェックも終わつてキッチンに行くと、二人は食事を始めていた。

「父さんは？」

「いつものことよ」

母はなんの躊躇いもなくそう言った。

今晚の献立は、豚の生姜焼きと味噌汁、それと鰯の天ぷら。あとキャベツの千切りがボール皿にてんこ盛り。この生姜焼きのタレにキャベツをつけて食べるのが俺は好きだ。

「そうだ輝、明日からお昼どうする？」

「どうつて？あ、弁当のことか。食堂あるみたいだけど、どっちでもいい」

「そう、じゃあ明日は作つてあげる」

「うん」

とりあえず、明日の昼飯は安泰。

「ところで何時に家出るの？」

「8時半ちよつと前に出れば大丈夫」

「そう……だけど」

「ん？」

「男が毎食、親の手作り食べてるようじゃ出世しないからちよくちよく手を抜くからね」

「そういうもんなのか。」

「そうなの？」

不思議そうに遙が聞く。

「そうよ」

「ふーん、そうなんだ」

初めて聞いた。

ただ単に、作るのが面倒なだけなんじゃないのか？

「ごちそうさま」

「お風呂沸いてるから入ってらっしゃい」

「へいへい」

脱衣所で服を洗濯カゴへ投げ入れ浴室へ。
湯船に浸かり、今日一日の事を思い出す。

第一章 春、香る <1 t ; 2 > ; (後書き)

文章修正 1 2 / 0 9

第一章 春、香る <3>;

次の日、早めに就寝したおかげで目覚ましの恩恵を受けることなく、予定時刻より30分も早く起きてしまった。

二度寝するにはあまりにも時間が少ない。だらだらと仕方なく起きる。

遮光カーテンを勢いよく開けると、目をしかめる快晴。

眠気眼で、支度をする。

「ヒカルー！弁当、玄関に置いていたから」

下階から呼び掛ける声。

「はいよ」

今日も母は元気だ。

身支度を済ませキッチンで食卓で朝食を摂る。

トーストにハムエッグ。そしてドレッシングのかかったサラダ、

あとコーヒー。朝食ではよくある定番メニュー。

家を建てる時、母が拘ったシステムキッチンで汚れた皿などを

食洗機に並べていた。

黙々と一人で食事をする。

家族が揃って食卓を囲まなくなってもう何年だろうか。

確か小学3年の頃、父が転職したときからだ。

それまで朝晩ほとんど毎日家族揃って食事をしていた。別に、何か問題があつてこうなつた訳じゃない。父さんが仕事の都合で帰ることが少なくなったのが原因。母さんは時々寂しそうな顔をするが、俺達にはただ仕事が忙しくてとしか話さない。どんな職種で何をしているのかも、まったく話してくれない。何度か尋ねたことはあるけど、いつも口籠って話たがらない。だから、俺も遥もそれ以上聞こうとしない。とりあえず仕事をしているのだから、元気にしているのは間違いないだろう。それにもうこの習慣に疑問を持つこともなくなった。

「ごちそうさま」

玄関に行くと、すでに遥の靴はなかった。いつも通り、朝早く朝練に出掛けたようだ。

少し早い登校する。

授業初日だし、それもいいかと自転車に乗る。

見飽きた町並みを通り過ぎ校門に到着。腕時計型携帯電話は8時20分を表示していた。

教室に入ると、もう梅田君が来ていた。

「おはようっす」

「うん、おはよう」

配布されたPCで伝達事項を確認するが何もなく、昨日から気になっていた話題で話しかけてみる。

「そうだ、どんなゲームやってんの？」

なんとなく予想していた質問だったのだろう。ロード時間も無く返事が返ってきた。

「うん、オンゲーで The Transmigration of The Soul て名前のゲームんだけど知ってるかい？」

「オンゲー？ああ、オンラインゲームな」

今時オンラインゲームなんて珍しくない。ほとんどの人が年齢に限らず、何かしらのゲームを経験している。

以前、広く普及していたオフラインゲームの存在が古物となりつつあった。

それは、PCの目まぐるしい進歩によりハードとソフトの関係が崩壊しつつあるからだ。

ソフト会社が一本のゲームを完成させるのに多額の資本と時間を注ぐ。そうしてやっとソフトを市場に開放する。だが、利益を生み出す頃には最新のハードの噂が流れ始め、ユーザーの購買意欲が薄れてしまう。だから、爆発的注目タイトルでもない限り、利益が出せないという事態になる。

一方ハード会社は、よりニーズに応えるべく開発を続ける。だが、

遊べるソフトがないのでは作る意味がない。現在ほとんどの家庭には、必ずと言っていいほどPCが普及している。要するに、その関係を流動的に対応できるオンラインゲームのほうが都合がいいのだ。そもそもオンラインゲームとは、ネット回線を利用して一つのゲームを不特定多数の人が同時に進行を共有することができ、バージョンアップなどにより進化と発展をさせることもできる。オンラインゲームはネット回線を必要とせず遊べるゲームだが、オンラインと違ってゲームシステムや内容の変更ができない。つまり、固定概念のハードを必要とせずデータのやり取りが容易なPCのほうが非常に都合がいいのである。なにより、会社として必要不可欠である収益が、月額課金やアイテム課金制、広告収益などの方法で回収ができる。そして長期的に良質運営する事で、安定した収入源を確保しながら開発もできる。

「いつだったか、ゲームサイトに載ってるのを見た事があるな」
評判のサイトで試験期間が終わり、サービス開始という情報が載っていたのを見たことがあった。プレイヤーの感想やシステム等がいろいろ書いてあったが、いまいち内容がよく分からなかったのを覚えている。

ゲームの情報サイトだと、プレイ画像がいくつか紹介で載せる事が通例なのだが、これに関しては一切その記事が載せられていなかったからだ。

「これが結構はまっちゃってさあ」

「あれって、確かRPGだよな？」

「うーん、そうなんだけどACTやSLG要素もあって一概にこのジャンルとは言いにくいところがあるよ」

「ふーん」

複雑なゲームだと思った。

「とにかく今までにないまったく新しいゲームと言ってもいいかもしれない」

「へえ……俺もやってみようかなあ」

興味有りだと察知したのか、梅田はあれこれとプレイするのに必要なことを教えてくれた。

「はあ？住民票？診断書？そんなの必要なのか？」

「うん」

「なんだよそりゃ、めんどくせえ」

「うん、でも住民票は役所行くだけだし、健康診断は学校で近いうちやるだろうからそうでもないよ」

楽しそうに話す梅田。

「そんな事よりも、それを送ってから登録完了の連絡が来るまでがすっごい遅いんだよ」

「どれくらい？」

「うん、僕の場合は2ヶ月かった」

「そんなに？」

「うん、いくら待っても連絡来ないから問い合わせたことがあったんだけど、あれこれ説明聞いたら納得ができたよ」

「なんて？」

「このゲームってプレイヤーの精神状態とかリアルのことが深く関係していて、キャラも一つとして同じのは存在しないんだよ」

「ほほう……」

「登録完了のメール貰ってから僕がしたことは、クライアントのインストールだけでログインした時にはすでにキャラが出来上がっていたから、びっくりだったよ」

確かにそれは驚きだ。

ユーザーが愛着心を持ち易くするため、自分で多種あるパーツを組み合わせキャラクター作成するのが普通。だから、他人の管理者が作成するなんて聞いた事が無い。

「あと付属品もいっしょに送られてくるんだけど、それもただ接続するだけだったし」

話し足りない梅田の表情から、如何にそのゲームが他に類の無い

物であるか伝わってくる。

しかし今までフリーのゲームばかりプレイしてきたせい、これは無料では済まないと気になった。

「ところで、料金とかは？」

「うんと、月額は無料でクライアントソフトが確か500円ぐらいだったはず」

「で？あとは？」

「それだけ」

「へ？それだけ？まじで？」

「うん、それだけ」

「でも、付属品の使用料は？」

「無料配布だから、タダ」

「まじか！」

「うん、マジ」

梅田との会話に引き込まれていく。

「やってみようかなあ」

「うん、よかったらやってみてよ」

いろんなサイトをチェックして気にはしていたが、これほど興味深いタイトルとは思わなかった。梅田の経験や知識が乾いたスポンジの脳に浸透していく。

他にもいろいろ教えてもらった。

メーカー名はスリーエスエンターテインメントであること。

手続きの方法は、公式サイトからできること。

付属品のこと。

新学期早々に授業を放り出したくなるほど高揚としていた。今すぐにも下校して欲求を満たしたい気分だ。それにしても、このPCで外部サイトの閲覧できないのがとても残念だ。

まだ一時限目も始まってないというのに、学生として失格かもしれないと胸の奥で天使が騒ぐ。更にいえば、朝のホームルームもま

だ終わっていない。

義務と権利が乗った天秤は定まることなく動き続ける。

とにかく授業を受けるものの、どこか上の空で集中できない。

入学して助走を始めたばかりだというのに、まったくやる気の無い生徒も珍しい。教師からすれば見捨てる対象かもしれない。

授業中ふと校庭に目を向けると、校門からゆっくり歩いている生徒がいた。

見つければ先生に怒られるのではと気になった。

なんとなく見覚えがある事に気付く。

あれって……

しばらく様子を見てみると、後ろから背中を突かれる感触。

顔を教室に戻すと、少し怒り気味の塚原先生が横に立っていた。

「今泉君、ぼーっとしない！」

「すみません……」

慌ててPCの画面で顔を隠す。

怒られたのは俺の方かよ……

一時限目が終わり、学級委員の新見が号令を務める。

「起立！礼！」

みんな号令に合わせて動く。実にいい傾向だ。

だが凝り固まったこの風習を誰も不思議だと思わないのだろうか。

何年、いや何十年何百年と同じことを繰り返している。

若さは宝だと大人達は言う。

そもそもなぜ若さは宝なんだ？俺達にとってそれが理解できていればダイヤモンド。そうでなければ価値のない石ころ。そういうこと？

可能性の話をするのであれば、確かにまだまだこれからの人材。だけど50、60代の大人でもそれは同じことではないだろうか。

いくら若者が可能性を秘めていたとしても、それを使いこなせるだけの知識がない。

逆に大人達は可能性の度合いが違うにしろ、それを埋め合わせできるほどの経験と知識がある。だから大人だろうと若人だろうとなんら変わりがないと俺は思う。

この世にしてはならないことは殺と名の付く行動。その他はその国のルールまたは法を犯さない限り何をしてもいい。

例えばそれが倫理観を疑われる行動だとしてもだ。

とにかく自由ってのはそういうものだとして理解してる。

だけど……

そんなことを心の中で力説してる生徒はいないだろう。

授業中、黒板にチョークを使って説明することはまずない。

それはノート型PCを使って受けているからだ。

先生は内容をボード型PCにペンマウスで直接書き込み説明する。その情報はそのまま生徒に伝達されている。

もし通信不良やなんらかの障害で情報が送られていない生徒が居れば、先生のPCに通信エラーと表示される。問い掛けに答えてない生徒が居ればそれも即座に確認できるようになっている。

ひょっとすると、そう遠くない近未来には学校という制度自体なくなってしまうのでは？と評論家は社会にメッセージを発している。それはどうということなのか？

実は今まさにそうなのだが、生徒は常にモニターを見ている。先生もまた同じでPCの画面に注目している。つまり先生と生徒がわざわざ同じ部屋に集まって勉強する必要がなくなってきたのだ。データや映像、細かい連絡とかもすべてネット環境下にあるPCなら済んでしまう。

現在議論中だが、学校という箱物を造り続ける意味がなくなりつつある。

もし学校という風習がなくなったら、当然建物がなくなってしまう

うのだから通学する必要もない。

ましてや受験なんて制度もまったく意味が無くなる。

まあ、この件についてはあまりにも行き過ぎた事として反対派が圧倒的に多く、この議案が通過することは皆無だろうとされている。なににせよ、情報化社会過ぎるのもあまり良くないようだ。

素晴らしくも高度な授業のようだが、現在PCに馴染み過ぎて漢字、更にはひらがなすら書けない子供が急増してきている。

それはPCの普及と共に文字を自分で紙に書いて何かするということがほとんど必要なくなってきたからだ。

過去、木々の伐採などで環境問題が大きく報道され、紙の使用を制限しようとしたことに始まる。しかしながら、PCの影響はとてつもなく大きく、変換キーがもたらした言語社会の崩壊とマスコミは報道した。

家庭に1台ではなく、1人に2台以上の時代。

PCの蔓延化が急速に進み、個人情報や国家情報まで誰でも簡単に手に入る時代が過去にあった。今はセキュリティーシステムの改革が進んでいて、もし俺のPCを他人が起動させようとしても、電源がONにできるだけでOSを起動することはできない。ネットから有害データを送り込もうにも、まずほとんど不可能だと言われるまでに進化している。だからこのネット環境下で、そんな無意味なことをする人はいない。

しかしある業界で今までの常識を一変させるような、新たな研究がなされていると何かの番組で見たことがある。ただし、報道されていると言ってもこの企業が何をしているかまでは知らされていない。なんであれ今やPCの存在なしに生活はおるか、全世界各国の管理体制すら維持できなくなってしまうという状況。

それよりも今問題になっているのは人間そのものの存在意義なのである。現在PC側のエラーがほぼゼロに近く、逆に入力ミスや操作ミスによるヒューマンエラーの比率の方が遥かに高いことが問題視されている。ミス一つによる損害がとてつもなく大きなこと

に繋がる。それゆえ非常にこの問題に注目してる企業が多くなってきた。

しかし、考えてみると太古の時代から人間は進化してきたはずなのに、今の人間はどうだ。

進化しているというには、とても無理があるのではないだろうか。進化どころか衰退しているとさえ思えてくる。これはある意味人類にとって危機的問題であり今後未来の存続が危ぶまれることになるのかもしれない。

「起立」

あれ？……

「礼」

二時限目終了。

この学校の桜は麻薬の成分でも混じっているのか？こんなに長い時間妄想に浸っていたことは……稀にある。

「なあ今泉、さっきのここって」

「梅ちゃん」

「うん、なに？」

「聞かないでくれ……」

「うん？」

第一章 春、香る <1 t ; 3 > ; (後書き)

文章修正 1 2 / 0 9

第一章 春、香る <4>;

午前の授業は予定通り何事もなく終了した。

そう、何もなく。

頭の中にアップロードされないままだった。

「はあ……」

溜息をつくとき幸せが逃げると聞いたことがある。だけど、すでに前途多難だからついてるわけで。あれは逃げるのではなく、もう逃げて追うことができずに諦めることではないかと思うのだが。

屋上へ弁当片手に気分転換しようと向う。

重量ある屋上の扉を開けると、昨日と同じで見えない空気の壁に押し戻されてしまうぐらい風が雪崩れ込む。

扉を閉めて腰を落ち着ける場所を探す、昨日とは違う雰囲気販やかだった。

通常授業の日は、ここで休憩している生徒は多い事を知った。

空いているベンチがないので、仕方なくフェンス際の壁にもたれ座り込んで弁当を食べることにした。

プラスチック製の弁当箱の蓋を開けると、おかずランキング上位に入るものが詰まっていた。卵焼きとウインナー、そしてハンバーグ。あと半分がご飯と真ん中に梅干一個。

弁当箱に添えられていたプラスチック製の箸で卵焼きを一つ頬張ると、お茶がないことに気が付いた。

些細なことだけど、なんとなく苛立つ。

しかし空腹と梅干の効果も相まって喉を詰まらせない程度の潤いをもたらしてくれている。

人が多くてなんとなく気持ちが悪く落ち着かない。

いそいそと昼食を済ませ、気分転換をすることもなく教室へ戻ることにした。

少し俯き加減でトボトボ教室に向う途中、背後から俺を呼び止める。

「今泉君？」

振り返ると、淵なしメガネを掛けたおさげの女生徒が立っていた。

「俺？」

「うん、そう君」

背丈は妹と同じぐらい。日焼けした顔から、どこかの体育会系のクラブにでも所属しているのだろう。それと喋り方にどことなく覇気を感じる。一見格好いい印象の女性。

「君にお願いがあるの」

彼女は少し首を傾げ、俺を覗き込むように見つめている。

唐突な状況に片足が一步下がる。

「これ遥ちゃんに渡してくれない？」

「はい？」

手紙を差し出す。

「えっと、これって……」

「いいの、とにかく渡してくれれば」

今どき手紙なんて珍しいと思った。

「じゃ、頼んだからね」

「お、おい！」

彼女はスカートが靡くのも気にせず足早に去っていく。

またしても正体不明の女生徒。手紙を見つめ佇む俺を、行き交う生徒が不審な目で見る。恥かしさのあまり手渡された手紙をポケットにねじ込む。

自分宛ではないのに何故かドキドキする。

「遥のやつ、女にもモテるとは……」

なんだか遥に負けた気がして悔しい。

俯くどころか敗者の心境で教室に戻る。

席に座り頭の中で想像を巡らせながら連絡事項の有無を確認する。

検索すると3件届いていた。

一つ目はクラブ活動について。二つ目は体力測定について。そして三つ目が健康診断についてだった。

一件ごと添付ファイルを開く。

まずクラブ活動については、各クラブ代表者からの人員募集だった。ポスター画像とアピールする文章が書き綴られている。

どこにも入部するつもりはないから削除。

次の体力測定の件は、測定数値の入力注意事項が説明されていた。つまり入力には各自ミスのないようにすることだ。

削除。

最後の健康診断については、各クラスの決行日時と前日の注意点が記されていた。後日メールにて結果報告が送られてくるようだ。

これはあのゲームで必要だから覚えておく必要があった。重要というファイルを作成して保存。

午後の授業が始まる。

PC画面を見つめるも心ここにあらず。視界がぼやけて記憶の中にいた。

ゲームの話や昨日屋上で会った女、そして手紙を手渡す女生徒。授業初日からアドベンチャーゲームのような複線が頭から離れない。

こんな事では駄目だと思い、両手で頬を叩く気合を入れた。

「よし！」

背中にペンで突く感触がして振り向くと、梅田がヒソヒソと耳打ちをする。

「どうしたんだ？」

「へ？」

「いや、今は授・・・」

「こら今泉！なに授業中に大声出してるんだ！」

周りを見るとみんなが注目してクスクスと笑い、先生は怒り心頭の様子。

状況は非常に窮地であり苦境。しかも限界を一気に突破するほどの緊張感と、手には今までに経験したことのないほどびっしょりとした汗。

「えっと……」

拳動不審で心拍数を突きあげる。

「いやほら先生も覚えがあるでしょ？午後の授業は食後の満腹感でつい眠気で勉強に身が入らないことが多いじゃないですか。で、たぶんそれは俺だけじゃないんじゃないかと思ってみんなにも先生の大事な授業に集中してほしいくて、わざとこの身を犠牲にして一芝居したわけですよ。ど、どうだみんな目が覚めたか？」

ごくりと唾を飲み込む。

クラスの視線は俺にアンカーを打つように離れず、不自然な空気が流れる。

「なっ……」

先生が口を動かそうとした瞬間、

「う、うん。危うく寝てしまうとこだった助かったよ今泉」

咄嗟に、梅田がそう言った。

先生は梅田の言葉に意表を衝かれたのか、口に出そうとした言葉を飲み込む。

「そ、そうか……」

とりあえず授業を続けようと、進行状況を確認している。

なんとかなるもんだと胸を撫で下ろし、油のような汗を手で拭う。心拍は急降下して口が渴く。

それにしても、梅田のあの援護は絶妙なタイミングだった。

なんとか波乱の授業も終わり、座学でこれほど精神的に追い詰められたことはないというほどに疲れ果てていた。

あまりの虚脱感に上半身が机の上に倒れ込む。

「疲れた」

後ろを振り向くと、梅田は呆れた顔で俺を見ていた。

頭を下げて、

「すまん、助かった」

「まったく、こんなハラハラした授業初めてだよ」

そう言いながら、梅田は手のひらで冷や汗を掻いた顔を扇いでいた。

そして二人ともほっと一息ついた。

「すっかり、あの梅田の援護はナイスだったなあ」

「うん、僕もあれはさすがに自分で自分を褒めてやりたい気分だよ」
変な境遇で仲がよくなるってのは漫画の世界だけだと思っていたけど、現実にあるものなのだと正直驚きだった。

そんな俺と梅田のやり取りを一部始終見ていた石本姉妹が、両手で口を押さえて笑っていた。

隣の席のそんな行動が気にならないはずもなく。

「その二人……笑いすぎ」

「だって、ねえ？」

双子は息ぴったりにそう言いながらお互いの顔を見合わせる。

「くそっ」

「それにしても、あれってなんだったの？」

双子の妹がそう尋ねる。

「い、いやあれは」

姉も畳み掛けるように、

「そうそう、あれほんと可笑しかったよねえ」

「だよねえ。突然だったから余計に可笑しくって」

まさか本当の理由を答えることなんてできるはずもなく、

「いいんだよもう、忘れてくれ」

両手で頭を抱え込む。

そんな俺を後ろから梅田がポンっと一つ慰めるかのように手のひらを背中に置いた。

「訳は知らないけど、とにかくお疲れさん」

「ありがとさん」

たぶん、このクラスでの知名度は急上昇しただろう。

「この二人見てると漫才みたいだよねえ」

「ねえ」

「あはは」

以後の授業はなんとか全て終わった。

最悪な一日だったのは間違いない。だけどその反面思わぬ収穫もあった。あの双子の姉妹に少し近づいた感じがしたのは悪くない。別に気にしていたわけではないが、男として嫌われているよりは幾分マシだと思う程度。

つまり状況は意に反して気分の良いものではない。だが得たものは失った大きさより、倍の大きさかもしれないという事。

それにしても、小中学の頃は自分なりのクラスへの浸透手段が意識しなくても確かに存在していた。でも、高校に進学したことで何か異型の歯車が知らないうちに噛み込みカスタマイズされて、この二日間で別の俺という人間になろうとしていることに躊躇いを感じている。

それは自覚できるほどに変化するのとは、あまりにも急なことで感覚が追いついてこない。たぶん、これは何かのときに読んだことがある、人格形成の発達ということなんだろう。自分のことが理解できないまま成長していくのは気持ちが良いものではない。

このことは俺だけではなく他の生徒も同じはずだ。だが果たしてこれに気がついている生徒が何人いるだろうか。

世の中、知らなくても良い事だっていくらかもある。逆に知ったことにより損してしまうことがあるかもしれない。それはひよつとすると後者の分野になるのではと、恐怖にさえ思えてならない。

こうまで平常心を揺さぶられるとは思ひもなかった。

常々平穏を求めるなら、心の天秤は常時平均でなくてはならないとそう自分に言い聞かせている。

それはどちらに傾き過ぎても良い結果にならないと考えているか

らだ。これは誰かから聞いたことでもなんでもなく、今までの経験に培われてきた自論から来た拘り。

但し、拘っているくせに生かせていないのがとても悔やまれて病まない。でも、いつも最後には考えることに疲れて、どうでもいいやって事になりこの妄想は完結する。

少しは悩んだだけの対価があっても良さそうなものだが、何も得ていないことに気がつく和无駄な時間を使ったといつも後悔する。ほんと、どうにかならんもんかねえ。

待ちに待った帰宅。

「ただいま」

「おかえりなさい」

やっと今日抱え込んだ問題を一気に解消することができる。

玄関にあいつの靴がない。遥はまだ帰ってきてないみたいだ。

とりあえず遥の部屋へ向う。

勝手に部屋に入ると怒られるけど、なんとなくこの手紙は一時も早くこの手から手放したかった。

一応いないと判っていても、扉をノックする。当然返ってくる返事はない。

内開きの扉を開けると、そこは女の子1色で俺と同じく6畳ほどの部屋。

壁紙は白の下地に、所々デイベアのような熊の絵のプリント模様が施されていた。ベッドの脇には、お気に入りの大きなアイドルポスターが張ってあった。

ただそれが誰なのかは俺は知らない。

まったくもって、そういうことに興味がないからだ。

机の横にはぬいぐるみと写真立て。その中には遥と数人の友達と思われる写真が入っていた。

机は綺麗に整理整頓されていた。そつとその中央に手紙を置いた。ここならすぐに気づくだろう。

これでクエスト一件コンプリート。

そそくさと遥の部屋を後にして、自分の部屋へ行き毎日の日課であるメール確認をした。その後、梅田に教えてもらった公式サイトを覗いてみることにした。

「これか」

夢中のあまり、口から声が漏れる。

まず公式サイトにメンバー登録。そして詳しい説明を読んでゲームソフトの購入画面のOKアイコンをクリック。

「今できるのは、ここまでだな」

それにしてもこのソフトの中身は、ゲームで使用する付属品とログイン時のちょっとしたシステム上のプログラムであることが分かった。

今までプレイしたゲームよりいろんな点で違っていて、聞いたことのないアイデアが盛り込まれているようだ。

「ただいまー」

遥が帰ってきた。

勝手に不法侵入したことを、追求される前に自白しておいたほうが多少はあいつも執行猶予付きで許してくれるだろう。

部屋を出て階段を下りると、そこにスリッパに履き替えた遥が居た。

「遥、ちょっといい？」

「なに？」

「今日学校で、女生徒からお前宛ての手紙預かってな。とりあえずお前の机に置いたから見てやってくれ」

そう聞くと、何か感じ取ったのか遥の目が少し険しくなった。

「ふうん、誰から？」

「聞こうと思ったけど聞けなかった」

「なにそれ、バカじゃないの」

「バカとはなんだ、バカとは」

「バカだからバカって言ったのよ！」

なんで怒っているのか見当がつかない。

「お前なにか心当たりあるのか？」

「そんなのないけど、その手紙お兄ちゃん宛に決まってんじゃない」

「はあ？お前に渡してくれって言ってたぞ」

「もう！判ってないなあ」

「判ってないのはお前だろ、それになんでそう決め付けるんだ？」

「そんなの見なくなつて判るもん」

こつまで反論される上にバカ扱いされて苛立ちが込み上げる。

「わかるもんか」

「もう超ウザい。このバカ兄！」

台所からパタパタと走る音がした。

「ちよつとちよつと玄関でなに騒いでるの」

母さんが様子を見に来た。

「近所迷惑じゃない」

「もういい！あたしお風呂入る」

「机に置いたからな！」

「勝手にあたしの部屋に入らないでよ。このキモ兄！」

「お前なあ、自分は勝手に入って来るくせに！」

「ついて来ないでよ！最低！」

第一章 春、香る <4> (後書き)

文章修正 12/09

第一章 春、香る <5>;

イライラする。

リビングの中央に、盤面強化ガラス製のテーブルを囲むように置いてある黄色のソファーに深々と座り込む。心の中でブツブツと小言を言っていると、30分程して遙が風呂から上がるなり2階へ向って行くのが見えた。

上下淡いピンクのスウェット姿で、首にはバスタオルを掛け、髪がまだ乾いてないまま部屋から例の手紙を持ってリビングに入ってきた。

やつの事など知るかとはかりに無視をする。

遙はテーブルを挟んで反対側のソファーに座り手紙を一通り読み終わると、また険しい顔で絡んできた。

「参ったか」

「何が？」

「読んでみたら判るわよ、このバカ兄！」

遙は手紙を俺の顔に投げつけた。

「なにすんだ、てめえ！」

ムツとして遙を睨み返した。

「あああ、バカ兄のおかげで気分最悪」

「いったい何を知ってるんだ、お前は」

「ふん！」

まだ文句言い足りない不満顔で、バスタオルを頭に被り髪を拭きながら自室へ戻っていった。

1人リビングに残った俺は、渋谷散らばった手紙を向きやページを気にしながら丁寧に集めた。

イラつく気持ちを抑え、この問題の手紙を読んでみる事にした。女の子独特の可愛いレター用紙。一語一句逃さないように読む。多少だが、遙があんな態度をとった理由が判った。

昼休みに廊下で呼び止めてきたあの子は俺と同級生の 佐々木 葵 さんで、中学の頃から俺のことが気になっていたらしい。そんなとき彼女が所属していた陸上部に遥が入部してきた。そして俺の妹であることを偶然知る。

その後、何度か告白を試みようとしたが、結局なにも伝えることができないまま高校受験で忙しくなり、それどころじゃなくなってしまう。

半ば諦めかけていたとき、自分が進学する高校に俺も通うことを卒業式当日、担任の先生が教えてくれた。すると彼女はこれはきつと運命かもしれないという衝動に駆られ、春休みの期間ずっとどうしようか悩んでいたようだ。しかしなかなか良い案が浮ばず、どうしようもなく後輩である遥に相談を兼ねてそれとなく伝えてもらう方法をとった。

「うーん……」

この手紙を読んでしまった罪悪感と、読まずして彼女の気持ちを察しろという遥の言動に無茶があると思った。

とりあえず理解はできた。できたがどうすれば良いのか判らなかつた。

癪に障るがやつに相談するのが妥当かもしれないと思った。

ソファアから立ち上がり階段を上がって、遥の部屋の前に立つと憂鬱な気分になる。

まだ怒っているのは兄妹じゃなくても判る。

緊張気味にノックする。

「なに？」

行動を見抜いていたのだろう、声を掛ける前に誰なのか判っているようだ。

「あ、俺だけど入るぞ」

「どうぞ」

扉を開けると、ベッドに寝転がって単行本を読んでいる遥がいた。

「なによ」

やはりまだ機嫌が悪く、言葉の音程がいつもより低い。

「あ、いや手紙の件なんだけどさ」

「なんだか被告人の気分。」

「読んだよ」

「あつそ、で？」

「不信心漂う目。」

「ぶつちゃけ聞くけど、これって俺はどうすればいいんだ？」

「どうって、勝手にすればいいじゃない」

「いいのかそれで？」

「いいでしょ、あたし関係ないし」

「目線を外し本を読む遥。」

「関係なくはないだろう」

「なんでよ」

「なんでって、佐々木さんはお前にこの手紙を託したんだろ？」

「だから、お兄ちゃんにそのまま隠さず手紙見せたじゃない」

俺に投げつけた行為を、こいつは見せたと思っているようだ。曲

りなりにも尊敬すべき兄に対してあの態度をとったということは、

余程遥の信頼度を下げてしまったみたいだ。

「これ以上、あたしにどうしろっていうのよ」

睨む遥。

「いや、お前の先輩だろ？ 応援とかしないのか？」

「先輩だろうと後輩だろうと、結局は本人同士の問題でしょ？ あた

しが入る理由なんてないじゃない」

「俺が言ってるのは、佐々木さんのアピールとかお前はしないのか

？ってことだよ」

「そんなのしないわよ、何言ってるの」

「冷たいやつだなあ」

「ちよつとそれ、酷くない？」

本を置き、険しい顔をする。

「佐々木さんのことは良い人だと思ってるわよ。だけど、あたしが先輩に対して持つてる印象がアピールしてほしい事とは限らないじゃない。そうでしょ？」

「……」

女の理屈は理解しずらく、返す言葉が浮かばない。

「だから、こういうことは本人同士だけでやってくれたほうが話がややこしくならなくていいの。わかった？」

「ううん」

「わかったら、早く出てってよ！」

納得する間もなく部屋から追い出された拳句、遙理論で言い包められた気がする。まったくもって不完全燃焼な気分だ。もう一度扉を開けてリベンジしたいところだが、今のあいつには火に油を注ぐどころか、ガソリンを撒くようなものだ。

行くだけ無駄だろう。仕方なく、自分の部屋に戻ることにした。

冷静に考えてみる。

遙が言ったことを思い出してみると、まんざら間違いではないかもしれないと思えてきた。それに同性として、もし自分ならどうするか考えた上であんな行動を取ったのかもしれない。だから、自分の仕事はこれで終わったと思い、これ以上は邪魔になると判断して俺を突き放した。もしこの考えが正解なら、我が妹ながらメリハリのある行動に素直に感心してしまう。

しかしだ……

あいつに恋愛のいろはを教えられた様で少々悔しい。

でもなぜか悔しいはずが嬉しかったりする。

切っ掛けはともかく、あいつとあんな内容で喧嘩したのは初めてだった。

いつもなら、あいつが買い置きしてあったジュースを勝手に飲んでしまったとか。

HDD録画で容量が足りず無断で消してしまったとか。

思えば、どれも俺が悪い。しかし、何処にでもある他愛もない兄妹喧嘩。

こんな感じで、色恋の話などまったくしたことがなかった。

これはいつまでも少女ではなく大人の女性なのだと、考えを改める必要があるかもしれない。

逆に、俺の方がまだまだ子供かもしれないと少し恥ずかしく思えてくる。

それにしてもどうしたものかと悩む。

ベッドに腰を下ろし、手に持った手紙を見つめながら物思いに耽った。

知ってしまった以上、無視するわけにいかない。だからといって素直に受け入れる事もできない。そもそも彼女のことをまったく知らない。

しばらくすると空腹でお腹が鳴る。

自室を出ると階下から美味そうな匂いがした。その匂いに誘われるままテーブルにつく。

食事中、母親に住民票を取ってきてもらうことをお願いした。

なぜ住民票が必要なのかあまり理解できていない様子だったが、買い物のついでに通える範囲なので、特に質問もせず了承してくれた。

食後すぐ部屋に戻り、手紙のことは気にはそっちのけで例のサイトを見ることにした。ゲームの情報が気になっていたので。

あれこれと調べてみるもこれといって詳しい情報はなく、どれもゲームソフトに同封されていると思われる説明書の内容が書かれているぐらいだった。他には経験者の感想が数行書き綴られている程度であまり欲求を満たす内容ではなかった。

「結局、自分で体験してみないとわからないのか……」

早朝、今日も遙は朝練に出掛けていった。

俺はというと、8時までぐっすり。

昨日よりゆっくり登校して、佐々木さんがどのクラスなのか校門の掲示板を確認する。

隣の1-A。

好意を寄せてくれるのは非常に有り難い。有り難いのだが、状況が複雑でテンションが下がる。どうせなら、そんな手が込んだことしないで、昨日あの場でそれとなく言ってくれたほうがまだ良かった。

俺なんかいつも直球勝負なのに。

ただ、わざわざストリートしか投げていないのに、カーブだとかスライダーを待っている相手ばかりだった。

なんであろうと、冗談でこんなことはできないはずだ。

放課のときにでも様子を見に行こうと考えた。

あれ？ちよつと待て。昨日あの手紙が俺から遙に渡ってることは、相手は百も承知のはず。で、あの遙が必ずなんらかの行動を起こすことは、いっしょにクラブ活動していた先輩なら容易に想像がつくだろう。そして情報がどういう形に変化していたとしても、彼女が好意を示していることを俺に知られることは予定の範囲内だとしたら？

おいおいおいおい、相手は臨戦態勢じゃないか。

ある意味、追い込まれてるのは俺の方が！

何も心構えのないまま様子なんて見に行ったら鴨葱状態じゃないか。

これは非常にまずいと勘ぐった。

いつまで経っても掲示板の前で、自転車に跨ったまま腕組をして唸っている俺を見るに見兼ねたのか、自転車管理をしてる伊藤さん

が声を掛けてきた。

「今泉君、そろそろ授業が始まるぞ」

「え？あ、はい」

「自転車は私が引き受けるから、君はもう行きなさい」

「すみません……」

どうやら始業時と終業時の門番も兼任してるようだ。間に合っていないながら校内遅刻するところだ。

それにしても名前を覚えられてとは思わなかった。

急いで教室に行き、PCの準備をした。

なんだか今日は妙にクラスみんながざわざわしている。

「なあ、今泉」

梅田が話しかけてきた。

「ん？おはよう」

「うん、掲示板で何してたんだ？」

「ああ……見てたのか」

「うん。別に見ようとして見てたわけじゃないけど、何度か校庭に目がいったときにずっと掲示板の前に居たから」

「いや、ちよつといろいろあつて考え事を……」

この学校に来てから数日の間にいろんな事が起こる。毎日が波乱万丈でほんと退屈しないが疲れる。

横でくすくすと笑う石本姉妹。

それを横目にまたかと無視をして溜息をつく。

一時限目は現代国語。

昨日は貴重な時間を無駄にしてしまった。

気持ちを切り替えて本腰据えて向き合わないと今後大変なことになるのは明白。ただでさえ、あの学級委員長とは何やら、すでに差があるように感じてならない。あのメガネには負けたくない。

今日の現国の内容は山月記。

高校生にはなかなか理解しがたいところがあるが、人生を歩む中で尊大な羞恥心や臆病な自尊心、そして人間存在の不条理といった言葉の意味やその問いかけを学ぶことはこれからの血となり肉となる。そしていろんな局面で如何に決断できるかということ学ぶことは決して損にはならないというのがこの内容の真髄。

この山月記の中で、難しく理解しにくい李徴が述べた一文を自分なりに解釈してファイルに保存した。

不条理は不条理として受け入れ、あとは死ぬだけ。

しかし、獣は目の前を兎が走れば心身共に獣になるが、人間と違って自分の意志で死ぬことは許されない。

恐らくこの意味はいくら解釈して教えられても、その時が来るまで本当の意味で理解できないかもしれない。

だが俺の直感がこう耳打ちする。

こんな事は来なければ来ないほうが幸せなのかもしれない。

「起立、礼」

第一章 春、香る < 5 > (後書き)

本文修正 12/10

第一章 春、香る & l t ; 6 & g t ;

2 時限 3 時限と終わり、放課時間になるたびに例の件が頭を凭れさせていた。そして今は昼休み。

この時間を有意義に使うと、屋上や実習教室などで昼食を摂る生徒は多い。周りがざわめいている中、自分の席に座ったまま右腕で頬杖をつき、窓から外を眺めていた。

「どうした？ 黄昏ちゃって」

ゆっくり振り向くとそこに梅田が立っていた。

「別に……」

そう答えると、また外に目をやった。

「まあいいや。今泉、飯は？」

今朝、母が弁当を作るのをお休みすると言っていたのを思い出した。

「ああ、どうするかな……」

「じゃあ、いっしょに食堂行かないか？」

購買でも、どちらでもよかった。

「ああ…… そうだな」

「なんだよ、元気ないな」

「ああ……」

気を使わせているのがなんとなく分かる。

二人で食堂へ歩きだが、俺の歩みは梅田に見えない縄で強引に引っ張られているようだった。

一階の食堂に入ると、そこは軽音楽が流れる綺麗な空間が広がっていた。

職員室ほどの広さに、できるだけ寛げるよう所々に 1 5 0 c m ほどのゴールデンカップクが置かれている。壁には、清潔感を思わせる白を基調にした壁紙が張られていて、訪れる者のほとんどがやすらぎを感じるだろう。

入ってすぐ右側には食券販売機が設置してある。そこで毎日決められた5種類のメニューの中から選んで食券を購入する。そして厨房のおばちゃんへカウンター越しにその券を渡して待つ。

その間、厨房で生徒達の注文に追われ忙しく動き回る姿をぼーっと見ていた。

麵を茹でる人。ご飯を茶碗に盛る人。食器返却口から食洗機に運ぶ人。それぞれが分担してこの戦場と化した厨房内で激戦を繰り広げている。

「はい、お待ちどうさま。ラーメンセットね」

脇に置いてある割り箸の束から一膳取り、出来上がったこの700円のラーメンセットを持ち、すでに座っていた梅田のところへ歩いていく。

歩く他の生徒を掻い潜りながら、白く丸いテーブルを挟んで対面側に座る。

梅田は俺が席に座ることに気が付くと

「今泉、これ」

そう言っただけで用意してくれていた水の入ったガラスコップを、テーブルの中央に置いた。

「ありがと」

早速、割り箸を割り数本の麵を挟む。そして口に頬張るが、吸い込む時に湯気が気管支に入って咽てしまった。思わず、吐き出すまじと口をどんぶりに近づけながら麵を噛み切りそのまま飲み込んだ。

「そんなに焦らなくても」

梅田はうどん定食のかき揚げを頬張る。

その言葉に反応を示さないまま、また何本かの麵を口に運んだ。この食堂で初めて食事をしているのに、なんの感想も思いつかない。しかも、このラーメンセットが美味しいのか不味いのかそれさえも興味がわからない。ただ、情性に目の前にある料理を食べているだけだった。

しばらくして梅田が両手でどんぶりを持ち、うどんの汁を飲み干

し終わると、

「あのさ」

目線を梅田に向けると、不安げな表情をしていた。

「朝からずっと変だぞ」

そう言われて、俺は静かに箸を置く。

「やつぱ、そう見えるよな……」

「なにかあったのか？じゃなく、あったんだよな？」

梅田の洞察力は、鋭く正解だった。

「あ、うん……」

成るように成れと考えればそれはそれで済むことなのかもしれない。でも、あれは彼女なりの間接的な告白と俺は捉えている。だからといって、らしくない状態になっていることを、まだ数日しか会って間がない梅田に話すのはどうかと躊躇われた。

本来、校舎内にいるうちは学園生活を第一と考えるのが普通の優先順位だとは思っただけ、今はどうしてもそんな気になれなかった。

他人から見れば、そこまで引きずるほど大きなイベント事ではないのかもしれない。しかし、このことが大きな壁のように目の前に聳え立ち、解決できるまでそこから一步も動けず金縛りにあっているようなそんな気がしていた。

「何があったのか、分からないけど僕でよかつたら聞くよ？」

周りのいろんな雑多音より、この変哲もない言葉が何より一番強烈に心へ響いた。

そして思った。

いっそのこと打ち明けても良いのかもしれないと。

昨日の昼休みから今に至るまでの経緯を話してみた。

梅田は、両腕を組み椅子の背凭れに上半身を預けた。

「ううううん……」

このての話で、即回答を出せる人はほとんどいないだろう。

梅田は、その顔の表情からして親身に考えてくれてるようだ。

一度鼻で深呼吸してから、

「僕もあまりこういう話題は苦手なんだけど……とにかくその子と話をしてみたらどうだろうか？ 所したら、いろんな事から開放されるかもしれないよ」

それは、自分でも分かっていた。

「まあ、そうなんだろうけど」

「それに」

「それに？」

「うん、それに今の今泉の顔をもし彼女が見ていたら、あまり良い気はしないと思うよ」

「……」

俯いた視線の先に、コップの周りに付いた水滴がゆっくりと下へ流れ、他の水滴と交わりながら大きくそして早く流れて行くのを、目で追っていた。

確かに……

「まだ友達に成り立ての僕が思うんだからさ」

その瞬間、壁が崩れ落ち瓦礫となる破片すら綺麗さっぱりなくなった思いがした。そして、知らないうちに一步を歩み始めていた。顔を上げると、今まで気にもならなかった事が見え始めていた。

隣のテーブルで女生徒達が最近の話題で楽しく会話していること。

それから、この食堂にだけサン・サーンスの組曲「動物の謝肉祭」

く白鳥が軽やかに流れていること。

「なんとなく気持ちが晴れたみたいだね」

「そうかもな」

冷めたスープを吸って太くなった麺を口いっぱい押し込みながら、俺は梅田に感謝していた。

これが高校に入学して初めて親友と呼べる友ができた、掛け替えのないひとときだった。

それ以来、放課のときはいつも梅田とゲームのことや、今までお互い触れた事のない恋愛のこと、それからあまり大きな声では話せないようなことまで、いろいろ気持ちの部分で打ち解けることができていた。

徐々に他のクラスメートとも仲良く話せるようになって、友達の輪が大きくなっていくことがたまらなく嬉しかった。

半月が過ぎた頃には、このクラスで俺の事を今泉ではなくヒカルと呼ぶ生徒が多くなっていった。

それから日を追うごとに気温も上昇して、男子は紺のブレザーを脱ぎ、女子はブレザーから同じ色のベストに衣替えしていた。ズボンやスカートも通気性のよい生地で、そろそろ夏を感じさせる季節と変わりつつあった。

でも、季節がいくら変化していても後戻りさせる記憶はそのまま残っていた。

忘れていたわけじゃない、切っ掛けとなるタイミングを待っていた。

それに家へ帰れば、たまに遥から尋問を受けていた。

どうなった？なにやってるの？どうする気なの？他に誰かいるの？関わりたくないような事を言っておきながら、これだ。

まったく、女ってやつは。

裏では何かあるのかもしれないけど、全ては彼女との会話で決まる。

そろそろ夏休みを意識し始める頃、彼女と俺は偶然に下駄箱で2度目の遭遇となった。

一瞬、彼女とは気がつかなかった、それはメガネからコンタクトレンズに変えていて、髪形も違っていたからだ。

彼女はクラブハウスに向かう途中で急いでいるようだった。俺はというと、予定もなくただ帰宅するだけ。

お互い顔を見合わせハツとした表情だったが、先に口火を切ったのは彼女だった。

靴に履き替えて、俺と向き合い両手を後ろで繋ぎ少し俯き加減で、「えっと……この後……時間……ある？」

来るべき時が来た。

「うん大丈夫。でも部活……あるんだよね？」

彼女は顔を上げて、にっこりとする。

「覚えてたんだ」

そりゃあれだけ遥から尋問やら罵声を受けてれば嫌でも忘れないだろうし、逆に忘れるほうが困難なわけで。

「どうすればいい？」

「ううん、どうしよつか」

咄嗟に、静かであり人目につかない所を思い起こしていた。

「あ、屋上なんてどう？」

同じことを考えていたようで、

「そうね、じゃあ屋上で少し待ってて。部室で用事終わらせてすぐ向かうね」

「わかった、先に行ってる」

彼女は恥かしそうに走っていった。

見えなくなるまで目で追い、体育館の建物で見えなくなるとゆつくりと、屋上へ向かった。

予想はしていたが、いざと成るとやはり緊張する。

こういう状況は過去にもあった。でも、平常心でいられるはずもなく場所を指定するときでも、頭の中にハツカネスミがグルグルと動き回っているようだった。

途中、食堂の自動販売機で小さめのホットミルクティを2本買い、鞆の中へ入れた。そして結論をどうするべきか考えていた。たぶん、いろんなことを話すだろう。あれから一ヶ月ほどの猶予があったのだから、当然彼女は回答を求めてくるに違いない。

どうする……

前置きの話に流された勢いで、安易な回答だけはしたくない。それにお互い高校生になったばかりとはいえ、小中のときのような御ままごとレベルとは違う。経緯はどうであれ、彼女の話をつくり聞いてみてからでも遅くはないと思った。とにかく話をしよう。

屋上の扉を開けると辺り一面、薄っすらと茜色に染まりつつあった。

舞上った気分だったがあの時の判断は正しかった。放課後だけあって、ここで時間を潰す生徒は誰もいなかったからだ。

「ここに来るのは2度目が……」

持っていた鞆をベンチに置き、ただ何を見るわけでもなくフェンス際で景色を眺めていた。強くはないがやや風が吹いていた。その風は冷たくはなく、上着を必要とすることはない。少し前なら上着がほしいと思っただろう。桜も葉桜と変わり、陽も段々と長くなる。そして梅雨の時期が到来し真夏の前の貯水補給をする。

そろそろ夏か。

自分の影が伸び少し強めの風が吹いたとき、屋上の扉が開く音と同時に女性の声が聞こえた。

「もう……」

振り向くと左手でスカートを押さえ、もう片方の手で髪の毛が舞うのを押さえている彼女がいた。

周りを見渡して俺を見つけると、恥ずかしそうに近寄ってきた。

「ごめんね、遅くなって」

「いや、景色見てて時間のこと気にならなかったから」

そう言っただけで景色に視線を戻す。

彼女は右隣で同じく景色を眺めた。

「ここ……初めて」

「俺は2回目かな」

しばらく無言が続いた。先ほどの穏やかな時間とは違う、男と女

二人つきり独特の時間が時を刻んだ。

心の中で否定と肯定を繰り返すような、そんな押し問答を繰り返していた。

「あのさあ……」

微妙に震えた声が、振り向いてほしいと訴える。

彼女に顔を向けると、右手はフェンスを掴んで小刻みに震える左手は握られていて胸元にあった。向けられる眼差しは優しく真剣そのものだった。

「遙ちゃんから、聞いてると思うんだけど……」

「うん、聞いている。それと手紙のことも」

そのとき彼女の少し日焼けした顔が赤く染まるのを見てとれた。そんな彼女を見て俺は動揺してしまった。

「あ、いや、うん、その……まずかった……かな？」

いつものように人差し指で眉間を掻く。

「ううん、いいの。たぶんそうなると思ってたから」

そう言くと、彼女は一度目を閉じ、そのまま顔を外へ向けた。

「えと、ごめん。もっと早く俺がこういう場を作るべきだった」

このシチュエーションで、どう包み隠そうとしても無駄だと思い、あれからの心境を嘘偽りなく話すことにした。

「あれからすごく悩んだ。遙にも、散々あれこれ言われた。それと、塞込んでいた時があつて、クラスの友達に心配を掛けたりもした」

彼女は真剣に話を聴く。

「でも……それより何より、俺の意思がどうしたいのかが判らなくて今日までずるずると来てしまった」

俯いてしまう彼女。

「だから……ごめん！」

目をグッと瞑り深々と頭を下げる。咄嗟に頭を下げたものの、彼女の表情が気になった。

怒っているだろうか、それとも泣かせてしまったか。

二人の間を風が通り過ぎ、しばらくして彼女が口を開く。

「いいの……」

その言葉が聞こえると、彼女の表情を見つめた。

「私もね、実はあんな事しなければと後悔してたんだ」

彼女は穏やかで、それまでのような緊張ではなく安堵したような表情で語り始めた。

「あのとき、もしあんな手紙ではなく話ができていたならと、何度も一人で反省してた。今まで同じクラスになったこともなくて、だからたぶん私の事知らないと思ってたし……」

心を見透かされていたようだ。

「私ね、中学の頃から陸上やってて、いつも日焼けしてるから男の子みたいって言われてた。髪も短くて、みんなからそう言われたのが切っ掛けで伸ばし始めたけど、まだこんな感じ」

彼女は髪の紐を解くと頭を左右に振った。解かれた髪は空を舞い落ち着くと肩ほどの長さだった。

そして小声で、

「男の子から声掛けられた事……ないんだ……」

空を見上げ、瞬きをするその目には潤むものが傾いた陽の光で輝いていた。それは一人寂しく、今まで苦悩した証のように見えた。

「周りの女の子は、普通に彼氏の事とかデートがどうだったとか楽しそうに話すの。でも私はその話に加わりたくてもできなかった。

それどころか逃げてた。そんなとき思ってたんだ……どうして他の子にはできて、私にはできないんだろって」

話の端々に切なさを感じる。

「羨ましかったんだ……でもね」

彼女は振り向き、俺の顔を確認するかのように見つめ思い出を語る。

「そんなとき、君と出会ったの」

「それって」

そのとき俺は眉を反応させた。

彼女はそれを見逃さなかった。

「あ、でも勘違いしないで。別に誰でもよかったとか、そういうのじゃなくって」

両手のひらを前に軽く左右に振り、取り繕うように話を続けた。
「たぶん、覚えてないと思うけど。中学の部活で運動場を走った時、目の前にボールが転がってきて拾ってあげたことがあったの。それに駆け寄って来た君に手渡してあげたの……覚えてる？」

まったく記憶に残っていない。片鱗でもと探るがどうしても思い出せなかった。彼女は首を傾げる俺の表情を見ながら話を続けた。

「そしたら君が、ありがとうって言ってまた戻っていった。そのときね、立ち竦んだまま見とれちゃった……格好いいって。あんな人が彼氏だったらなあって」

記憶にない自分を褒められているようで、恥かしく眉間に指がいく。

「それからなんだあ……君を意識するようになったのは」

話を聴いているうちに、あの昼休みに思った第一印象が変化していくのを感じた。

「ごめん、覚えてないや……」

彼女は残念な表情をしながらも、明るく話す。

「そうよね、別に特別なことでもないし覚えてるはずないよね」

すごく悪い事をした気分だった。でも出会いなんてそんなものだとも思った。以前、女性の普段なんてことない仕草に惹かれたことがあった。だから気持ちはわかる。

「でも俺は、君が言うほど格好よくない。それに何処にでもいる駄目男だよ」

彼女は下から覗き込むように見つめる。

「そう？」

その何気ない行動に一步身が引けた。

「うん……」

戸惑った表情が可笑しかったのか、彼女は鼻でくすりと笑った。

「私……嬉しかったの」

「何が？」

「こんな私でも、恋ができるんだってね」

そう言った時の彼女の顔はとても輝いていて、注がれるその眼差しは生き生きと満ち溢れていた。

俺にはない物がこの子には有ると思った瞬間だった。

そして聞いてみたくなった。

「俺のどこが気に入ったの？」

意地の悪い質問だった。この質問の答えはとても難しく、もし俺が問いかけられた立場なら口を開くまでかなりの時間を要するだろう。

それでも聞きたかった。

「ううん、なんだろ」

彼女は昔の事を思い出しているようだった。

ずっと向けられていた瞳は、極狭い範囲を左右に落ち着きなく動いていた。

数分の沈黙を得て、彼女はこう答えた。

「どこの部分とかそういうのじゃなくて、君から醸し出す未来絵図って言ったら格好付け過ぎ？」

「ううん……」

言葉の意味が理解し辛かった。たぶん、いろんなことが複雑に絡んでいるのかもしれない。だけど容易く出てくるような言葉ではない事だけは分かる。

「なんかね、君が見てるものを私もいつしよに見たくなった、そんな感じかな」

「なかなか、奥が深そうだね」

腕組みをして首を傾げていると彼女はまったくすくすと笑い、俺もその笑顔に釣られて苦笑いした。

「あ、そうだこれ」

ここに来る途中で買った、ミルクティーを鞆から取り出した。
「ありがとっ」

お礼の言葉に笑顔で答えた。

缶を握るとまだ温かく、封を開けて飲んだ。

彼女はそれを受け取ると、近くにあったベンチに腰掛けた。そしてスカートからハンカチを取り出し、スカートの上に広げミルクティーの口を開け一口飲んだ。

彼女は缶を両手で持ち、人差し指でプルタブを一度弾く。そして俯いたまま口を開いた。

「あのね……」

「ん？」

何かを決意するように、彼女はゆっくり深く呼吸する。

「私の事……どう思う？」

核心を突かれた。覚悟はしていても、YESかNOを迫られるのはどうしても気持ちが右往左往する。

「だけど。」

「佐々木さん……」

「葵でいいよ」

顔を上げ、力強い視線を送ってきた。

「葵さん……」

ミルクティの缶が凹むほど力が入る。

「俺は」

2人見つめ合い俺は物静かに語った。彼女の両手に添えられたミルクティは手と共に震え、ひと筋の涙がゆっくりと頬をつたう。

彼女の瞳は潤いが止むことなく夕日に照らされていた。

そんな彼女に俺は、

「……」

第一章 春、香る < 6 > ; (後書き)

本文修正 12 / 10

第二章 最強アイテムは夏 <1>;

夏休みの直前、学生にとってある数値や評価がデータとなって各個人に送られてくる。つまり、成績表のことだ。これだけは、いくら社会が変わっても受け継がれている。誰が初めに決めたことなのか、いい加減うんざりする。気分が落ち込む理由は単純で、出来が悪いそれだけだ。勉強を頑張ればそれはそれでやらないより、少しは成績も上がるだろう。しかし、上がったからと言って、そこでまた気を抜いてやらないでいると下がる。極々当たり前のこと。何が問題かと言えば、現状を維持しつつ更に頑張る、これができない。授業の内容がどうかそういうことじゃなく、その習慣が身についていないから結果としてこうなってしまう。それが本日、開示される。

されなくていいのに……

だが、今年の俺は少し違う。成績表の事なんかまったく眼中にない。それは、例のオンラインゲームで必要なものが明日、全て揃うのだ。なんたる偶然、なんたる神様の悪戯。休み期間中の最大の楽しみがネットゲームとはまさに駄目人間のお手本。まだまだ一年生、なんとでもなる。そう本気で思っていた。

今日は半日で終わる、みんな夏休みの予定で頭いっぱいだろう。隣で石本姉妹が水着がどうか、海がなんだとか話している。実は先日、石本姉妹からその海の件でお誘いがあった。どうやら、親戚の人と行く予定だったのがキャンセルになったらしく、女ばかりで行くのもつまらないから、いつもコンビを組んで話題になっていた俺と梅田の駄目ンズに、白羽の矢の的として選ばれたようだ。この姉妹にとって俺達は、一応友達の部類にセッティングされてるみたいだ。梅田はその矢にいと簡単に貫かれたようだが、俺はその矢を躊躇なく手刀で叩き落とした。しかしその後が大変だった。そりやもつ集中砲火のように攻撃されたさ。しかもあの双子だけならま

だしも、他の女生徒まで参戦してくる始末。困り果てている時、他の男子に救援をお願いするが誰も近寄ろうともしない。

それは何故か。それは、このクラスの勢力分布図がほぼ女性で支配されているからだ。まったく男女平等とはよく言ったものだ。どう見ても今の世の中は女性社会で成り立っている。歴史の授業に出てきた男尊女卑の社会にまで戻してくれとは言わない、だがせめて平等という言葉を守ってほしいものだ。小さな頃、父から男は度胸、女は愛敬と言われたことがある。しかし、今時の女性は愛敬もあれば度胸も座ってる。更には権威もあれば財力までフル装備してやがる。どうやら働き蜂と女王蜂との地位の差は、永遠に埋まることはないようだ。押し問答をしていたとき、たまたま新見の姿が視界に入った。あいつは涼しい顔をして教室から消えていった。

やつでも歯が立たないという事が……

あのクールなところは正直羨ましい。

「私達の誘い断るんだ？」

「何様のつもり？」

「なんとかならないの？」

「それ、格好つけてるつもり？」

「これって男としてどうなの？」

「バカじゃないの？」

「だから成績悪いのよ」

成績は関係ないだろう……

「女が頭下げてるのよ？」

下げるどころか、罵声受けてるのだが。

腹立たしさや失望を感じながら、なんとか沈静させることができ、とにかく断ることができた。そもそも行くに行けない理由が俺にはあった。

それにしても、まさかこれがコンビの仲を揺るがすクエストの始まりだったとは、思いもなかった。

その後、塚原先生からの伝達事項の話も終わり、これで晴れて夏

休みに突入する。

浮かれた気分で、鞆に宿題が沢山詰まったPCを締まっていると、梅ちゃんから話があるからと呼ばれた。

その話は、非常に切羽詰った内容だった。

それは、入学式から一ヶ月ほど経過した頃まで遡る。

葵サプライズクエストが一先ず決着、そしてゲーム会社に登録の申請を済ませ、あとは登録完了通知を待つのみ。その間、ただ普通に学園生活を楽しんでいた。

昼休みに、食堂で梅ちゃんといつものように食事をしていたときだった。石本姉妹が、両手に購買で買った菓子パンやサンドイッチ、ジュースを持って空いてる席を探す為、うろつろとしていた。それに梅田が気が付いて呼び止め、同席することになった。初めは差し障りのない会話で盛り上がっていた。普段何をしてるとか、どんな遊びをしてるとか。そして徐々に彼氏や彼女の話題に変わっていく。年頃の男女が避けては通れない分野ではあるのは間違いがない。すると、梅田が事もあろうに言わなくていい事を口走った。あの葵サプライズの事だった。

「こないだ、ヒカルが他のクラスの子から告白されて、相談に乗ったことがあったよ」

俺は自分の事を言われて渋面した。そして咄嗟に「しっ！」っと右手でゼスチャーする。

すると、梅田が俺の顔を見て異変を感じ焦って謝罪した。

「ごめん」

怒るつもりは更々ない。しかしコンビ内の極秘事項で暗黙の約束事だったのは言うまでもない。

まったく……

だが、そんな事はお構いなしに、石本コンビは詳細を知ろうとする。当然と言えば当然の反応なのかもしれない。梅田は自分が起こしたこの失態をなんとか取り繕おうとする。

俺は俺で、食べ残っていた豚カツを口に頬張り黙秘の体勢を決め

込む。

「え！そうなの？」「誰？誰？」「どこのクラス？」

「あ、でも僕もあまり詳しく知らないから……」

「えー教えてよ」「相手の子の名前ぐらい知ってるんでしょ？」

「そこまでは……」

「ふーん、そうなの？」「ちょっとぐらい教えてくれてもいいのに」

梅田の防衛線はすでに突破されたらしく、俺の所へ戦火が飛んできた。

「どうなのヒカル君？その子と付き合ってるの？」

無視無視……

甘美な情報の漏洩はネズミ算のように広がる危険性が高い。だからこれ以上提供するわけにはいかない。

それにしても、先ほどから質問責めてくるのは姉の綾で、妹の亜美はジツと状況を見守っている。性格の違いがよく分かる光景だった。

「ねえねえ、亜美」

「あなたも気になるでしょ？」

「私は……別に……」

なぜか、困っているように見えた。こういった話題が苦手なのか、それともただ単に興味がないのかそれは分からない。

「あたしは、ちょっと興味あるんだけどなあ」

こいつは……

昼休みの時間も残りわずかになってきたことだし、そろそろもう良い頃合だろう。

「はいはい、おしまい」

そして、立ち上がり食べ終わった食器を返却口へ運んだ。

綾にしてみれば、敵本陣まで詰め寄り、あと一太刀あれば大将の首を刎ねることができた。しかし、俺がひらりと背後から峰打ちを食らわせ気絶させた。そんなような心境で、とても無念に思っ

いるのだろう。

つまりこのやり取りの最中、梅田の胸中に何らかのフラグが立った。

それは、石本亜美の事が気になる存在と変化して、日が経つと共に恋心となって宿った。

どのタイミングでそうなったのかは判らない。でも、男女物語のはじまりは得てして単純なものだと俺の自説論の一頁に書き込みされた。

梅田は真剣だった。俺はその気持ちに胸打たれ、渋々首を縦に振った。

まあ、つまりそういうことだ。

夏休みに入って初めの土曜日、俺は緯度34度42分17.22秒、経度136度59分49.224秒の地点に水着姿で、眩しいサンレイを全身に受けながらじりじりとした砂浜に立っていた。

なあゝんでこんなところにいるんだろ？なあゝ俺……

はは……

「ヒカル、ありがとな」

そう言つて梅田が寄つて来る。

オレンジカラーのサーフパンツで、所々色抜きしたような柄。初めて会ったときも思ったが、やはり体格はがっしりしていて色黒だ。

俺は、ネイビーの両サイドに赤と黄色の縦帯線入りサーフパンツ。

梅田の体格には負けるが、中学で部活をしていたおかげで、その名残がまだ残っている。

そして嬉しそうな梅田のその表情には、今日ここに来た理由がないのであるか十二分に理解できていて、意気込みのようなものを感じさせた。

「どういたしまして」

俺は俺で人数合わせで来ているわけだが、来てしまった以上それなりに楽しむことにしていた。

「それにしても……暑い」

目の前を手で日陰を作っても、砂浜からの照り返しでまったく意味がない。

「ほんと、暑いですね」

ビーチパラソルの日陰で座りながら亜美がそう言った。

ハワイアンブルーがベースのスカート付きアンダーワイヤービキニで左の胸のところには椰子の葉がプリントされていて白い肌によく似合っていた。普段見えない部分は、とても女性らしく見入ってしまいそうだった。男ならそれを褒めてあげるのも一つの甲斐性。

「よく似合ってんじゃん」

亜美は恥ずかしそうに俯き

「ありがとうございます」

梅ちゃんが惚れてしまった理由がなんとなく分かった気がした。

「お待たせ」

着替えが終わって更衣室から綾が走ってくる。

「おう、待ってやったぞ」

「偉そうに」

綾は目を細め、俺の高飛車な言葉にそう答えた。

黒縁のサンフラワーカラーでホルタービキニ。薄っすらと日焼けした肌がその山吹色と似合っていた。そして、妹よりもスレンダーで、この姉妹だけで歩いていたら、ナンパ目当ての男は間違いなく声を掛けてくるだろう。

どんな仲だろうと、周りの男達からは羨ましく見られているはずだ。そういう意味では、なんとなく優越感に浸れて気分がよかった。そんなことを考えている間、梅田は俺の隣で一生懸命、浮き輪とビーチボールを膨らませていた。

律儀なやつだ……

「なあ、梅ちゃん」

「なに？」

俺は梅田ににじり寄り耳打ちした。

「俺は姉と遊んでるから、梅ちゃんはここで妹と遊んでてくれ」

梅田は俺が何を言わんとしているのか、すぐに理解してくれた。

「あ、ああ、すまん」

そう言って微笑した。俺は右手を握って親指を上にした。

「グッド・ラック」

「うん」

俺は早速、綾に駆け寄り

「姉ちゃん、俺といつしよにあっちへ泳ぎにいかない？」

綾は振り向きざま、睨んできた。

「なにそれ？ナンパ気分？」

「はは」

三枚目を自分から引き受けた以上、これぐらいの道化は必要だろう。

「いいじゃねえか、いこうぜ」

不本意ながら、その誘いに乗ってやろうという口調で

「はいはい、わかったわよ」

「じゃあ、亜美と梅田君も」

「あ、いいのいいの」

「妹さんは梅田に任せて、俺達だけでいこうぜ」

そう言って、綾の右手首を掴んだ。

すると綾が、俺の手を振り払うと疑うようなじろつとした目付きをした。

「何か企んでる？」

う

鋭い

まあ、当然か……

どうしたって不自然だった。だが、俺のここでのミッションは出る限り梅ちゃんと亜美を二人きりにさせることだ。それには、なんとしても綾を俺といつしよに別行動させる必要がある。

「何にもございませんことよ」おほほほ「

道化もここまですると胡散臭いか……

益々、疑いは深まったようで綾の眉間には皺が寄っていた。

「まあ、いいわ乗ってやろうじゃないの」

綾は両手を自分の腰に胸を張ってそう言った。

この女、侮れん……

「じゃ、そういうことで」

俺はまた綾の右手首を掴んで、波打ち際へ引つ張っていった。

海にゆつくり入っていくと、火照った体が冷やされてとても気持ちよかった。

徐々に全身を海水に沈めていき、一度頭が隠れる程度まで潜って勢いよく海上に跳ね上げた。顔に残った海水を手で払うように拭うと、綾が俺の行動を一部始終見ていた。

「子供みたいにはしゃぐのね」

「なにが？」

「なんでもなく」

小笑いして、沖の方向へ泳いでいった。

俺は綾を追うように泳いだ。

朝、最寄の駅に集合したときから今に至るまで、綾の性格をちょっとだけ理解しつつあった。でも、亜美についてはまだどう接して良いのか判断しかねていた。それは、綾は投げかけられた言葉には、必ずと言っていいほど投げ返してくれる。

でも、亜美は投げかけるとキャッチしたまま、投げてこない事が多い。だから、どんなことを考えているか読み取りにくい。性格やいろんな問題があるのだろう。だけど、他人に自分の事が理解されにくいのは、非常に損だと思う。すでに、俺の中では亜美と綾ではこれだけの差が生じている。だから、この人選はとても楽だ。逆に梅ちゃんが苦勞しているのではと、心配になるぐらいだった。

海底に足を付けると、海面が胸の下ぐらいになる場所まで泳いだところで、綾が話し掛けてきた。

「ねえ」

「どうした？」

先ほどと違って、少し神妙な表情をしていた。

「どっちが、ピエロ？」

「はい？」

その表情と質問の意味は、何が言いたいのかなんとも分かる。

「大体、察しは付くけど」

「……」

見抜かれているようだ。

女とは恐ろしく鋭敏なセンサーを持つてる生き物だと思った。

誘導尋問だったとしても、何時かは話すことになる。ならここままで状況判断されてるのだから、隠す理由もない。

「まあ、誰がどう見たって、俺だよな」

「でしょうね」

俺が答えた言葉なんか聴かなくても分かると言たげな口調だった。たぶん、彼女の頭の中ではすでに俺の事が有罪と示す陪審員で、犇めき合っていたのだろう。

「世の中って……」

「複雑で残酷ね……」

綾はこの雲一つない大空を見上げてそう言った。

俺も、空を見上げたが横目で綾を見ていた。

こいつは、何が言いたいんだ……

しばらく、海水の小波と風切り音、そしてどこから聞こえてくるのか鳥の鳴く声を鑑賞をしていると

「お腹空いたし、お弁当にしましょうか」

今度は清らしい表情をしてそう話す。

「お、おう……」

不思議なやつだ……

この短時間の間に、俺が心の中で呟いた言葉を総合すると、綾は人ではない何か違う未知の生命体になっているのではと、想像してしまった。

そしたら、つい笑いが混み上げてきて声が出てしまった。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

久々に心のクリーンアップしたようで、そんな気分になれただけでもここに来た甲斐があったと思った。

波打ち際まで戻ってくると、梅ちゃんと亜美は楽しそうにしていた。

梅田は左手を頭に、亜美は口に手を抑えて笑っていた。傍から見ると微笑ましい光景だ。

うまくいったみたいだな……

午後はあまり気にすることなく行動できそうだ。

綾が亜美に近寄ると耳打ちして

「ちよっとお手洗い」

そう言つて、二人とも更衣室の方へ歩いていった。

俺としては、現状報告が聴けそうで、好都合だった。そして二人が視界から消えると、俺は梅田に詰め寄った。

「どう、調子は？」

梅田の口調は軽い。

「今のところ、お互い気軽に話し出来ていい感じかな」

嬉しさが、笑顔に滲み出てるようで、この言葉を聴かなくても伝わってくる。

「そっか、よかったな」

「うん」

先ほどの亜美の表情からすると、友達以上にはランクインしてるようで、あとは梅田がどこまで彼女を掴むかだと思った。

しかし、これからが一番難しい。人間は常に同じ感情を保っていることはまず有得ない。五感に感じるものが少し変化するだけでマイナスにもプラスにも唐突に変わることがある。それはすごく自然なこと、誰にでも当てはまること。だから、今は良くても次会った瞬間、気が変わることは予測の範囲内と考えていてもよいかもしれない。つまり一時の小さな幸福に胡座をかくのはとても危険な

のだ。事に、女性に関しては女心と秋の空と言われるほど移り変わりやすい。

そう考えると、単純なのか複雑なのか判らなくなる。数学とか物理のようにそれに対応した方程式で答えが出せるものは、分かり易くていい。いつそ、そうできたらどれだけ楽だろうか。恋愛の大半はそんなことで時間を消費している。それが有意義なのか無駄なのかそれは誰にも答えが出せないだろう。ただ、そういった積み重ねが、愛を深く太く強い絆にしているのは間違いないとは、なんとなく理解していた。これから先、それを実感でたなら、なんとなくではなく自説論の一頁に自信を持って加えることができるだろう。

とにかくこのまま行けば俺の役目も無事にミッションコンプリートだ。

やれやれだな……

それから少しして、石本姉妹が戻ってきた。

4人パラソルに揃うと、姉妹は持ってきた弁当を広げ始めた。俺と梅田はそれを囲うように座る。弁当の蓋を開けると、なかなかバラエティに富んだおかずが並んでいた。亜美が割り箸をそれぞれに配り終わると綾がこう言った。

「これ亜美が全部作ったの」

「あたしは料理苦手だから……」

人を外見で判断しちゃいけないと言うけど、この場合、外見は良く似てるから性格で判断すると、口には出せないが納得。

ただ、言わなければ判らなかつたのにも思った。

「お口に合うか判りませんが、どうぞ、召し上がってみてください」

そういつて少々不安げに微笑む。

ここはまず、梅田の出番だと思い、肘で軽く押した。

梅田は何？つと言いたげな顔をするが、すぐに気がついたのか、おかずを一つ取って口に頬張った。俺を含め3人が梅田の顔に注目する。

そして飲み込むと当たり前とばかりに感想を述べた。

「うん、おいしい」

それを聴くと姉妹は安心したように、お互いを見合って喜んだ。
ここで不味いと言うやつはほばいないわけだして……

処世術と言えばそれまでだが、世間一般でいうところのコモン・センス。

因みに、ほぼを付けた理由は俺自身の事。

昔小学生の頃、手作りチョコレートが苦くてつい不味いと言っ
てしまったというまさに苦い思い出。

俺も一つ食べてみた。確かに美味い。文句の付けようがなかった。

「お、うまいうまい」

すると綾が横槍を入れてきた。

「ヒカル君が言うとなんか噓くさいよね」

「信用ないなあ」

ほんと失礼なやつだ……

「あ、それと俺の名前にわざわざ君をつけなくていいから」

姉妹はまた顔を見合わせて同時に話す。

「なんか、恥ずかしいよね……」

「なんか、恥ずかしいです……」

「君がついてると、なんか上から目線で呼ばれてるみたいで嫌な
んだ」

「そうなんだ」

「そうなんですか」

「それと梅田の事も梅ちゃんでもいいよな？」

そう言って、梅田に話題を振る。

「なあ、梅ちゃん」

「あ、うん、それでいいよ」

なんなく了承。ただ、梅田の反応が鈍い。たぶん、亜美の件で頭
の中がいっぱいいっぱいなのだろう。

気持ちは分かるが、気後れは事を仕損じるぞ……

せつかくミツシヨンのアフターサービスしてるのに。してあげて
いると恩を売るつもりはないが、そう呼ばれることは決して損には
ならないはず。

「わかった」

「はい」

それについては、綾、亜美共になんの抵抗もなかったようだ。

「じゃあ、あたし達のこと、綾と亜美でいいよ」

「それはちよつと……」

即、反対した。

「なんで？自分のことは強制して、あたし達は駄目なの？」

「冗談だよ、あはは」

「ほんとヒカル……って意地悪」

「なんか、まだ恥ずかしい……」

「まあ、どうしてもって言うなら君付きでも構わないけど」

「それにしても、綾はよく喋るのに、亜美は無口だな」

弁当を食べ始めてからもそうだ、やはり綾と比べて亜美は無口と
言われてもおかしくないほど、口数が少ない。

「そう？」

「うん」

「そんなことないですよ」

「そうかい」

「はい」

「お家ではよく喋るよ」

「まあ、梅ちゃんとよく喋ってたみたいだし、別にいいか」

そう言った途端、亜美の表情が一瞬曇った。梅ちゃんは気付いて
いないみたいだが、俺は見逃さなかった。

「ちよつとトイレ」

そう言っただけで俺はこの場所を離れた。

亜美は何かが噛み合っていないそんな気がした。視点もあっちこ
っちと落ち着きがない。綾はハキハキと会話に加わってくる。やは

り亜美には何かがあるような気がしてならない。

まさか、梅田とうまくいってないのか？

そんなはずは

梅田から報告を聴いた感じだと嬉しそうだった

気のせいだろうか

なんであれ、俺が気にする必要はない。

今日の俺は綾が言うピエロ。道化師は道化師らしく場を盛り上げていればいい。

そうだな

午後からは、何かに囚われて気を使うことなく、自分らしく行動した。ただ一点だけ気をつけながら。それはミッションとかそういうことではない。梅田との友情。石本姉妹のことは、その友情の複線に過ぎない。だから俺が今重要な事は友情を壊さない事、それだけだ。

心地いい疲労をした体は、よい具合に日焼けしていた。

その後、俺達は今朝集合した場所まで戻り、夕焼けの陽の下、楽しかった思い出を惜しむようにお別れの挨拶をして、それぞれの家路に着いた。

家に帰ると、母はキッチンで夕飯の支度、遙は自室にいた。

「あら、おかえりなさい」

普段と何も変わらない母が玄関にやってきてそう言った。

「疲れたでしょ、お風呂沸いてるから入ってらっしゃい」

「うん」

俺は洗い物を洗濯機に放り込み、風呂に入る。湯船に体を沈めるとチクチクと日焼けした肌に染みる。首まで浸かるとひとつ息を吐き出し、天井の明かりを見つめた。

あれでよかったのだろうか……

今日の出来事を思い出していた。

湯から上がり、髪を洗って火照った体にシャワーで水をかけ風呂場から出た。バスタオルで全身を拭き、Ｔシャツと短パン姿で

キッチンに向い冷蔵庫からよく冷えたミルクを取り出しマグカップに注ぐ。そして一気に飲む。冷たいミルクが喉を通り過ぎていく。感触が気持ちよかった。母が食材を包丁で切っている脇から空になったマグカップを洗い場に置くと、リビングでソファに深々と座りこみテレビを見ながら寛いだ。別に見ようとして見ていたわけじゃない。外国語の分からない俺が、洋物の音楽を歌詞の意味も理解できないままただ気分聴いている。そんな感じで、ただ目に映る映像を眺めていただけだった。

リビングの空調はよく効いていた、まるで流れる空気がダイヤモンドダストのように冷たく、それが肌をシャーベットののような舌触りで優しく触れ冷やしてくれた。

「ご飯の用意できたわよ」

母が俺を呼んだ。呼ばれるまま俺は食卓に向い食事を始めた。しばらくして遙も椅子に座り食べ始めた。

「顔赤いね」

フォークに白身魚のフライを刺したまま、俺に話し掛ける。

「わかるか？」

「うん、超真っ赤」

「そうか」

母も食事をしながら話す。

「今日は水分いっぱい摂って寝なさいよ」

「なんで？なんで？」

いつもの母の自説論話した。

日焼けは軽い火傷で、焼けた肌は多くの水分を消費している。だから、消費した分、補給しようとする。とにかくいつもよりいっぱい水分を摂っていればとりあえずはいいと言う事らしい。ただし、コーヒーや紅茶は駄目。含まれているカフェインは利尿作用が働き、体内水分を放出してしまう。補給するなら、吸収しやすいスポーツドリンクか水ということになる。

母の医学書じみた話しはこれまで数え切れないほど聴いてきた。

どれも浅く広い知識だが適切な対処法だった。

俺はそんな話をいつも物静かに聞くだけ。遙は身を乗り出すように興味深々で、聴いていた。語り聞かせる立場としては、遥のほうが一番可愛いと思うだろう。

「ごちそうさま」

食事を済ませ自室に戻り、いつものようにメールチェックする。そして、ヘッドギアを頭に取り付け、両手にFRセンサーを装備する。椅子の背凭れを少し倒しリラックスした体勢でキーボードのエンターキーを押す。

第二章 最強アイテムは夏 <1t・1> (後書き)

一部語句修正しました。

第二章 最強アイテムは夏 <2>

夏休み初日、今日は長々と待ったあれが届く。学生ならCD2枚ほどある容量の宿題ファイルに答えを入力し始めるのが普通。だが、すでに頭の中の優先順位は最下位に位置していて、天使と悪魔の戦いも宿題のファイルが届いた時点で、天使が白旗を掲げていた。しかも、その天使の白旗は敗北の意味ではなく、宿題の問1を読んだ結果だった。そして無駄な戦闘を回避できた俺の悪魔は、白いシンメトリーで大きな屋敷の庭に、メイドが運んできた紅茶でティータムと洒落込んでいる。その紳士な悪魔は、鼻下でカップを揺らし香りを嗅いだあと一口飲むと、背中に翼を持ったメイドに一言こう言ってティーカップを投げつける。

「君、温度が低いから茶葉が開ききっていないぞ」

目に涙を貯めたメイドが、割れたカップの破片を震えた手で拾う。そして俺は誓った。

天使よ、8月下旬にはお前がこの屋敷の主人だ・・・

昼食を済ませ自室でサイト閲覧をしていた時、下階から母が俺宛の荷物が届いたと部屋まで運んできた。手渡すなり母は、この荷物は何か問いかけてきた。そして俺はこう答えた。

「参考書のセット」

「ふん」

そう鼻で答えた母の視線は、ゲームサイトが映ったPCのディスプレイを見ていた。

「頑張ってね」

顔は微笑んでいても、その目は間違いなく疑っていた。

TVドラマなら、オープニングで出演者の名前の横にこいつが犯人と書かれているようなもの。それでも、説教のひとつも言わなかった母は偉大だと関心した。

嚴重に梱包された包装には、スリーエスと社名ロゴがプリントさ

れている。いつもなら丁寧に梱包を解くところだが、それさえも忘れるぐらい中の品物を早く見たいがために手付きが焦っていた。封が開いていくと、新品独特の匂いが俺を更に挑発する。そして、次々と正体不明だった付属品のヘッドギアやFRセンサー、DVDあと説明書が目の前に姿を現す。一つ取り出すごとに品定めしていた。ヘッドギアは、工事現場で使うヘルメットのような物を想像していたが、意外にシンプルでコンパクトにできている。外見は黒のメタリックで、内側にはセンサーの受信機と思われる施しがされていた。例えるなら足ツボマッサージにある沢山の小さな柔らかい凸凹だ。試しに装備してみると、額から後頭部にかけてバンドで固定でき、その後頭部から野球のグローブのように太い指が2本前頭葉に向けて頭の形に添って伸びている。両耳には骨伝道型ヘッドホンが取り付けられていて、左耳からはその延長に小型のマイクが付いていた。そして、各所には折りたたみ出来るように間接部もあった。気になってディスプレイは、ゴーグル型湾曲液晶ディスプレイで、額のバンドに取り付け上下に開閉できるように作られている。その形は少々大きめだが、軽量化と長時間プレイでもあまり眼精疲労しないように工夫されていた。これに付いていた説明書をさらっと読むと、他の用途には使えないようで、このゲームの為にだけに開発されたようだ。あとFRセンサーだが、コットン生地の手袋を利用して、通気性をよくする為、等間隔に穴がくり抜かれていた。リストバンドから手の甲側だけ縫うように細いケーブルが、全てのセンサーに繋がっている。センサー本体は第一関節から指先まですっぽりと包んでいて、プレイ中は両手10本全てに装備しなければいけないようになっていた。これらを見ると、益々どんな世界なのか興味が沸いてくる。すると導かれるように説明書を手に取り、ログインするための手順要項を読み漁った。DVDをドライブに挿入して、次々と出てくるウィザードの問いかけに答えていく。黙々と設定をしている間、今までにプレイしたネットゲームは、ユーザーを退屈させないために気分を高揚とさせるような演出映像が流れ

る事が多かった。しかし、このゲームにはまったくそれが無い。母がこれを運んできてから、すでに4時間が過ぎようとしている。好きでやっている事とはいえ、さすがにこれでは飽きがきてしまう。一息入れようとキッチンから飲み物を持ってくることにした。時計を見ると18時を回っていて、キッチンに行くと母は晩御飯の支度をしていた。そんな母を横目に俺は冷蔵庫を開け、ペットボトルにコップ一杯分ほどのオレンジジュースを見つけた。そしてそれを取り部屋に戻ろうとする。

「もう少しでご飯よ」

母は俺を見るなりそう言う、そして俺はそれに無言で頷く。部屋に戻るのを諦め、ペットボトルのキャップを取り外しジュースを一気に飲み干した。仕方なく作業を中断して晩御飯が出来上がるのを、リビングでテレビでも見ながら待つことにした。

「ただいまあ」

ソファーに座ってしばらくすると、遙が部活から帰ってきた。そして帰ってくるなり脱いだ靴を散らかしたまま、俺が座っているソファーに荷物を投げ置き、キッチンで冷蔵庫の扉を開けて何かを物色し始めた。

「おかえり」

母はテーブルに食器を並べながら遙にそう言った。

「なーんだ、ジュースないじゃん」

「お兄ちゃんが、さっき飲んじゃったわよ」

「あつそ」

「それより、もうちょっとでご飯だから先にお風呂入ってらっしゃい」

「はい」

遙は適当に返事すると、セーラー服の胸元の紐を解きながらバスルームへ向った。いつもながら遙の行動は、がさつだ。

俺が持っている女性のイメージをことごとく壊してくれる。気を使えとは言わないが、もう少し御淑やかな振舞いができないものだ

ろうかと、いつも思う。するとバスルームからバタバタと走る足音が近づいてきた。足音の主は、恥かしげもなく下着姿でソファに投げた荷物を鷺掴みすると、またバスルームへ戻っていった。

「これ！そんな格好で」

今の行動が母の目に留まったようだ。

確信犯は、照れ笑いをしてバスルームの扉を閉めた。

まったく・・・

30分程して、遙がバスルームから出てくるとすでに食事も出来上がっていた。そしていつものように、3人で食事をした。

「ごちそうさま」

食事を済ませた俺は、早々に自室へ戻った。飽きていた気分は、時間が経つとまた興味が沸いてくるようで、黙々と作業を再開する。設定や入力事項も終わり、ちよつとしたインストールも完了した。あとは一度PCを再起動させて、ログインするだけとなった。

よし！・・・

再起動の間、各付属品を自分に取付けていると、遙がいきなり部屋へ入ってきた。

「お兄ちゃん、なにかDVD貸して」

そう言って俺の姿が目に入ると、ビックリしていた。そして不思議な物を見るような表情に変わる。ご尤もな反応だった。付属品をフル装備した姿を初めて見たら、誰だってそうなるだろう。

「なに・・・それ・・・」

ゆつくりと歩み寄り、怖い物に触れるように手を伸ばしてきた。

俺はその手を払い退けると眉間に皺を寄せた。

「ノックぐらいしろ、それとそこから勝手に持って早く出て行ってくれ」

「う、うん・・・」

こちらをちらちらと見ながら、棚からいくつかDVDを手に取り、自室へ戻っていった。たぶん遙の事だ、今見たことを母に告げ口するだろうと予測した。そしたら間違いなく母はここに来るだろう。

そのあと、ひと悶着あつて気分を害する状況になるのは明らかだった。

どうするか考え込んだ。

今日はここまでにしておくべきか・・・

それと、こつも考えた。

逆に、これを遙に説明して防衛策をとるか・・・

「うーん」

ここまでセットアップして、ログインをお預けではあまりにも今日の俺は報われない。そう考えると結論は一つしかない事になる。

俺は装備を外し、遙の部屋へ向う。ノックして入室の了解を得ると、扉を開けあの状況の意味を細かく説明した。その間、遙は理解できたのかできなかったのか分からないような返事をしていたが、とにかく一通り話した。そして、最後に最重要事項の件を約束させ、再度念を押して自室に戻った。安心はできないが、今夜は大丈夫だろうと思つた。早速、例の物を装備してログインの体勢をとる。説明書によると、リラックスできる環境でプレイしてくださいということだった。椅子の背凭れを後ろに傾け、普通に座っている体勢よりも寝る姿勢に近づけるようにした。あとこのゲームは、開始のインターキーを押したあとはキーボードやコントローラなど付属品以外の装置を一切使用しない。要するに、従来のような十字キーやボタンを押すという行為が必要ないのだ。すると次第にPC画面は真っ暗になり、一瞬電源が切れたという錯覚に陥いるが、アイディスプレイに映像が映り始めたことで、そうではないと判る。初めは靄がかかったような白い映像で、ハッキリとした視覚エフェクトに変わっていく。徐々に気持ち吸い込まれていくようで、鼓動の高まりに反してリラックスした精神状態になっていった。しばらくその状態が続くと、カメラのフラッシュのような閃光が3回光った。

なんだ？・・・

その閃光で目が眩み、目に映る映像を戻すため何度も瞬きをする。しばらくして画面はブラックアウトした。するとディスプレイ中央

にこのゲーム会社の社員だろうか、一人の若い女性の上半身が映り語り始めた。

「はじめに」

「弊社の商品をご購入また、ご登録いただき誠に有難うございます。一同を代表して、ここにお礼申し上げます。」

「さて、この商品についていくつかの注意点を説明させていただきます。」

「このゲームは、リアルを可能な限り忠実に再現されたファンタジーワールドです。美しく綺麗な映像の反面、ショッキングな映像も含まれています。予めご了承ください。また、プレイ中はリラックスできる環境でお楽しみください。その他、操作方法やトラブルに関しては説明書をご参照ください。」

・
・
・

「では、心ゆくまで The Transmigration Of The Soul の世界をご堪能ください。」

ナレーションが終わると、また先程と同じく白い閃光が目の前に広がった。

そして、いよいよゲームがスタートする。

第二章 最強アイテムは夏 <3>

閃光により閉じられた瞼を開くと、何処かの一室の天井が映った。眼球だけ動かして見回すが、明らかに自分の部屋ではなく、まったく知らない場所だった。

電灯もなく、4畳ほどの部屋にひとつだけある小窓から、月明かりが、まるで風に揺らめくレースのカーテンのように射し込んでいた。この部屋は丸太の木材を組合わせた建造物で、頭に浮かんだのはキャンプ場にある古びたログハウスだった。当然だが、こんな所に来るはずもなく居るはずもない。だが、そんな事よりも酷い頭痛で目眩がしていた。寝ていた床から上半身を起こし、しばらく目頭を抑えていると徐々に症状が緩和していく。それと自分の手や足、体の感覚も鮮明になっていく。

感覚？・・・

目頭を押さえていた手を、大きく開きよく見てみると、普段見慣れた自分の手のひらではない事に気付く。そう、CGで出来ているのだ。
コンピュータグラフィック

どういうことだ？・・・

確かゲームにログインして、それから・・・

ひとつの仮説が頭をよぎる。

まさかそんなはずは・・・

しかし、指を一本一本自分の意思で動かそうとすると、CGの指はどのように動く。

ここは、ゲームの世界・・・なのか・・・

顔に触れると肌の感触から体温、それと微かだが脈動まで伝わってくる。

こんな・・・こんなことが有るはずが・・・

ふと頬をつねってみると、感触が痛みとなって伝わってくる。

マジか・・・

ゲーム世界でここまで具現できるものなのか・・・

自分のCG化した体をあちこち触ってみても、現実と同じような感触が伝わってくる。ここまで具現化出来るのかと考えると、このゲームを作ったスリーエスに対して恐怖を感じた。そしてその恐怖心は手や体の震えに同調していく。しかし、その震えは時間と共に喜びに変わっていった。

「すごい！」

それにしても、全身を触ったときに気付いた事がある。それは全裸だったことである。まさかこの格好でロゲインとは思わなかった。設定なのか、それともこういうシステムなのかは分からない。だが、全裸はどうかと思う。自分の視点からしか確認する事ができないが、色白で俺のリアルの体より少し筋肉質。背丈と顔の輪郭は分からない。ただ、あれがない。たぶん、そこまでの具現化は、開発の段階でいろいろと問題があったのだろう。漸くこの体にも慣れてきて、なんとか立ち上がってみる。そして歩いてみると現実世界で実際に歩いているような感じだった。他にもいろんな動作を試してみた。筋肉、バランス、疲労その他付随する全てが、自然で感動してしまう。ここまで具現化されるとゲームという感覚がなく、ここは現実世界だと錯覚してしまいそうだった。

確かに、これは今までのゲームとはまったく違うな・・・

しばらく、この感触を楽しんでいると重量感のある音がゆっくりと近づいてくることに気が付く。するとその音はこの部屋の前で止まり、扉が開いていく。俺は開かれた扉の向こうを凝視する。

「ほう、もう体の感触に慣れているようだな」

漆黒の仮面と鎧を纏ったキャラが大人びた声でそう話す。

「ふふ」

なんだこいつは？・・・

「ヘッド、リムーブ」

漆黒キャラは鼻で笑い、そう口にすると仮面のCGが徐々にデジタル分解して消えた。そして仮面で隠れていた素顔が曝け出す。銀

色のロングヘアと男前の輪郭、高い鼻おまけに異性を魅了するようなライトブルーの瞳。格好いいとしか言いようがない、成人男性の顔をしていた。

「え、えと・・・」

どう声を掛けていいか戸惑っていると、手を腰にそのキャラは話し始めた。

「T2の世界へようこそ」

「俺は、ジオ・セリア このギルドのリーダーだ」

「呼ぶときは、ジオでいい」

「あ、えと、ども・・・」

「俺は・・・」

そういえば、自分に名前がない事に初めて気付いた。ログインのときにもそんな設定画面はなかった。

「ああ、君の名前は相棒と相談して、すでに決めてあるから心配ない」

決めてある？・・・

「それって？・・・」

事前に読んでおいた説明書には載ってないことばかりで、どうしたら良いか分からなかった。

「他のゲームでは、自分で名前を付けるのが普通なのだが、このゲームは違う」

「バースシステムで産まれるキャラの名前は、そのシステムを使ったペアレンツで付けることになっている」

「はい？」

「バース？・・・システム？・・・」

「まあ、追々分かることだ」

「そんなことより、その格好のままではまずいな」

「まず、装備のことをマスターしてもらっ」

それからジオと名乗るキャラは、装備のことについて教えてくれた。装備は手に入れる物と製作する方法がある。今の俺は、アイテ

ムなど何も持っていないから製作するしかない。そしてその製作方法なのだが、ユーザーのイメージと精神状態、それからこの世界のステータスの注目度でいつでも作ることができる。だから、注目度の数値が低いだけで、とりあえずの装備ならすぐにでも作ることができるというわけだ。しかし、これが簡単なようではなかなか難しい。何が難しいか、それはイメージで外見を構成するのだが、どうしても断片的になってしまう。例えば、Ｔシャツを作ろうとする。すると虫が食ったような穴が、いたる所にできた物が出来上がる。ジオが言うには、イメージトレーニングと慣れだそうだ。それからしばらくこの装備作りに悪戦苦闘する。そして、やっとそれらしい装備が出来上がった。上が薄茶色で厚手の麻のような生地、ベストに白のＴシャツ、下が黒革のハーフパンツとベストと同じ色のロングブーツ。ジオは俺の姿を見て、とりあえず頷いた。しかし、自分では全身を確認することができないと伝えると、鏡がある場所へ案内してくれた。この部屋から出ると５０メートルほどの木造の屋根付き廊下が続いていて、先ほどの部屋は本部となるギルドの建物の離れだったことがわかった。そしてその廊下から外の景色を眺めると、農村のような風景がギルド本部を囲うように広がっていた。

「ここは？」

「ここは俺達ギルドメンバーが作った集落だ」

「まだまだ小さな集落で安っぽい建物ばかりだが、そのうち立派な建物が並ぶ大きな拠点にしてみせる」

ジオは足を止め、希望と野心に溢れるような目と表情で俺にそう言った。俺は更に問い掛けてみた。

「ここにはどれぐらいの人がいるのですか？」

その問いかけに、ジオは考えるように腕を組んで答え、また歩きます。

「昨日までで、ざっと１０人ぐらいか」

その人数が多いのか少ないのか、俺にはこの世界にどれぐらいの住人がいるのかさえ知らない。だから判断のしようがなかった。そ

もそも何もかもが分からないことばかりで、説明書に肝心なシステムなどは、まったく言っていないほど記されていない。だから、少し苛立ちを感じていた。とにかく一つずつ覚えていくしかない。

ギルド本部の入り口まで来ると、あの部屋の中で想像していたような、ログハウスのような建物が建っていた。お世辞にも素晴らしいとは言えないが、雨風を凌いだりちよつとした集会をするには申し分ないだろう。ジオは入り口の扉を開けると、俺を招き入れてくれた。中に入ると一風、西部劇で出てくる小さな酒場のようなインテリアで、各所にテーブルと椅子そして奥にはカウンターも作られていた。広さは、ジオが言っていたこの村の住人全員が寛げるくらい。所々に調度品が置かれているが、これといって目を引くような物はなかった。

「こつちだ」

物珍しく見渡す俺をジオが鏡の前で呼ぶ。呼ばれるまま鏡の前に立つと、そこにはジオに勝るとも劣らない若い男の姿が映っていた。

これが俺のキャラか・・・

服装は、まったく強そうには見えず、ファッションセンスの欠片もない格好だった。しかし顔や体格は一目で気に入ってしまった。髪の毛は、短くて黒髪で前髪の一握りの束だけ赤毛。それと目の色が左右違っていて、右がライトブルーで左がライトグリーン。それ以外は、少々筋肉質の白人男子と言ったところだ。

「装備はそのうちとして、キャラは状況次第では変化していくから、これが全てではない」

「へ？」

「まあ、その辺も含めて少しずつ教える」

そう言って、俺の肩をポンッと叩いた。そして思い出したように

「それと、今から君の名前は グラン・ソープ だ」

グラン・・・ソープ・・・

「これで、初期の登録はある程度完了した」

「あとは君次第だ」

「申し訳ないが、私は用事でログアウトするが、キャラは残るの
で何か質問があれば聞いてくれ」

「ただ、私がい実際に考えた返答が返ってくるわけではない」

「それだけ注意してくれ」

「では、またな」

「え、あ、あの・・・」

名前の事とか、登録情報で確認したらそうになっていたからなんとなく理解はできたが、最後のログアウトしてキャラがどうこの意味が分からん。とにかくその事で問いかけてみることにした。

「あの・・・ジオさん？・・・」

「なに？」

「ログアウト？・・・」

「プレイヤーはすでに落ちている」

「だが、私で良かったら相談に乗ろう」

特に、外見の変化はないが、表情や仕草が先ほどとなくなってきたような気がする。というシステムなのか興味があった。それに俺がログアウトしても、このキャラは残るのだろうか。

「プレイヤーがログアウトするとどうなるの？」

ジオは淡々とログイン状態と変わらない声で答えた。

「プレイヤーがログアウトした場合や音信不通の場合は、本人に代わってAI（人工知能）がこのキャラの管理をする」

「管理とは、プレイヤーが行動した内容及び経験をデータとしてサーバに保管されている。そして、ログアウト又はなんらかの理由で音信不通と判断した場合、その保管されているデータがAIによって引き継がれ、この世界で行動し続けるようになっていく」

「すなわち、今動かししているのはAIである私だ」

「そして、もう一つ」

「何かの都合でプレイヤーが解約などの処理をした場合も同様に、キャラクターとデータは受け継がれたまま存在、そして更に成長も続ける」

「だから、総人口が増えることはあっても、減る事はない」

それからAIは他にも多くの事を語って聞かせてくれた。この世界で重要なのは注目度で、ステータス名は *Noteworthy* *Level* を略して *NL* と呼ばれている。その数値を稼ぐには、他のプレイヤーやAIに対してなんらかの影響を及ぼすような事をする^{プレイヤー}と自動的に変化するシステムになっている。例えば、PKや商売、あとクエストなどの作成で自分の認知度を高める事が一般的な方法のようである。あとキャラの成長システムとしてレベルの概念がなく、リアル^{プレイヤー}の精神状態とNL、そしてプレイスキルが大きく関係しているそう^{プレイヤー}だ。あと戦闘などで死んでしまった場合は、蘇生魔法というスキルともう一つの方法で生き返ることができる。だが魔法スキル^{プレイヤー}の場合は失敗する事もあるようで、そうなると灰色のキャラとしてその場所で倒れたまま時間と共にデジタル分解していく。その後プレイヤーはゲームオーバーではなく、モンスターとして転生する。だからモンスターとはいえ、人かAIのどちらかが操作していることになる。それにより今までのネットゲームのように、パターン化した攻略法を作ることができないようになっていく。より高度な戦略と行動力、そして判断力が必要となってくる。それと蘇生するもう一つの方法とは、モンスター化してから自分のキャラがデジタル分解してしまう前に、ある行動をすることで復活が可能になる。その行動とは、自分のキャラを喰らうことだ。これの他にも方法があるが、この場合、復活ではなく転生。つまりまったく別のキャラとして転生することになる。そしてその方法とは、モンスターとなって人型キャラの殺戮を行うことだ。ただし、そのままモンスターとしてプレイすることもできる。

しかし、どの方法を選択したとしても、あまり気分の良い方法ではないことは明らかだ。だが、これは俺の主観であって他の人はそう思っていない場合がある。世の中、殺戮を楽しみたい人だっているだろう。

そしてこのゲームの最大の目標は、神としてこの世界を大きく左右させる力を得ることだ。しかし、そこに辿り着くにはいくつかの試練をクリアする必要がある。それは、ヘブンズゲートとヘルズゲートの二つの門を開き、そこに君臨するボスを倒す事、そして最後に先代の神を討破ることだ。ただ、ここで大きな問題が出てくる。天国と地獄のボスそれと神を倒すには、一人の力だけではまったく勝ち目がない。倒すには多数の力が必要になる。しかし、もし倒せたとしてもこれは単なる通過点に過ぎない。何故なら・・・

神の座は一つしかないからだ。

つまり、それによって神の間は血で血を洗う戦場と化す可能性がある。

だから、プレイヤーの最大の焦点は、如何にここで勝利することができるかである。

そして、その力を手にした者はこの世界を意のままに操り、手に入れられなかった者はそれに静かに従うことになる。それが嫌なら勝ち取るしかない。

勝者には絶大な権力、敗者には絶対な服従、そしてどちらにも類しない者には屍に等しい。

俺はそれらを聴いて、考え込んだ。

それは、先ほどログイン状態のジオからは、こんな殺伐とした世界であることを微塵も感じさせなかったからだ。俺は戸惑った。このゲームから手を引くには早いほうがいい。もしこのキャラに愛着を持ってしまったら、それこそ苦しくなる、そんな予感がしていた。でも、あの梅田はこのゲームを楽しんでいると言っていた。

本当にそうなのだろうか・・・

所詮ゲームだからいつでもやめればいいと思う反面、自分で決意して始めた事で、こんなに簡単に諦める優柔不断さにイラつく思い。そんな感情が行き交いすれ違う摩擦で、思考回路を熱くさせていた。

こつした気分がさらに苛立ちを増幅させる。そして長所であり短所である、第3者の考えに飛びつく事にした。後日ジオ本人に直接、同じことを聞いてみてから結論を出すことにした。

俺はこんな事も自分で決められないのか・・・

第二章 最強アイテムは夏 <3 >; (後書き)

御意見指摘等、どしどしお待ちしております！愚痴や文句でも構いません。

第二章 最強アイテムは夏 <4>;

初ログインをしてから、時計の短針は2の字を少し超えたところを指し示していた。ヘッドギアや指のセンサーを取り外しながら、改めてこのゲームのシステムに感心させられていた。しかし、あのAIの話を思い出すと、他のプレイヤーとのコミュニケーションというものをどうすれば良いのか考えてしまう。これまでのゲームと違うのは判るが、かなりヘビーな設定が次回のログインを躊躇させる。だからといって、ここで投げ出すのも気に入らない。そんな事を、あれこれ考えながらベッドへ体を横たわせると、いつしか眠りに就いていた。

翌日、変な体勢で寝ていたせいか、首が少し痛い。そんな気だるい気分を引きずりながら、階下でキッチンやリビングを覗くと誰も居ない。そして玄関には俺の靴だけが残っていた。時計を見ると10時を回っている。汗ばんだTシャツが不快で、昨晚忘れていたシャワーを浴びた。遥はたぶん部活、母は買い物にでも行ったのだろう。キッチンで何か軽く食べられる物を探してみると、食パンを見つけた。それと冷蔵庫からバターを取り出し、トースターにセツトしてスイッチを入れた。焼きあがる間、マグカップにコーヒーの粉末とスプーン一杯の砂糖を入れ、ポットからお湯を注ぐ。しばらくして、焼けたパンにバターをぬり一口かじる。シャワーのおかげで気だるさはないが、ゲームの影響と寝違いのせいでまだ少し頭が重い。食事を済ませ、後片付けをしたあと自室に戻り、PCを起動させて公式HPの確認をした。そして、このゲームに係るサイトもいろいろ閲覧してみたが、やはり俺が昨晚体感した以上のことは一切なかった。少しでも何か情報が欲しかった。

ないか・・・

また、ログインする為にウィザードを起動させるが、その前に梅

田宛にメールを送ることにした。

初ログインした事、それと名前がグラン・ソープに決まった事。

そしてプレイした感想も添えた。たぶん、このメールについて何らかの返送が来るだろう。しかし、それを待つことなくログインを実行した。ログイン画面が起動開始すると、昨日と違ってナレーションはなく、一度だけフラッシュしてほんの数秒で完了した。そしてアイデイスプレイに映ったのは、集落の中にある小さな池の傍に立っていて、太陽が真上に昇った風景だった。周りには、粗末な丸太小屋が6軒と畑、それと、集落を隠すように5メートルほどの木々が生い茂るように立ち並んでいた。池には小魚が泳いでいて、それほど深くはなく、水面の波紋がとても自然に円を描き、時折太陽の日差しが波紋に反射して眩しかった。そして水面に映る自分の姿は、昨日と同じで何も変わっていないようだ。それにしても奇妙な感覚だ。ログアウトしていた間、AIが行った行動や体験した事が、俺が操作した記憶として存在している。どんな仕組みでこうなっているのかは分からない。だけど、確かにこれなら不在中に何が有ったのか確認することができるし、なにより半信半疑だったAIが操作している事も納得できる。正直、素晴らしいシステムだと思った。そして記憶を思い起こすと、あれから二人のキャラと出会っていた。

一人目は、俺がログアウトしてすぐの事だった。長身の成人男性で名前が デイ・キャンバレッツ。この集落に人探しのために訪れてきたキャラで、一目見ただけでその装備の素晴らしさに心奪われてしまった。夜中だというのに、ホワイトパールの甲冑が月明かりで輝き、その人の半径3メートルがぼんやりと明るく照らしていた。AIが見入っていると、デイは話し掛けてきたが初心者だと答えるとその場を立ち去っていった。

二人目はログインする1時間ほど前。この集落を拠点にプレイしている女性キャラで、ブルーハワイの長髪に吸い込まれるような少し赤み掛かったブラウンの瞳と、白く澄んだ肌に潤ったチェリーピンクのルージュが、清純な大人を演出している。そしてなにより、

しなやかな体形に上着が白を基調にした赤い刺繍がされた長袖の和服で、下が紺色の短いスカート。そして絹のニーハイソックスにわらじを履いていた。その姿を見た時、洗礼された美しさで魅了されてしまいそうだった。たまたまギルドから池に向っている途中にすれ違い、名前は分からないが優しく微笑んで挨拶してくれた。そしてこの記憶が、昨晚からコミュニケーションのことであれこれ考えていたことを一気に吹き飛ばしてくれた。俺はもう一度会える事にわかに期待しながら、ギルド本部へ向うことにした。

ギルドまでは目と鼻の先で、歩いていると入り口付近に数人が立っているのが見えた。近寄っていくと、みんなはこのワールド共有の掲示板とギルド専用の掲示板を確認していた。そのときギルド本部の扉が開き、俺に命名してくれたジオが堂々たる態度で出てきた。そして、掲示板の前に俺がいることに気付くと、皆に紹介をしてくれた。

「みんなちよつと聞いてくれ」

ジオの声が聞こえると集まっていた4人がジオに注目した。

「昨晚、バースの新規キャラを紹介する」

「そこにいる、グラン・ソープ君だ」

籠手を付けた手で指差すと、皆が俺に振り向いた。

「右も左もまだ分からないと思う。もし困っていたら助けてやってほしい」

「当面は、俺が付いているつもりだが、そうでないときはよろしく頼む」

「以上だ」

ジオの話が済むと、皆が微笑んで俺を歓迎してくれた。そして個々に挨拶を交わし、このゲームの事や集落の出来た切っ掛けなど、いろんな事を教えてくれる。とても和気藹々として心地よい安らぎを感じた。その後、ジオと再度システムのことで聞いてみるが、俺はすでに、この時点でゲームを続ける事を心に決めていた。これまでの人生の中で、自分が必要とされていると実感できたのは初めて

の事で、この人達と楽しくプレイしたいと思えるようになっていたからだ。この世界の時間は、リアルと同じ間隔で進んでいく。だから、朝ログインすればゲームの中も朝で、夜ならここも夜。これには訳がある。なるべくユーザーの時間感覚を損なわないというのが理由らしい。ただ、これには問題があるようで、夜間しかプレイできない人は昼間の世界を知る事ができない。その逆も然りで、不平等に思う人がいるようだ。確かにそうかもしれない。だが、どちらにしても常時ログインできる人でもなければ、そこまで拘る必要がないようにも思えた。それと先ほど、ジオと話をしていたところとだが、食事という概念があるようで、この世界でも栄養の補給は必要なのだそう。肉が食べたければモンスターを狩り、野菜が食べなければ栽培などをする。そして、それをただ食べるだけでなく、料理したりその料理で商売することもできる。実に現実社会とあまり変わらないシステムだ。面倒といえばそれまでだが、それはそれで俺は気に入っているし、そんな事やりたくないと思うならAIに行動させればそれで済む。実際に体験したことがないから、不満や改良点は分からないが、集落を散歩しながら周りのキャラの行動を見てみると、何気にうまくいって出来たシステムだと思った。そろそろ昼食時間のようで、それぞれが料理や食事を始めていた。すると、ギルドメンバーの一人で セラ・マーベリック が俺を呼び止めた。

「グランさん、食事いっしょにいかが？」

20代前半女性のような声で、黒の魔道装束にパールの口紅が印象的な色気の漂うキャラ。

「いいんですか？」

「ええ、遠慮なくこちらにいらっしゃいな」そう優しく微笑んだ。

「ありがとうございます」

俺は案内された野外にある木製のテーブルに着き、陽差しの下、出された料理を頂くことにした。セラさんが調理したカボチャスープをスプーンで口に運び、パールのアイシャドウと口紅にドキドキしながら、大人の女性というものを感じさせられていた。彼女は

メッサ・ロメロ さんのペアレンツで、つい最近バーシステムにより二人誕生した事を嬉しそうに語ってくれた。

ペアレンツとは夫婦のようなもので、リアルほど格式ばった制約はないが、男女のパートナーのことである。そしてその契約をすることによって、バーというシステムを利用することができる。バーシステムとは、パートナー同士の間の子供を作るようなもので、それを利用すると、ペアレンツの指定した場所に新規ユーザーを登場させる事ができる。ギルドメンバーや仲間を増やしたいと考えているユーザーにはとても有効なシステムで、ペアレンツはこの世界のチュートリアル的存在も兼ねている。ただし、いづどんなキャラが登場するかは判らないため、それまでペアレンツは期待に胸躍らせて待つことになる。宛ら、鶴が白い産着に包まれた赤ちゃんを運んで来るのを、じつと待つ親の心境だろうか。しかし、知識的には赤ん坊でも、中身は15歳以上の人間。親の方針を素直に従うキャラも居れば、無関係とばかりに自由気ままにプレイするキャラもある。親は子を選べず子も親を選べず、ある意味自然の摂理に則った法則ではある。

「おかわりいかが？」

「あ、いえ、もういっぱいです」

「ごちそうさまでした」

緊張しているからだろうか、味の感想も伝えないままお礼を言つて、ここを立ち去ってしまった。終始笑顔を絶やさず接してくれたセラに、愛想のない態度をとってしまったと反省していた。

今度何かお詫びしなくては・・・

とぼとぼと歩いていると、集落の端にある大きな大木の下で上半身裸のジオが一心不乱に剣を振っていた。近づいていくと、微風だが振られた剣によって風が舞い、剣先の輝きが研ぎ澄まされた刃のように振り筋に残像を残して見えた。剣長4尺、鍔には上半身左右対称に、両腕を胸の前で交差しのけぞった長髪で裸身女性の青銅铸件と、柄にもそれに似た彫刻が施されたバスタードソード。こんな

重そうな剣を、ジオは難なく片手で振り回していた。

ジオは俺に気付くと、剣を下ろし地面に突き刺した。

「スキル上げですか？」

息を弾ませたジオは頷き、地面に崩れるように座り込んだ。しばらく俯き呼吸が整うと口を開いた。

「ここには慣れたか？」

「さつき、セラさんから昼食をご馳走になりました」

「そうか」

ジオはセラの小屋へ視線を向けた。

「セラは俺と同期でな、ペアのメツサもそうだ」

ひと呼吸して剣を見据えた。

「集落の外には出たか？」

「まだです」

「そうか、では今のうちに武器の事を教えておこう」

そう言うジオは立ち上がり、武器のことを話始めた。

武器は、前にレクチャーを受けて作ったこの服装と似た方法で、手に入れるか製作をすることで入手できる。違うのは、スキルとして剣技の数値が関係していることだ。剣技は先ほどジオが行っていた自主的に鍛錬する方法と、実戦闘で鍛えることができるが、この作業を怠ると低下してしまう可能性が有るそうだ。それと製作では、そのスキルと自分に見合った性能を発揮する装備ができる。ただし、ここでも俺が苦手なイメージが関係してくる。いくらステータスが高くてイメージが掛けていると粗悪品となってしまう。そしてもう一つ重要なことがある。それは、ログインしている時間だ。でも、ただ闇雲にログインしていればいいわけではない。ログインすることにより、その武器に対して愛着心を育てることで、性能向上の促進を促すことができる。だから、AIが操作している時間が長いキャラは良い物が作れず、キャラも弱い。それと防具もそうだが、もし優れた装備を何らかの方法で手に入れたとしても、その性能を活かせず、大半が宝の持ち腐れとなる。それにより、このゲーム

に慣れたプレイヤーは手に入れる方法よりも、製作したほうが確実でもっとも効率が良い事を知っている。

早速、俺も武器製作を試してみた。何度も試みるが、やはりこの服を作った時と同じで断片的な粗悪品が出来てしまう。

この状況をじっと見ていたジオが、イメージトレーニングに有効な方法を教えてくれた。それは作ってみたいと思う物をリアルで覚えることだ。つまりどこかで武器や防具の映像を探してきて、それを頭に焼き付けることでイメージの断片化を極力防ことができる。ただし、それで出来るのは造形だけで性能は伴わないとジオは言った。でも今の俺にはとても良い案で、しかももっとも早い近道だった。

「ああ、そうだ」

ジオは思い出したように

「君はセラと食事したと言っていたな」

「はい」

「そのあと、リアルで食事したかな？」

そういえば、食べていない。それでは体に悪いとジオは教えてくれた。そしてこの事がゲームにも影響していくことも。

そして実体験と勘違いし易いこのゲームは、所詮ゲームであって現実ではないのだと注意してくれた。

初心者の俺を氣遣ってくれたジオにお礼を言い、ログアウトすることにした。

ログアウトすると、空腹の勘を取り戻すようにお腹が鳴った。時計を見ると昼間の1時40分を指している。俺は椅子の背凭れを元に戻し、一度深く呼吸をした。このゲームは、自分のキャラに憑依するような錯覚を強く思わせ、リアル世界の自分を忘れてしまう副作用に気をつける必要があると胆に銘じた。説明書の一文に「実生

活を損なわず、健康である事が全ての喜怒哀楽を齎してくれる。そして健全な心は健全な肉体に宿る」と書いてあったのを思い出した。先日、流すように読んだ文章が、心に栄養として沁みた思いがしていた。

部屋を出て階下へ降りると、珍しくこの時間に遥がリビングに居た。貯め込んであったダウンロード番組を紅茶を飲みながら見ていた。

「珍しいな」

「うん・・・」

ドラマに夢中で気のない返事。俺はキッチンからマグカップを持ってきて、遥が用意したティーポットから紅茶を注いだ。

「部活は？」

「うん・・・」

ドラマは佳境で、BGMがより一層気分を盛り上げ、主役が必死に何かをヒロインに訴えかけていた。しかし、そのヒロインには思いが伝わらないまま、ドラマはクライマックスを迎えようとしていた。最後、ヒロインは死を選び、それを目の当たりにした主役は泣き崩れていく。悔しくも悲しい思いが画面から伝わってくる。遥をちらりと横目で見ると、特に表情を変えず、このドラマが再生終了すると、次のドラマを再生させた。目に涙でも滲ませていたら、ひやかしてやろうと楽しみにしていたが、これでは拍子抜けだ。

「つまらん・・・」

残念に思いつつ、キッチンで見つけたカップラーメンにお湯を注ぐ。カップの上にタイマーと箸を置きリビングで出来上がるのを待ちながら、次のドラマを見る。今度のドラマも恋愛系で、ヒロインが意中の男優とのトラブルに悩んでいるところだった。付かず離れず微妙な演出が続き、徐々に思いが伝わってきたころ、タイマーのアラームが鳴った。ラーメンの蓋を開きずると麺をすすっていると、遥は俺を睨んできた。

「気分台無しなんですけど」

麵をぐくりと飲み込む。

「は？」

「あつちで食べてよ」

「お、おう」

まんざらでもなかったようだ。あいつなりに感情移入させながら観ていたのだった。そしてリビングから追い出されて、仕方なくキッチンで食べることになった。ひとり黙々とラーメンを食べていると、リビングから祝福を想像させるBGMが流れてくる。たぶん、ヒロインの恋が実ったのだと俺は想像を膨らませた。すると先ほどの気分を害するようなコマースヤルが、軽快な音楽で響き渡った。どんなドラマでも始まりがあって、終わりが来る。クライマックスがハッピーだろうがバッドだろうが、視聴者にひとときの感動を与えてくれる。しかし、その感動の余韻を置き去りにしてコマースヤルが流れる。これほど落胆させる瞬間はない。大人の事情なのだろうが、もう少し考えてほしいものだ。

食べ終わって、遙に声を掛けることなく2階へ戻った。机に座ると一件メールが届いていた。差出人は梅田からで、開いてみると俺が送ったメールの返事だった。

「おめでとう、これでヒカルも仲間入りだね。僕よりいい名前だね。うん、ちょっとダークなゲームだけど、やっていればそのうち判るよ。あつちで会ったときはよろしく。それと例の件、絶対忘れないでくれ。頼むよ。またメールします」

例の事？・・・

ああ、あの事が・・・

夏休み直前に、梅田から懇願されていた石本姉妹との海水浴の事だった。正直忘れたい気分だが、そうもいかないのはよく判っている。それは梅田とあの妹とのプロトコル構築の為の大事なイベントだからだ。

依頼はきつちりやらせて頂きますよ、梅田君・・・

第二章 最強アイテムは夏 <4> (後書き)

私の作品、いかがでしたでしょうか？

おそらく文章が幼稚すぎて、苦痛だったかもしれませんか？
それでも読んで頂けたことに、心底、感謝感謝の思いです。

そこで、恥を忍んでお願いがあります。

愚痴、文句「こんな小説を投稿すんな！」でも構いません。
こんな私に、何かご意見をお聞かせください。

よろしくお願いします。

第二章 最強アイテムは夏 <5>;

この日、母は夕方になってやっと帰ってきた。聞けば、父の会社へ着替えを持って行ったのだそうだ。しかし、実の子供ならではの直感だろうか、いつもの母さんではないように見えた。にこにことしていても、どこか違和感のような感じがしていたが、自分の勘に自信が持てないから、何も聞こうとしなかった。帰ってきた母は、なにかを隠すように忙しく晩御飯の支度に取り掛かる。そして珍しく、遙がそれを手伝うと言い出して母の隣に付きまっていた。それを見て、やはり何か有ると勘ぐった。しかし、遙は何かを問い掛けることもせず、普段と変わらない態度で母を手伝っていた。

気のせいだろうか・・・

その後、いつもと変わらない食卓を囲み、そして各々の行動をする。母は食後の片付け、遙は風呂の準備をして、沸いたアナウンスが聞こえると率先して入った。俺は何をするわけでもなく、ただTVを観ていた。別に観たくてそうしていたのではなく、これ以外思いつかばなかったのだ。こういう時、普段なにもしない男は、ただ手を拱いているしかない。そして自分は無力だと悲観する。しばらくすると、Tシャツと短パン姿で遙がバスルームから出てきた。俺は待つてましたとばかりに、風呂場へ逃げ込む。いつもなら、何度も催促しないと動かないのと言いたげな表情をして、母は首を傾げた。あの時、自分の部屋に引き籠もる気分になれなかった。湯気で曇った鏡を拭き、映った自分の顔を眉間を狭め睨みつけた。

男は損だ・・・

桶に溜まった湯を、手のひらにすくい鏡に放り投げ、湯船に浸かった。

風呂を済ませて、濡れた髪をバスタオルで覆い、隙間から見える二人の顔色を確認するように部屋へ戻った。椅子に座り、壁に掛け

であるカレンダーに明後日のところへ印をする。PCを起動させ、その日の天候を調べた。晴れ時々曇り、前後2日は晴れで、雨の心配はなさそうだ。このままなら絶好の海水浴日和、久しぶりに羽根を広げられそうだ。今頃、梅田の頭の中は当日の事でいっぱいだろうな。

やれるだけやってみるさ・・・

そして、今日二度目のログインをする。午前にログインした時と同じく一度、閃光が光りプレイ再開。

アイデイスプレイにはまた池の傍で立っている風景が映り、辺りは月明かりの綺麗な夜だった。あれからAIの記憶は別段変わったこともなく、特に気にすることはなかったようだ。周りを見ると、ギルドや小屋にはロウソクの炎が灯り、窓から洩れる明かりの揺れ加減がとてモリアルだ。夜空を見上げると、星を遮る雲はなく、月の光に負けないぐらいの輝きをしている。しかし、ここからではどうしても木々が視界に入る。画面いっぱい星空を眺めようと場所を移動することにした。集落の敷地内を歩き回ると、どこも部分的に邪魔をされる。仕方なく敷地から出てみると、10cm程の草が生茂る草原が広がっていて、近くには小高く突き出した丘を見つけた。俺は良い場所を見つけたと思い、そこに急いで向う。丘の近くに辿り着くと、弱い風に靡く草葉の影とは別の何かの気配を感じた。モンスターか？・・・

忍足で近寄っていくと、どうやらモンスターではないことが判った。更に近づくと、両手足を大の字に広げ寝転がっているキャラが居た。そしてじっと目を凝らすと、AIが操作していた時に集落で出会ったあの名も知らぬ女性だった。警戒していた緊張を緩めてそのキャラのところへ歩いていくが、微動だにせず空を覗いていた。彼女の傍で歩みを止めても、時折瞬きするだけでただじっと夜空を眺めていた。しかし、先ほどから気にもしなかった弱風が、草葉と共に彼女のスカートを煽り、俺の顔を赤面させていく。

「あ、あの、こんばんわ」

「・・・」

「えっと・・・」

「・・・」

「押さえたほうが・・・いいですよ・・・」

「なに？」

若い声・・・

セラよりも若く同じ歳ぐらいの透き通った声だが、少し棘がある口調だった。

「いや、スカートが・・・」

彼女は視線だけ向け、俺の目をじつと見つめた。

俺は恥ずかしさのあまり、いつもの癖と同時に夜空に顔を向けた。

「そうね」

「あ、でも勘違いしないでくれ、見ようとして見たわけじゃないから」

咄嗟に自分を取り繕うように言ったが、彼女は眉も動かさず動じていないようだった。

「別にいいじゃない、ゲームキャラなんだから」

「見たかったらどうぞ」

そう言うともたまた夜空に視線を戻した。

「な・・・」

なんて、女だ・・・

まさかそんな言葉が返ってくるとは思わず、取り乱しそうになった。しかしこの言葉は、俺を試しているようにも聞こえた。

一度、咳払いをして気持ちを落ち着かせる。

「あ、いや、いくらゲームでも恥じらいは持ったほうがいいんじゃない？」

すると彼女は、視線と同時に顔も俺に向け不思議そうな表情をした。

「そうなの？」

「そうなんです！」

当然だという口調で、俺は語尾を強調して答えた。

彼女は俺の言った言葉で呆気に取りられ、次第に笑顔へと表情を変えた。

「あはは」

「そうね、ごめんなさい」

そう言っただけ足を閉じ、手でスカートを押さえた。

先程の態度とは一変、その素直な行動を見て俺は偉そうに頷いた。そして、可愛く笑う笑顔がとても印象的だった。

俺も彼女の横で寝転がり、夜空を眺めることにした。なんとなく腕を伸ばし、星に触れそうな素振りをする。

「ここ、よく来るの？」

彼女も夜空に顔を向ける。

「ええ、ここは私のお気に入りの場所なの」

「いいな、ここ」

「でしょ」

なんとなく、彼女の口調が嬉しそうに聞こえていた。たぶん、共感できる仲間ができたとも思われているのだろう。

「あ、そうだ、俺、今・・・グラン・ソープ」

思わず、実名を名乗ってしまいそうだった。そしてその事を打ち消すように問い掛けた。

「君は？」

しばらく、考えてから彼女は答える。

「内緒」

「え？」

キアラ名を隠す必要がどこにあるのだろうかと思ひに思ひた。

「なんで？」

「うふふ」

何かを含んだ笑いをしてから、しばらくの間沈黙が続いた。

「今度会ったときに教えてあげる」

そう言いながら、俺の頬を人差し指でつついた。

変な子・・・

無防備につつかれた俺は、不思議な目で彼女を見つめた。でもなぜか、嫌じゃなく、また会いたいとすら思えた。

上半身を起して、彼女は背伸びをする。

「あたし、落ちるね」

そう言って微笑んだ。

「またね」

「おう、また」

たぶん、もうＡＩに切り替わっているだろう。俺は彼女との会話の余韻を残しつつ、しばらく夜空を眺めて物思いに耽った。彼女との会話を頭の中で幾度とリピートさせていたが、徐々に眠気が襲いログアウトすることにした。早々に各付属品を外し、ＰＣをシャットダウン。椅子から立ち上がると、眠気でばやけたまま体はベッドに倒れこんだ。

夢を見ていた。

でも、すごく鮮明でリアルな夢。

さつき居た小高い丘の先端から集落を見て立ち竦んでいる。だが夜だというのに、俺のキャラや周りがまるで紅蓮の炎のような明かりで、照らされている。自分が見ているものを見ようとするが、何故かずっと三人称の視点から変える事ができない。

なんだ？・・・

誰かが断末魔のような叫び声を発している。それは一人ではなく、二人、いやもっと。それにしても、何故視点が一人称じゃないのだろうか。常に三人称だ。しかも、それは誰かが見ているような感じ

の映像。

いったいどうなっている・・・

どうすることもできない。そして一瞬、ある思惑が頭を過ぎる。

何かを伝えたい？・・・

だったら、俺の視点で見せてくれ・・・

どれだけ、もがこうが自分ではどうにもできず、ただ見せられるまま映像を睨んだ。すると俺のキャラが丘の上で頻りに叫び始めた。しかし、顔を歪めるほどの大声で叫んでいるのに、自分の声はまったく何も聞こえてこない。

なんだ？・・・

何を伝えたいんだ？・・・

誰か、誰か教えてくれ！・・・

もし、このまま何のヒントも摘めず夢から覚めてしまったら、途轍もない後悔の念と、取り返しのつかない思いで心打ちひしがれてしまうような胸騒ぎがしていた。

すると、ぱつと閃光で顔を顰めるが、その光の中でジオの姿がフラッシュバックした。

ジ・・・オ？・・・

ジオ？・・・

ジオが関係しているのか？・・・

それが何を意味しているのか、皆目見当がつかなかった。しかも、

初心者の俺にどうしろと言うのか。

俺に何ができるといふんだ・・・

そう、まだろくに武器や防具も扱えず、しかも製作さえも覚束無い俺程度のキャラに。

他にいないのか？・・・

それとも俺じゃないと駄目なのか？・・・

なあ、教えてくれ！・・・

そうしているうちに、映像の色合いが霞み、白くホワイトアウトしていった。

第二章 最強アイテムは夏 <math>1t;6g</math>;

現実世界に呼び戻されるように目が覚める。ベッドから起き上がり、階下の洗面台で鏡を見ると、体中をべつとりとした汗が滴り、顔には悲壮感が漂っていた。あんな夢を見たのは初めてだった。夢から覚めても、まだこんなに重々しく記憶に残っている。そして、自分が作り出した幻想だとしても、忘れ去れるような内容ではなかった。なんであれ、あの夢は俺にとって害悪でしかなく、朝っぱらから不安定な精神状態で、ちよつとしたことでも癪に障る。今にもこの鏡を叩き割ってしまいそうな、そんな気分だった。

今日は、二人とも家に居た。母は朝食の後片付けを済ませて、リビングで遙といっしょにTVを観ていた。俺が起きてきた事に気付くと、キッチンに朝御飯があると教えてくれた。味噌汁と焼き魚、しらす干しを添えた大根おろし、そして五穀御飯。リビングで寛ぐ二人を尻目に、黙々と食事をする。食べ終えようとしたとき、遙がTVのコマーシャルを観て、母に何かをおねだりしていた。遙の心を揺るがしたのはプール施設の宣伝だった。今年着る水着がほしいらしい。母には、その年頃の気持ちがよく分かっていたようで、仕方なく重い腰を持ち上げた。二人は俺に同行を求めてきたが、丁重に断った。いっしょに出掛ける事が嫌なわけじゃない。ただ、ダラダラと即決しないあのショッピングスタイルが気に入らないだけ。しかも、遙の水着が目的なら尚の事だ。あの売り場で待たされる程、嫌な罰ゲームはない。

そういえば、明日だったな……

準備の為、物置から2WAYのショルダーバッグを持ち出し、バスタオルや海パン、着替え達を小さくまとめて詰め込んだ。

これでいいな、あとは……

自分の机の引出しから、今まで一度も恵まれたことのない中折れ財布を取り出し、中身を確認した。そしていつものため息を吐く。

お前はいつも質素だな……

そう心で呟き、手の甲で軽くぽんつと財布を小突いた。あとは明日、約束している待ち合わせ場所に行くだけ。そして椅子に腰掛け物思いに耽るように、明日のシュミレーションを頭の中で想像していた。しかし、俺の認識では、あの姉妹の性格はまだまだ未知数で、予想のしようがなかった。つまり、明日はノープラン。その時々判断に委ねるしかない。なんであれ、梅田の主張を大切にするだけだ。

準備を済ませると、PCの電源に手を伸ばそうとした。だが、例の夢がまだ尾を引いていて、途中で体を硬直させる。あんな夢は、所詮俺が勝手に作り出した妄想に過ぎないと、振り払うように頭を左右に振った。そしていつものようにログインを開始する。

またか……

アイディスプレイには、また池の傍で呆けている映像が映った。どうやら、AIはここがお気に入りようだ。毎回何がAIの気を引いているのかは分からないが、とりあえず記憶を遡ってみる。

なるほど……

あれから、一組のペアレンツとずっと行動を共にしていたようだ。そのペアレンツは、このギルドを発足したジオをバースした二人で、イーサ・カトックとリド・アステートと名乗った。とても息の合ったペアレンツ。父親役のイーサは、小柄でアサシンのように立ち回りが素早く、鋭敏な感覚の持ち相手の行動を見定める冷静な判断をする人。それと、自分の動向をさとられないように、黒い前髪が鼻先まで達し、その隠された眼差しはまるで物影に潜む虎のようだ。しかしそんな風貌とは裏腹に、ジオより子供っぽいハスキーヴォイスで、言葉の端々に関西住民であると主張していた。格好は、身軽で動き易い柔道着で、襟元からちらりと見える鎖帷子の様な素

材が黒光りしている。相方のリドは教会のシスターのような格好で、清楚な服飾のわりに大きく開いた胸元には、恥かしそうにシルバーの口ザリオが乗っていた。それにしても、一見優しそうな顔から発せられる甲高い声のおかげで、キャッキヤと騒がしく少々緊張感に欠ける。でも、その反面戦闘中はイーサを阿吽の呼吸でサポートして、かゆい所を指示される前に処理してしまうほどの行動派。そして薄っすらと白いアイシャドウの瞳は真剣で、格好よく見えた。だが、それでも忙しい口数は覆い隠せないぐらい印象に残ってしまう。他の人がどう思つかはともかく、俺としては好感を持てるペアレんツだ。それにしても、こんな対照的なペアレんツと、一体何をしていたのかと更に記憶を辿る。

この集落から少し離れた場所に、名もない小さな洞窟がある。最近そこに集結しているウルフ族の話が噂されていた。要するに、この情報の裏づけ調査をしていた。そして状況に依っては殲滅も視野に入れて行動していた。

「グランちゃんは、あたしの後ろに居てねー」

「あ、はい」

初めて戦闘になるかもしれないと思うと、動きがギクシャクして心拍数も自然と高鳴っていく。

「ま、適当に遊んでくれてええで」

「肝心なことは、俺っちとリドでやるから」

集落の池の傍で誘われた時から、この二人は初心者俺をまるで友達のように扱ってくれた。ジオは責任感が強いせいか、これまであまり会話の内容に楽しむという感情を、感じたことはなかった。噂の洞窟まで歩いて向う途中、メンタル面でもサポートされてる感じで、とても助かっていた。風ひとつない草原を10分ほど移動すると、洞窟の入り口に到着した。来た道を振り返ると、視界には集落の姿はまったく見えず、ただ広大な草原が広がっているだけだった。リドの後を気遅れしないように追いかける事と、イーサの笑いに話を傾けているうちに、いつの間にかこんなに遠くまで歩いて

いた。

「さて、着いたな」

そんなイーサの言葉を他所に、リドは周りをキャツキャと飛び跳ねるように喜んでいた。

「お前、ちつとは緊張感を持ちいや」

「今日は新人さんもいつしよなんやで？」

イーサはピクニック気分のリドを、それとなしに注意するがまったく動じず

「グランちゃん、戦闘初めてなんだよね？だよね？だよね」

「楽しみでしょ？でしょ？」

と俺に話掛ける。さすがに呆氣に取られた俺は、苦笑いした。

「ほれ、グランも困ってるやる？」

再度、注意を促すがまったく効果なし。

「そんなことないもんね」グランちゃん

どう返事しようか迷ってイーサの顔を見ると、呆れてているようだった。

「好きにしてくれ」

「ほな、行くで」

そう言つて、気持ちを切り替えるように洞窟の中へ進み始めた。相変わらずのリドと俺も、それに続くように後に付いて歩いた。

洞窟の中はひんやりとして、嫌でも恐怖を植えつけられてしまいそんな雰囲気、俺はただただこの二人から、離れないようにする事だけで精一杯。それに、モンスターが存在を確認もしくは殲滅が目的の為、むやみに明りを灯すことができない。そのことがより一層恐怖心を煽った。でも、所々に誰かが設置した松明に火が灯っていて、なんとかメートル先ぐらいまでは確認はできていた。しかし、こんな状況でもリドは、声を発しないものの明るく振舞っている。正直、今の俺には有難く、頼もしく思えた。それにしても、俺の装備は貧弱だ。防具は以前のままで、武器は有って無いようなこの短剣ひとつ。いや、短剣というより果物ナイフと言ったほうが正

確だろう。でも、そんな物でも固く握り締め、小刻みに震えていた。その震えを止めようと、もう片方の手で押さえるがまったく意味を成さなかった。しかし、そんな俺の状態などお構いなしに、先頭を歩くイーサはどんどん奥へ奥へと進む。途中いくつか分かれ道があったが、そんなものなど気にせず進む。ただ、分岐点のときには必ず、リドが俺の背後に回り、後方の安全を確認していた。その時の俺は、そんなリドの行動など気にも止めず、前を歩くイーサの動向だけに集中していた。このときＡＩが操作していたとはいえ、忠実に自分の性格を再現していることに驚きであり、悲しくもあった。かなり奥まで進み、曲がり角に差し掛かった時、イーサが突然足を止め、姿勢を低く壁に寄り添うようにした。それに釣られて俺も身を小さくした。リドも足を止めるが俺の肩に手を置き、背中越しにピョンピョン跳ねて小声で

「なに？なに？いる？いる？」と楽しそうだ。

「まあな」「でも、大したことあらへんかも」

「ボスらしいやつが、居るには居てるけど……」

しかし、イーサの顔は真剣だった。曲がり角の先へ、目を閉じ聞き耳を立てている。

「2、3、4……6匹つてとこやな」

俺にはまったく気配すら感じられない。それどころか、リドが先程からぴったりと背中に密着していて、それが気になって仕方なかった。

なんとかして……

リドが俺の左肩に顎を乗せるように耳元で

「ふん」と答えた。

ふと顔を向けると、出会ってから一度も見ることがない真剣な表情をしていた。まさにそれはこれから戦闘が始まることを予感させていた。イーサはリドに何かを合図して、そしてリドは理解したように頷いた。

するとリドは俺に、小声で耳打ちした。

「ちよつとの間、あたしから離れないでね、お・ね・が・い」
その言葉に俺が頷くと、リドは素早くスキルを発動させた。それと同時に、薄っすらとリドの周りに霞のような光が漂い、通路を照らした。俺にはとても不思議で、神秘的な光景に見えた。恐らく、これがこのゲームで初めて見る魔法だと想像できた。しかし、どんな効果があるかは、まったく分からない。ただ、その魔法は一種類だけではなく、連続して発動させていることは、なんとなく判った。そしてイーサは一人洞窟の最深部へ突入した。しかも俊足な早業で一匹二匹と倒していく。俺はそれを息を呑みじつと見入っていた。しばらくして、イーサが過半数撃退したのをリドが確認すると、まるでミュージカルでも始めるように両腕を大きく広げ、胸高鳴らせる躍り声を發した。

「グランちゃ〜ん、アクティブタ〜イム」

「スピリット、レッツファイト！」

「へ？」

何がなんだかオドオドしていると、後ろから両手で強く押された。そのまま勢いよく前に踊り出ると、唸り声を上げるモンスターが正面で威嚇をしていた。そのモンスターとは、ウェアウルフと呼ばれている狼の獣人。体全体を狼の固い毛で覆われ、エキスパンダーのような筋肉で二足歩行。指先には鋭い爪が今にも獲物を引き裂かんとうずうずしている。更にその形相は夥しい牙が大きな顎から突き出し、陰しく光る猫科独特の眼は、一瞬の隙も見逃すまいと睨み凝視している。その姿を目の当りにしたとき、俺は足元から氷付くような恐怖に囚われた。CGの精度が高い上に、これほど生々しい姿は、今までどんなゲームでも感じることもなかった生命の窮地というものを、思わずにはいらなかった。

「ほらほら、そんなことじゃオオカミさんに食べられちゃいますよ」

俺は口をぱくぱくと開いて話そうとするが、竦んで声が出ない。そして額には脂汗がじわりと滲み、構えようとナイフを前面に出す

が、大きく振るえ体が硬直して動かない。その間も、ウェアウルフは左右に動き、俺の急所を狙ってまったく目線を外さない。宛ら、蛇に睨まれた蛙のようだ。

「パパ、これ、駄目かしら？」

俺と対峙しているウェアウルフより、一回り大きな相手と交えていたイーサは、ちらりとこちらを見る。

「こつち片付けたら、そつち行くから、それまで気張っててや」

「それと……」

「パパはやめてくれ、俺はそんな歳とちゃう」

なんとも余裕綽々とした口調で、楽しんでるようだ。

「はいはい、待ってまゝす」とリド。

暇なのか、引きつった俺の背後にリドが近寄り

「ねえ、ねえ、そのナイフでチクツとしちゃいなよ」

「あ……ああ……」

漸く出た言葉だった。そして、どれだけ頑張ろうと一步を踏み出そうとしても体が動いてくれない。それにしても、ウェアウルフも一向に動きを見せない。

なぜだ……

こんな怯えきった俺など、簡単に倒せるはずなのに……

このとき気持ちの余裕もなく気付きもしなかったが、後々で聞いた話だと、どうやら後ろでリドがウルフに対して見えない圧力を掛けていたらしい。それによって、何度も襲うタイミングを逸していたようだ。そして、もしその援護がなかったら、あつと言う間に殺されていたことも聞かされた。情けないがこれが俺の現実だった。

イーサは、先ほど相手にしていたウルフを倒すとゆっくり俺の横に歩いてきた。

「どうや？」「初めはみんなそんなもんや」「だけど、これがでкинようでは話にならん」「いつまでも待ったる、頑張つてや」

そう言っただけで後ろに下がった。そしてリドと雑談を始めた。

すると驚いたことに、より一層強固な眼で、ウェアウルフが小さ

く掠れた言葉を口にした。

「お前……新人か……俺も……なめられた……ものだ……」

「まあいい……こんな……茶番……早く……終わらせよう……」

「早く……殺せ……そしていつか……この屈辱……お前にも……」

この言葉を聞いたとき、おぞましい程の憎悪を感じた。そうだ、相手はモンスターでも中身はAIか人間なのである。俺は居ても立っても堪らず、必死に切掛かった。それはもうでたらめな太刀筋。しかし、ウェアウルフはギツと眼を見開いたまま抵抗もせず、ただ無防備に切り刻まれ地面に倒れ込んだ。急所を狙うとか、そんな技など知るはずもなく、後に残ったのは必要以上に惨殺されたウルフの血溜まりと、無造作に散らばった肉の破片、そして死体。自分の手や体中には返り血がどろりと滴り落ちていく。その生臭い液体を見て、吐き気が込み上げてきて、地面に崩れ落ちるように這い蹲った。

なんなんだいったい……

これって、ゲームだよな……

「はは……はははははは……」

気が狂いそうで、なぜか自然と引きつった顔で笑っていた。それはとても異様な光景。イーサとリドは全てが一瞬の出来事で事態を把握できていないようだ。しかし、この凄惨な現状を見て心配になり俺に駆け寄ると、事の詳細を聴こうとする。しかし、俺はしばらく何も口から言葉が出せなかった。動揺が動揺を呼び、そして耐え難い苦痛が言葉にさせなくしていた。何より、あのウルフの眼がトラウマになるほど印象的で、忘れ去るうにも焼き付いて離れない。これがこのゲームの戦闘システムだと思うと、手や足の震えが止まらなかった。

そんな血の気が引いた顔色に、吸い付くような視線を注いだイーサは、とにかくこの場から俺を連れ出すようリドに指示した。それは別段取り乱した口調ではなく、実に冷静にそして日常平然と起きうる事のように。その指示に頷いたリドは、俺を優しく包むように抱きしめた。そして、また魔法のようなスキルを発動させた。その間、俺は強張った顔や体に、心地よい人肌の温もりと包むような優しさが混じり合った感触で、徐々に緊張を緩和させていった。それと共に顔は安らいでいき、そのまま眠るように意識を落とした。

その後AIは、初ログインしたあの離れの小部屋で、設置されたチーク製アンティークベッドの上で、目覚めることとなった。靄の掛かった朝陽が、時間とともに昇り、ひとつだけある小窓から容赦なく射し込む。そしてその窓の向こうからは、現実世界でたまに聴く、鳩が胸を鳴らすモーニングコール。しかし、どうやらリアルの俺同様に、AIの目覚めもあり良いものではなかったようだ。リアルの俺は、自分が作り出した幻想の悪夢に。そして、AIは苦痛とも言える精神疲労を抱えていた。まさか、ログインして更に辛い思いをするとは考えもしなかった。重複した精神の苦痛、これは経験しようにもできない事だ。その後、俺の分身であるAIは、足に重りが付いたような歩きでギルド本部の建物へ向っていた。ゆっくりと近づくにつれ、ウッドハウスの中から数人の話し声が聞こえてくる。

「ふむ……それで？」と微かにジオの声。

その会話の周辺を囲むように、リドの落ち着きのない声も薄っすらと聴こえる。

「もうちょい、様子を見てみないとほんととも言えへんけど……」

「ちっと、影響受けすぎとちゃうかな」とイーサ。

「ねえ、あたしはかわいいと思うけど、そう思わないかな？ かな？」

俺のフォローしてるようなリドの発言は、いまいち説得力に欠けて聞こえる。中に入ろうとして扉に手を伸ばしたとき

「どのみち、今の段階でそんなザマでは、先は知れている」

「まあしかしあれやな、結論を出すにはまだ早いんとちゃうかな」

そのジオの会話が聴こえたとき、A Iは扉を開けることをやめた。特にプライドなどなかった。いや、なかったはずだった。でも、心の中で何かが砕け、そして足場を失っていた。なんとも意外な場面で見つけた、他人にはなんの価値もない宝物。今まで磨きもしなかったそんな物が、ゲームの世界で発見する事になろうとは。そしてジオとの間に、太い絆で繋がっていると思っていた俺の心情は、単なる飾りに過ぎない紛い物だと思い知った。

今後どうしていいのか、どうするべきかゆらゆらと足を引き摺りながら、いつもの池の場所で立ち尽くしていた。

第二章 最強アイテムは夏 <math>1t:7gt</math> ;

複雑に絡み合った心境、そんな記憶を一刻も早くアウトプットしたいように、AIはこの池の前にいた。そして中身を待っていたようにAIは俺と交代する。池には蓮が所狭しと葉を広げ、その隙間には小さな蕾がひとつ。AIはこれが気になっていたのだろうか。AIから記憶の引継ぎが終わった俺は、少々日差しが雲で遮られるこの空模様の中、何をしようかと考えていた。

するとギルドの方から流れるような歌声と賑わいが聞こえてくる。俺はその声に惹かれるように向う。

・
・
「風を感じる〜この世界〜」

・
「リアルと変わらない〜厳しく優しく触合える〜人」

「締付ける心〜解きほぐす〜何かがここにはある〜」

「だから判り合える〜」

「胸いっぱい〜詰め込んで〜」

「誰もが〜大切なものを〜取り戻し〜目が覚める〜」

・
「今〜このひとときを〜」

・
「永遠な安らぎで〜ありますように〜」

ギルドの掲示板の前で、バイオリンを巧みに奏でる少女と、その隣で気持ちを込め、手や表情、しぐさを使い歌う少女。その歌詞は、リアルの世界で聴いたことのない歌。それと、この場所では狭すぎるほどの観客。100人、いやもっと居るだろうか。この物々しいキャラ達は、まだ俺の知らない地域から集まってきたようだ。そして、物静かにその歌を聴き入っていた。俺も同様にこの雰囲気吞まれていた。

二人の少女はよく似ている。違うのは、キャラの着ている装備と、俺が感じた印象。

そう、例えるならあの姉妹のような。

まさかな……

歌い手の少女は歌い終わると、皆が聴いてくれたことに満面な笑みを浮かべ、バイオリンの少女は、軽く会釈をした。そして自己紹介をする。

「皆さん、あたし達の歌を聴いてくれて、ありがとう」

「先日、始めたばかりの メリット・ホワイ ス と、隣で楽器を弾いている ミュール・ホワイ スです」

「二人そろって、よろしくおねがいしまーす」

彼女達がそう言うて共に会釈すると、集まった人達は拍手をして歓迎した。みんなが笑顔で拍手をしてくれているのが、嬉しかったのか二人手を取り、向かい合って喜んでいる。

その時、偶然にメリットと名乗った少女と目が合う。するとメリットはミュールにそっと耳打ちして微笑んだ。思いを同じくしたように、二人は気持ちを落ち着かせ集うキャラと向いあう。賑わいの静まるタイミングを計らい、腕に抱いたバイオリンはヴォイスコマンドによって収納、そして目を閉じ深く深呼吸する。次にぱっと目

を開くと、両腕を軽く広げ静かに静かに歌い始めた。メリットはその歌に合わせるように、ゆつくりと両手に掴んだ半透明の煌く羽衣を靡かせ、優雅にそして繊細に舞う。

・
・
「そう、始まりはいつも突然に」

・
「ときめく暇さえ与えてくれない」

「私の胸に、未来永劫拭い消す事のできないこの場所」

「分けてくれたこの恋心をずっと抱きしめていくでしょう」

「いつまでもいつまでもその優しい眼差しを」

「見つめていたい」

「いつまでもいつまでもこの包まれる温もりを」

「大切にしたい」

「もう、それだけでは充たしきれないこの思い」

「今すぐあなたの全てを」

「手に入れられるなら」

「私……」

・
・
・
ミユールは、まるで赤道直下の国のカラフルな民族衣装で褐色シヨートヘア。両サイドには束ねた髪が胸元まで伸びている。そしてその歌声は、大空へ真剣な思いを投掛けるように、歌い聴かせる。メリットは、踊るたびに跳ね上がる長く金色に輝く髪と、所狭しと漂う羽衣、藍く肌の露出が多いチャイナドレス。そんな二人は、

観る者の全てを引き付けていた。皆は無防備に耳を傾け、聴き黙る。俺は俺で、過去に共通するような思い出を、掘り起こしながら聴いていた。

しばらくして、このステージが終わると群集は、おおつと言う声を上げ賞賛の拍手で称えた。ミユールとメリットはその声に答えるように、何度もお辞儀や手を振る。そして抱き合って歓喜しミユールは目に喜びの涙を溜めていた。集ったキャラ達は、良いものを見せてもらったと二人を取り囲んで、握手をねだった。先ほどまで下りきった心境の俺は、その足しても溢れ余るイベント事に救われた思いがしていた。救われたというより、歌という圧縮ファイルで強引に深層意識に押し込んだと言うべきだろうか。とにかく有意義な事であったのは間違いがない。そして何より、いろんな物を吹き飛ばしてくれた。その感謝の思いが、彼女らのもとへ足を動かさせ手を伸ばす。伸ばした手の先には、ミユールが手を差し伸べぎゅっと握手し、更にもう片方の手も添え微笑んだ。

あたたかい……

そう感じた瞬間、恥ずかしさが顔を熱くさせ、不意に手を振りほどいてしまった。

「あ……ごめん」俺は目を背ける。

彼女は、その行動にはっとするが

「ううん、全然」

そう言って、ミユールはまた笑んだ。

その後、握手をせがむキャラが前へ前へと押しかけ、この群集から追い出されるように揉み出されていく。その間、彼女たちの会話やキャラ達の話が耳に入る。どうやら、前日に掲示板で呼びかけて開催したイベントだったようだ。そしてその趣旨は、彼女たちがこのゲームを始めた記念として、何かやってみたいという思いと、N

Ｌ（注目度）稼ぎだった。

正直、羨ましく思えた。

考えてみれば、俺と彼女たちは同期。しかも同じこの集落から始めた。しかし、今の俺と彼女たちとは大きな差があると感じる。このゲームは、全てのステータス数値を確認することができない。だが、そんなもの見えなくても、差は歴然としている。この光景を見てそれは確信できる。群集に囲まれる彼女たち、それから弾き出された俺。

悔しさと、不甲斐なさ。その果てには存在意義さえ問いたくなる。ただし、その程度のことなら我慢できる。それよりも今置かれているこの状況のほうが辛い。

『孤独』

宴の後の静寂は寂しく、そして現実逃避した時間分の代償として数倍の重石となって背負い直す。

ジオから役立たずのレッテルを貼られ、イーサとリドの前では醜態を晒した。この現実是不変ならない。押し込んだはずのファイルが徐々に解凍されていく。

「こんなゲーム……つまんねえ……」

口に出して言いたかったわけじゃない。ただ自然とそう声に出してしまった。そして行く宛ての思いつかない俺は、ＡＩの好きなこの池の前で何をするでもなく、ただただ呆けていた。水面に映る雲、時折反射して視覚を刺激してくる太陽。更には俺を嘲笑うように、水上へ跳ね上がる淡水魚。まったくもって、どうでもいいほど良くなってきたゲームだ。

そんな事を考えて、１時間ほど経過したときだった。

「池、見てて楽しいかい？」

背後から俺に問い掛ける男の声。そう、それは聞き慣れた声。

梅田？……

その声に縋るように振り返ると、純白軽装の鎧にそれを覆うマント、そして所々十字のエンブレム。腰には同じ十字の刻印が施されたシヨートソード。流れる尖った髪は敵を警戒するような真紅、しかしそれを中和するようなグリーンの瞳の、とても優しそうな男が、手を腰に立っていた。

「え、えつと、その声ひよつとして……」

その男はほらほらと、自分の顔を指差し

「うん、僕だよ、梅田だよ」

俺は、このキャラの中身が梅田と判ると、先程までの不安で沈んだ気分から打って変わって、とても嬉しく安心した気持ちになった。それは、こんなに親しくプロトコルで繋がった友人が、この世界に居た事を思い出したからだだった。

しかも、その友人が俺に会いに来てくれた。彼女らのとき同様に救われた思いだった。

何も見出せない暗闇で、一筋の光りが瞬く間に広がった。

それからの俺の口調は軽く

「おお！」「てか、名前言っちゃっていいのかよ」「でも、ほんと来てくれて嬉しいよ」「ところで、キャラ名なんだっけ？」「すごいな、その格好」「強そうでいいなあ、俺なんてこれだぜ」

梅田も会えたことが嬉しかったようで

「あ、でもここなら誰にも聴かれてないだろうし」「うん、苦労したよ、以外にここ遠くて」「あれ？メールで言ってなかった？、アスラン・ウォルズだよ」「うん、いいでしょ」「最初は仕方ないよ」

それから、いろんな話を話した。それは時間を忘れるぐらいに

楽しく、この世界に来て、初めて感じることもあった。

そしてお互い会話のネタが尽きかけた時、梅田が質問する。

「ところで……ここで何してたの？」

あまり聞いてほしくない問いかけだったが、俺は渋々それまでの経緯を話す。それを梅田はふんふんと聴き、少しして口を開く。

「確かに大変な話だね」

「うん……」

一時も早くアップデートしたい。そんなファイルは誰にだってあるだろう。俺は今まさにそれを実行している。時間は掛かったけど、梅田は不具合というべきダークな部分を修正変更して、アップグレードに値するほどの更新をしてくれた。つまり、フリーズし掛けた情事を円滑に処理できるように、対処法方をいくつか教えてくれた。しかし、ジオの件だけは未処理に終わったが、一言こう付け加えた。

「敵との事があるけど、一先ずは置いて、イーサさんとリドさんに相談してみたらどうだろう」

暫し俺は考え込む。

ジオはあのペアレンツと同期だと言っていた。あのペアなら、ジオが俺に求めていた事も詳しく知っているかもしれない。それにある意味、ジオと直接対峙するより、その方が気が楽なのは明らかだった。

「そうだな……」

顔が曇って見えたのか、梅田は俺の肩をぽんつと軽く叩いて

「そんなに思い詰めなくても大丈夫だよ」

「オンラインで、相手が人間でも所詮はゲーム」

「いざとなれば、止めたっていいんだからさ」

「どうせなら、楽しくやろうよ」

そうだ、そうなんだ。当初は俺もそう思ってたはずなんだ。ただ途中で、安易に放棄する事が気に入らないと、有って無い正体不明なプライドがそう囁いた拳句、招いた結果がこうだっただけ。前の俺なら、とっくに解約していただろう。あの頃より、ほんの少しだ

け大人に向って成長してはいるが、根本的に何も変わっちゃいない。だったら、それはそれで一つの方法だと考えればいい。それにこのゲームを止めれば、全ての事から開放される。リアル経験値は記憶消去でもない限り、減る事はない。ただし、そうした場合でも、もう一人の俺、つまりA Iは存在し続ける。ただそれだけだ。開き直った人生送ったって、誰も文句言わないだろうし、言われる筋合いもない。

「ま、そうだな」

その言葉を吐いた俺は、全ての義務から逃避することに、なんの疑問も持たなくて良いのだと、結論付けた結果だった。

しかし、どこか気に入らない……

「それより、明日のこと頼むよ」

「ああ、わかってるよ」

第二章 最強アイテムは夏 & 1 t : 7 & g t ; (後書き)

私の作品、いかがでしたでしょうか？

おそらく文章が幼稚すぎて、苦痛だったりしませんでしたか？
それでも読んで頂けたことに、心底、感謝感謝の思いです。

そこで、恥を忍んでお願いがあります。

愚痴、文句「こんな小説を投稿すんな！」でも構いません。
こんな私に、何かご意見をお聞かせください。

よろしくお願いします。

第二章 最強アイテムは夏 < ; & g t ;

リアル友達である梅田。そして、そのキャラの名はアスラン・ウォルズ。二人はゲームの中で、リアルとは違う新鮮さに酔いしれるように自然と会話も弾んだ。同時に、あの堅苦しいジオのレクチャーと違ってお気楽で判り易く、その上このバーチャル世界の裏話など貴重な情報も教わった。

裏話、言い替えばキャラの効率のよい成長と、システムをうまく活用した裏技といったところだ。

要するに、戦闘時なら攻撃する武器に精神を集中、そしてちょっとした闘争心で攻撃力が上がり、防御の時は何かしら守るような硬いイメージを思い浮かべればいい。だが装備はやはりNL（注目度）が重要で、以前ジオが言っていた通り、作りたいと思うその物をリアルで細かく記憶して、ゲーム内で思い出せば製作できる。ただ、どんなに強そうな装備を製作しても、リアルの体や精神が弱くてはただのデザインだけで飾りに過ぎない。精々、威嚇程度にしかない。しかし、リアルも装備も整っているキャラは強く、自然とNLも上がり英雄のような存在になっていく。そして思いを同じくしたキャラや、親しくなった友人達が集うようになる。

そもそもオンラインゲームの醍醐味は、不特定多数のキャラと知り合い協力して楽しむ。それと珍しい装備や他人の気の引くアイテムを持ち、現実世界ではなかなか叶え味わうことのできない優越感や世界観を感じることにある。そして何より、孤独を紛らわせてくれる。

ただその反面、誹謗中傷、妬み、嫌がらせなど人間味ある感情を生に意思表示するプレイヤーも存在する。本人を特定できないその匿名性が、それを助長させている。しかしそれは一般社会でも同じ事で、言える人と言えない人との違い。世の中、いくら倫理に反する事でも、それを支持する意見が大多数なら正しく、異を唱える者

は批判を受ける。だから、ゲームの世界とさえど、なんら変わらない。

アスランは掲示板のほうへ振り向くと

「女はいいよねえ」と呟く。

俺も彼女達へ視線を向けると、ちやほやする男キャラでまだ囲まれていた。

聞くと女性プレイヤーは少なく、エリアによっては姫と呼ばれ、信者のように男達を引き連れて行動しているキャラもいるそうだ。だからそれを考えると、この集落の男女比率は異常だと、羨ましそうにアスランは話す。

お互い話すネタも尽き欠けた頃、この場にじっとしているのも暇だから何かしようと、アスランは言った。

「今の俺で、何ができる？」

アスランは、しばらくうんと考え込むと何か閃いたようだ。

「あまりこの集落から出た事ないみたいだから、外へぶらぶらしに行こう」

「そう……だな」

その提案に同意して、まるで付き人のようにアスランの後ろを歩く。

ここから出るのは3度目と、俺は言い訳じみた口調で話すが、アスランはその事をまったく気に止めず悠々と外へ向う。

太陽は傾き、徐々に空を茜色へと染めていく。だが暗くなるまでは、まだ数刻の余裕がある。それにしても、この一面に広がる広大な草原で、何をするのだろうかと疑問に思いもしたが、特にその事を聴こうとはしなかった。

集落から東にちょっと離れた場所に、以前あの女性と夜空を見上

げた小高い丘がある。アスランは、偶然なのか必然なのかそこへ向っている。

俺は後ろを付いて歩きながら、あの晩のことを思いだしていた。初めて会った昼間の彼女もいいけど、月明りに照らされた彼女のほうが、俺にはとても印象的だった。妖艶な大人の雰囲気の中に子供っぽい側面を持ち、素っ気無い態度でもどこかフレンドリー。自覚はないが、おそらく俺の好みのタイプは、そんな女性なのかもしれない。

そう考えていたときアスランは、はたと足を止める。そして前方に居る何かを見つめていた。俺も視線を向けるが、それがなんなのかすぐに判った。

白く袖下の長い衣に赤い刺繍、学生服のようなスカートにニーソックス。そして青白く長い髪とピンクの唇。

間違いない、彼女だ。

また会えたことに、自然と鼓動が高鳴る。

彼女は、まるで無邪気な子供のように笑い、夢中で小さな動物を楽しそうに追い駆け回して遊んでいた。何ものにも囚われず、そして純真無垢でキラキラと輝いた笑顔は、俺の心を奪うに十分過ぎる光景だった。

幾度と声を掛けても反応しようとしないう俺に、アスランは肘でつつく。

「どうしたの？」

「あ、ひょっとして……ほ」

俺は咄嗟に顔いっぱい脈打つ表情で、無駄な足掻きをする。

「いや、あの……その……」

取り繕おうにも言い訳が思いつかず、言語知識の乏しさに思い知らされうな垂れる。

まな板の上の恋

アスランはにやけた顔で、うんうんと頷く。

「青春だよねえ」

「バカ！そんなんじゃ……」

アスランの冷かす言葉に、すぐさま反論しようとするが、どうにも首根っこを掴まれた子犬のようにまったく抵抗できなかった。

人の気配に気付いたのか、彼女は俺たちのほうへ振り向く。そしてそれが誰なのか一旦首を傾げる。すぐに思い出したのか、手を小さく振った。

アスランは戸惑うように「知り合い？」

「ちよつとな」と、少し優越感気味に答える。

俺は、手を振る彼女の元へ歩み寄る。

「よう！」

この言葉が精一杯。恥ずかしさと気持ちを悟られまいとし、それでいて少しでも男らしさを強調しようとした。だが、それでも癖は出る。

そんな俺の内情とは裏腹に、見透かしているのかそうでないのか、彼女はぽつんと返事する。

「ども」

「あの……さあ……」

「なに？」

ちらりとアスランへ視線を向ける。

先ほど足を止めた位置で立ち止まったまま、俺を察して暇を持て余しているようだ。

「次会ったとき、名前教えてくれるって……言ってたよね？」

「そだっけ？」

「そうだよ」

彼女は俺を覗き込みじっと見つめている。そう、それは何かを計っているように。

「そんなに知りたいんだ、私の名前」

試されている？……

「お、俺はただ、その……気になっただけで」

「別に何か疚しい気持ちなんか、これっぽっちも……」

おどおどとした俺の態度が滑稽に見えたのか、彼女はぷつと吹出し、次第に腹を抱えて笑い出した。

「ぷっ、あははは、ごめんね」

「君があまりにも動揺してるから、可笑しくって」

「それにしても、もうやだ、あはは」

とても愉快だったらしく、目に涙を浮べて笑っていた。

どうにも理解し辛い状況。その姿を見て女とは不可解な生き物だと思った。同時に、なにやら弄ばれた気分で面映く、小さな苛立ちを感じた。

「なあ！よく判らんが笑い過ぎだ」

漸く気持ちを落ち着け、彼女は深呼吸した。

「いいよ、教えてあげる」

上から目線の言い方に反意したくなる。

「別に、教えたくないならいいさ」そう言って、俺はあさっての方向を向く。

まるで拗ねた子供。

「もう……」

突然彼女はずっと近寄り、俺の手を胸元へ引き寄せ両手で握る。何事かと顔を元に戻すと、彼女の顔がアイディスプレイいっぱい

に映っていた。

一瞬心臓が不整脈を打つ。

「私はファウ」

「ファウ・ナチュール」

「ファウでいいわ、よろしくねグラン君」

「よ、よろしく……」

動揺しきった俺の眼をファウは交互に確認する。

「目の色」

「え？」

「よく見ると違うのね」

「あ、ああ、うん」

ファウは俺の肩からアスランに視線を移すと

「ほら、友達待ってるよ」

そう言っただけ俺の体をアスランの方へ向けさせ、軽く背中を押した。

「あまり待たせては、彼に悪いわ」

それはファウとの会話が終わる事を意味していた。彼女と出会うまでは、アスランと共に行動することが楽しかった。でも今は、そのアスランの存在のおかげで、この貴重なひとときが終わるのかと考えると、少々疎ましく思えた。

「そう……だな……」

俺は余波惜しむように、また会えるかと尋ねると

「そうね」と、特に気持ちを表情に示さないまま答えた。

そんなファウの表情に、正直寂しく思えてならなかった。そのま

ま彼女は集落のほうへと走って消えた。そして俺は、アスランとぶらりと行動を共にした。

その後、あれこれと何をして、気持ちが上向きになる事がなかった。ただただ、彼女とのあのひとときを惜しむ念だけが、脳裏を支配していた。そして、そろそろ辺りも薄暗くなり、明日のことを話しながら二人ログアウトした。

全ての意識が現実世界に戻ると、夕飯のおかずの匂いが鼻をくすぐった。俺はその匂いの元へ、自然と向った。

階段を降りていくと、玄関には遥と母、そして俺の靴が綺麗に並んでいた。二人は、買い物を終えて帰宅していた。リビングに行くいつものようにTVからCMが流れ、キッチンでは母が晩御飯の支度をしていた。鳥の唐揚げの香ばしい匂い、それと炊飯器からお米が炊き上がる炭水化物が蒸された匂い。そして、いつもの母。しかし、そこへいつもと違う遥が脱衣所から台所へ踊りこんできた。

「どう？大丈夫でしょこれ」

母さんは、はいはいと濡れた手をひまわり柄のエプロンで拭い、遥の姿を見る。そして上下に眺める。

「やっぱり、派手じゃないかしら」と首を捻る。

遥は、食器棚のガラスに映った姿を見ながら、ぐるりと回る。

「これぐらい普通よ」

「そう？……」

その水着姿に、遥の考えている事とは別の事を心配しているようだった。

「それにあさって、もう裕子達とプール行く約束しちゃったもん」

「あら、そうなの」

「達って、何人で行くの？」

「4人」

「女の子ばかり4人？」

「え〜っと……」

珍しく口籠る遥のその表情を、母さんはやはりと見抜いていたようだ。

「男の子2人と、うちら2人……」

俺が見てもそう思うのだから、母さんが気付かないはずはない。それに、明らかにしくじったとでも言いたそうな目をしている。

親の立場として、母さんは窘めそして遥は、ばつが悪そうに頷く。
「本当に大丈夫かしら……そんな真っ白なビキニなんて……」

俺はリビングのソファアに座り、背中越しに母に話す。

「大丈夫だろう、それに子供なんか興味ないって」

そう口にする、如何にも憤怒した足が近寄り、ソファアに怒りをぶつけた。

「痛っ……もう!」

そのまま小鬼は、脱衣所へ退散していった。

俺はそんな遥の姿を、振り返ってにやりとしてみせた。

「平和だねえ」

母さんは俺のその言葉に洪顔で微笑み、また晩御飯の用意に取掛かった。

第二章 最強アイテムは夏 <9>;

しっかりと赤らめた顔。タンクトップから出た肩もひりひりと焼けていた。

石本姉妹と梅田、そして俺。朝から海水浴というイベントを終え、家路に向っていた。結果的にあの緩んだ顔を見れば、無事にミッシヨン遂行できたと見て間違いないだろう。帰り際、姉妹とメアド交換なんて事もしていたし、これでもう俺の出番はないはずだ。

そう、ないはずだった。

少なくとも、この携帯が鳴るまでは……

夕日で染まった商店街の町並みを眺め、何処かへ寄ることもせず歩いていた。出掛ける時には重く感じなかった2WAYショルダーバッグ。その襷が、焼けた肩に擦れるのを気にしながら。

しばらくして、ポケットに差し込んだ携帯から着信音が鳴り響く。すかさず確認。画面には梅田の顔写真。どうせ今日のお礼だろうと通話ボタンを押す。

「もしもし」

「梅田ですけど」

「声のトーンが低い。」

「おう、おつかれ」

「うん……」

数分前の陽気な雰囲気と違って、電波の先に暗雲とした重苦しさが漂う。

「ん？どうした？」

「……ちょっと会って話したい事が」

「今から？」

「うん」

益々下がる口調に、何か嫌な予感を感じさせる。先ほどまで鼻の下を伸ばしていたやつが、思い悩むような声。

ただ事ではないと、指定された待ち合わせ場所へ急いで向う。

小学の頃、母さんが一度だけ遊びに連れてってくれた事のある小さな公園。そこに一人うな垂れた梅田が、街灯の脇で携帯を見つめ佇んでいた。

夕日の眩しさに眉をしかめさせ、日頃の運動不足で弾んだ呼吸を整えながら近寄る。

「お待たせ、で話つて？」

思い詰めた表情で、梅田は自分の携帯を差し出す。

「ヒカル……これどう事？」

受け取った携帯の画面には、亜美から届いたメールの文章が長々と表示されていた。

「読んでいいのか？」と聞くと神妙な顔で頷く。

「うん……」

「えーっと、ん？はあ？」

冒頭3行は梅田へお礼の言葉。しかし、そこから先は全て俺への事が綴られていた。

姉を誘ったのは私の気持ちを試す為。弁当を誰よりも美味しそうに食べてくれた。ヒカル君ではなく、ヒカルと呼べた事が嬉しい。

終いには、私の気を引く態度をしたと書いてある。

「なんだこれ！」

必死に記憶を呼び起す。どう考えても、全て梅田の為にしたことだ。それにいつそんな態度した？亜美どころか綾にだってそんな事していない。この場に亜美が居たら、すぐにでもカバディ攻めしてやりたい気分だ。

「こんなのデタラメだ……ありえない、なに勘違いしてやがるんだあいつは？」

梅田は強引に携帯をもぎ取る。

「うん、でも彼女……いや亜美は少なくともそう思っていない、それに考え方を変えれば、そう思えなくも無いよ」

落ち着かない足、自分が誰を信じたらいいいのか迷っている目。こんな梅田を見たのは初めてだ。携帯を持つその手は、今にも壊してしまいそうなほど硬く握り締められ、挑発しているように見えた。

「おいおいちよつと待て、なに言ってるんだ？これは彼女の勘違いで、それに俺を疑うなんてどうかしてるぞ梅ちゃん」

「どうかしてるのは、ヒカルのほうじゃないか？」

この言葉を聞いた時、どんな大声よりズドンと心に響いた。

親友であるはずの梅田から掛けられた疑惑。他の誰よりも一層の寂しさを感じた。深呼吸をして上を向くと、茜色が刻一刻と変化し、街灯にはそろそろ明りが灯ろうとしていた。そして心の中で呟く。

なんで……

惚れた女の意見を尊重したい気持ちは判らなくもない。だけど、それを鵜呑みにできるほど俺達の友情は柔な物なのかと問いたくなる。確かに、まだ出会って数ヶ月。強固な物になるには日が浅いかもしれない。それでもあのとき実感できたんだ。

こいつは『親友』なんだと。

だからここは断固とした意思で臨むしかない。そもそもミツシヨンで一番大事なのは、こいつとの友情を壊さない事だ。この際、あの姉妹と俺の仲が悪くなるのが知ったこっちゃない。でも、できれば梅田と亜美の仲はうまくいってほしい。頭の中でいくら考えても一向に天秤の針は安定しなかった。なら少なくともこの疑いだけは晴らそうと思った。

「とにかく全て勘違いで、俺にその気はない！だからこれ以上言うようがない、OK？それでも疑うなら勝手にしろ！」

まだ躊躇っている表情に苛立つ。

「本当に？」

「しつこいな、無いたら無いんだ！」

「う、うん……わかったよ、でもこれどう返事したらいいだろう？」

適当にと言いたいところだが、俺が原因で起こってしまったのは事実。それに、返事次第ではまた変な疑いを受け兼ねない。ここは冷静になって考える必要があると思った。

数歩先にガーデニングで積まれた煉瓦を見つけ、そこにへたり込む。

こんな事になるぐらいなら、無理して行くべきじゃなかったと今更ながら後悔していた。それでも、あの子からポメラニアンのごとく吼えられていたからだ。

「私の誘い断って、あの子達と遊びに行っちゃうんだ……ふん」

「どうでもいいんだね、私との約束なんて」

「大体さく約束したのって、私のほうが先よね？」

「そうなんだくそれでも行くんだ？」

「その日って、遙ちゃん暇してるか聞いてみようかなあ」

悪夢だ。正直これ以上思い出したくない。それに勘違いとはいえず、道化の役までしてその気もない女のせいでこんな状況になったなんて、口が裂けても言えない。これ以上大事になるのは非常にまずい。何処でどう彼女の耳に入るか分からないからだ。しかし、元々これは梅田と亜美のこと。いくら応援したところで所詮は本人同士で決着すべきだ。ならこれ以上介入するのは彼、そして自分にとっても良くないのではと考えるのが妥当だと思った。

「なあ梅ちゃん、悪いけどこれから先は自分の判断で考えてくれ。はつきり言って俺もどうしたらいいか分からない」

その場に座りこむ梅田。

「そ、そっか、そうだよね……」

希望を失うように肩を落とす。

いくらサーチしてもこの場面に合う掛け声は一つしか見当たらない。やはりあのとき遙が言っていた言葉。

「どうなるか分からないけど、とにかく自分の素直な気持ちをぶつ

けるしかないと思わないか？」

声が届いていないのか、うな垂れたまま反応を示さない。

それにしても、溜息の出る話だ。亜美はなぜこんなメールを送ったのか？しかも梅田に。自分に好意を抱く人物にこれを送ったらどうなるかぐらい予想はつくだろう。拒否するにしても、これはあまりにもナンセンスだ。

梅田はすくつと立ち上がり「帰る」と一言だけ呟いて歩き始めた。その後ろ姿は、午前のあいつからは欠片も想像できないほど痛々しく、そして惨めに見えた。そして慰めの言葉を言えない自分を情けなくも思った。

帰り道、ずっとやつの事を考えていた。気晴らしにカラオケとか何処かへ連れ出しても良かったなど、あれこれと策を練るがどれも現実逃避でしかない。最終的にこれで良かったと勝手に決め付けるしかなかった。

なんであれ、今回の件であの姉妹と俺達の間、大きな溝ができるのは間違いない。今は夏休みだから毎日顔を会わせることはないが、明けてからの事を考えると気が重くなる。

高校入学して、葵から告白され悩み驚いた。あの日、断ってから落ち込んだ顔など微塵も見せず、彼女は暇を見つけては俺を誘いそして世話を焼こうとする。あれから2ヶ月、そんな葵の直向さにちよつとずつ大切な存在へと変わりつつあるのは自分でも判る。下校の時、必死にクラブ活動で走っている彼女は他の子よりも輝いて見えていたし、目が会えば手も振ったりもした。正直、あのときの事を後悔したこともある。でも、その場に流された気持ちで受け止めることはどうしても出来なかった。そんな今では仲のいい友達。愚痴や思ったことを気軽に話し合える。今日でも本当は、彼女と出掛ける約束をしていた。それを無理言ってキャンセルした事を、ほつぺを膨らませて怒っていた。これから先のことを考えるとわくわ

くした気分になる。しかしその反面、梅田の件と照らし合わせると、他人事では居られなくなる。本音を言えば葵と疎遠になるのはとても怖い。

遙もそうだが、葵も最新水着を購入したと言っていた。季節の影響だろうが、行動も活発化して気分も開放的になっていく。聞けば「今年は大胆なデザインが多いかも」らしい。冗談なのか本気なのか「オオカミさんになっちゃ駄目だよ」と笑いながら言っていた。負けじとこう言ってみた。

「絵本のオオカミさんは、ストーリーの為にいつもお腹をすかせておくもんさ」

そう言ったあと、葵は腕にぎゅっとしがみついてきた。

そのままいつも下校途中「またね」言い合うY字路に辿り着くまで、声無き波長の会話が続いた。

第二章 最強アイテムは夏 <9 >; (後書き)

第二章 完結

引き続き 第三章開始

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3853f/>

Fade-Out

2010年10月11日14時24分発行